

福 岡 市

ARI TA KO TA BE

有田・小田部

第34集

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第651集

2000

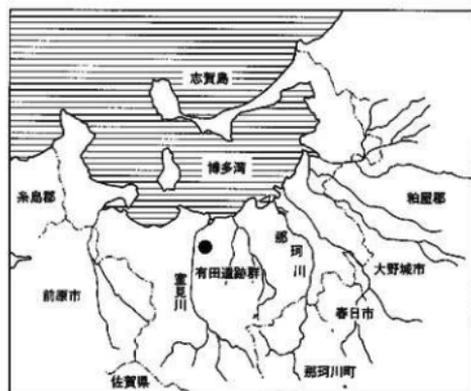
福岡市教育委員会

福岡市

ARI TA KO TA BE
有田・小田部

第34集

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第651集



調査番号 8538-8854
遺跡略号 ART-106-147

2000

福岡市教育委員会

序

福岡市は玄界灘を挟んで、大隈とは一衣帯水の位置関係にあり、古代から大陸文化の受け入れ窓口として栄えて来たところです。

特に本市の西南部に位置する早良平野は埋蔵文化財が数多く包蔵され、早良王墓で有名な吉武高木遺跡や弥生後期の環濠集落として国指定史跡となっている野方遺跡など、重要な遺跡があります。

この平野の北部に位置する有田遺跡群は、旧石器時代から近世にかけての複合遺跡で、昭和41～43年にかけての区画整理事業に伴う調査以来、現在まで196次を数える調査が行われ、弥生時代初頭の環濠集落や古墳時代の集落、奈良時代の早良郡衙と思われる建物群、戦国時代の小田部城に関連する濠跡などの重要な遺構が発見され、学界の注目を集めています。

今回の報告は有田遺跡群で、昭和60年度に行われたもので、弥生時代から古墳時代にかけての住居跡が発見されました。

今回の調査に際しましては、地権者を始め、関係各位の皆様にご多大なご協力をいただきました。心から感謝の意を表します。併せて本書が、埋蔵文化財保護の理解を深める一助となり、また研究資料としてご活用いただけることを願うものです。

平成12年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 西 憲一郎

例 言

- (1). 本書は、福岡市早良区有田・小田部・南庄地区における開発に伴い、福岡市教育委員会が昭和60年度に国庫補助を受けて実施した、第106次調査の報告書である。
- (2). 本書では、有田・小田部台地上の遺跡を一連のものとし、広義の有田遺跡群とする。
- (3). 調査は山崎龍雄と米倉秀紀が担当した。
- (4). 本書に掲載した遺構の実測は、担当者の他、清原ユリ子、金子由利子が行い、写真は担当者が行った。遺物の実測は山崎が行い、鉄器については埋蔵文化財センターの比佐臨一郎が行った。
トレースは山崎と大賀順子、大神真理子が行い、遺物の写真撮影は山崎が、鉄器については比佐が行った。
- (5). 遺構記号は、福岡市の遺構基準によっている。
SA……溝、SB……掘立柱建物、SC……竪穴住居跡、SD……溝状遺構、SE……井戸、SK……土坑、SR……土壇墓・木棺墓、ST……壘棺墓、SP……ピット、SX……その他の遺構
- (6). 本書に使用した方位は磁北である。
- (7). 本書報告の遺物・図面・写真類は、すべて本市の埋蔵文化財センターに収蔵保管する予定である。
- (8). 巻末には付論として有田遺跡群第177次調査(「有田・小田部28」福岡市埋蔵文化財調査報告書第513集、1997年)出土の青銅鏡に関する分析報告を東京国立文化財研究所保存科学部の平尾良光、鈴木浩子両先生より頂き、今回掲載することが出来た。
- (9). 本書の執筆、編集は米倉の協力を受けて山崎が行った。

有田遺跡群第106・147次調査概要

調査 次数	調査 番号	遺跡 略号	調査地番	(m ²)		申請者	調査期間	事前 審査番号
				平面面積	埋蔵面積			
有田 第106次	8538	ART-106	福岡市 早良区小田部5丁目162	706	706	毛利 三男	昭和60年11月8日 ～61年2月14日	55-14-165
有田 第147次	8854	ART-147	福岡市 早良区有田2丁目7-7	739.6	228	高田 潔	平成元年1月24日 ～3月31日	63-2-51

本文目次

	本文頁
第1章 はじめに	1
1. 調査に至る経過	1
2. 調査の組織	1
第2章 遺跡の立地と歴史的環境	2
1. 遺跡の立地	2
2. 歴史的環境	2
第3章 第106次調査の記録	5
1. 調査の概要	5
2. 遺構と遺物	5
①. 竪穴住居跡	5
②. 掘立柱建物	25
③. 土坑	28
④. 木棺墓	33
⑤. その他の遺構	33
⑥. 溝状遺構	33
⑦. 住居跡状遺構出土遺物	35
⑧. ピット出土遺物	35
⑨. 包含層出土遺物	39
⑩. 各遺構出土石器	44
3. 小結	45
第4章 第147次調査出土遺物（追加分）	47
1. 調査の概要と出土遺物	47
付論 有田遺跡群第177次調査ST001・002から出土した弥生時代青銅鏡について の鉛同位体比（東京国立文化財研究所保存科学部 平尾良光、鈴木浩子）	49

図 版 目 次

- PL. 1 有田遺跡群周辺航空写真 (1961年撮影)
- PL. 2 有田遺跡群周辺航空写真 (1972年撮影)
- PL. 3 (1) 調査区全景 (北東から) (2) 同全景 (南東から)
- PL. 4 (1) 包含層完掘後全景 (北から) (2) SD01 (南から)
- PL. 5 (1) SC01 (北東から) (2) SC02 (東から)
- PL. 6 (1) SC07 (東から) (2) SC10 (東から)
- PL. 7 (1) SC14・15 (北から) (2) SC14・15 (東から)
- PL. 8 (1) SC12 (東から) (2) SC15 (北東から)
- PL. 9 (1) SC19・23 (南東から) (2) SC19・23 (北東から)
- PL. 10 (1) SC18 (東から) (2) SC02竈検出状況 (南から) (3) SC07竈検出状況 (東から) (4) SC12竈検出状況 (南から) (5) SX01 1号炉 (北から)
- PL. 11 (1) SB01・02 (北から) (2) SB01 (東から) (3) SB02 (東から)
- PL. 12 (1) SB03 (北から) (2) SB04 (東から) (3) SB06 (東から)
(4) SR01 (東から) (5) 同土層断面 (西から)
- PL. 13 (1) SK03須恵器検出状況 (東から) (2) SK04 (東から) (3) SP343遺物出土状況
(4) SP459遺物出土状況 (5) SC01・19出土鉄器
- PL. 14 各竪穴住居跡出土遺物 1
- PL. 15 各竪穴住居跡出土遺物 2
- PL. 16 各遺構出土遺物
- PL. 17 (1) 各遺構出土石器 (2) 第147次調査出土遺物

挿 図 目 次

本文頁

Fig. 1	有田遺跡群と周辺遺跡 (1/25,000)	3
Fig. 2	有田遺跡群調査地点位置図 (1/7,500)	4
Fig. 3	遺構全体図 (1/150)	6
Fig. 4	調査区北側土層図 (1/120)	7
Fig. 5	東側包含層下遺構検出図 (1/150)	7
Fig. 6	SC01・02 (1/60)	8
Fig. 7	SC01・02出土遺物 (1/4)	9
Fig. 8	SC07・10 (1/60・1/40)	11
Fig. 9	SC12 (1/60・1/40)	12
Fig. 10	SC07・10・12・14出土遺物 (1/4・1/3)	13
Fig. 11	SC14・15 (1/60)	15
Fig. 12	SC14・15・18出土遺物 (1/4・1/3)	16
Fig. 13	SC18 (1/60・1/40)	18
Fig. 14	SC19・23とSR01 (1/60・1/40)	19
Fig. 15	SC19出土遺物 1 (1/4・1/5)	21
Fig. 16	SC19出土遺物 2 (1/4)	22
Fig. 17	SC23出土遺物 (1/4)	23
Fig. 18	SC01・19出土鉄器 (1/2)	23
Fig. 19	各竪穴住居跡出土石器 (1/3・1/5)	24
Fig. 20	各遺構出土玉類 (1/1)	25
Fig. 21	SB01~04 (1/80)	26
Fig. 22	SB05・06 (1/80)	27
Fig. 23	各掘立柱建物出土遺物 (1/4)	28
Fig. 24	SK01~04・06~08・10 (1/40)	29
Fig. 25	SK14・17 (1/40)	30
Fig. 26	SX01 1号炉跡 (1/30)	31
Fig. 27	各土坑・SX01 1号炉跡出土遺物 (1/4)	32
Fig. 28	SD01土層図 (1/40)	33
Fig. 29	SD01出土遺物 (1/4)	34
Fig. 30	住居跡状遺構出土遺物 (1/4)	36
Fig. 31	SP459遺物出土状況 (1/30)	36
Fig. 32	各ビット出土遺物 (1/4)	37
Fig. 33	包含層出土遺物 1 (1/4)	38
Fig. 34	包含層出土遺物 2 (1/4・1/3)	40
Fig. 35	各遺構出土石器 (1/3)	41
Fig. 36	包含層出土石器 (1/3)	42

Fig. 37	各遺構出土石鏃・石錐 (2/3)	43
Fig. 38	第106・175次調査区遺構配置図 (1/200)	折り込み
Fig. 39	第147次調査遺構配置図 (1/250)	47
Fig. 40	ピット・包含層出土遺物 (1/4)	48

有田遺跡群第177次付論 図・表・写真目次

表 1	有田遺跡群第177次調査から出土した青銅鏡の詳細と鉛同位体比	51
図 1	有田遺跡群第177次調査から出土した青銅鏡の鉛同位体比	52
表 2	有田遺跡群第177次調査出土単圜銘帯鏡と類似した重圏文系統の鉛同位体比	53
図 2	有田遺跡群第177次調査出土単圜銘帯鏡と類似した重圏文系統の鉛同位体比	53
写真 1	有田遺跡群第177次調査ST001から出土した単圜銘帯鏡	53
表 3	国内出土韓鏡の鉛同位体比	54
図 3	国内出土韓鏡の鉛同位体比	54
写真 2	有田遺跡群第177次調査ST002から出土した小銅鏡	54

第1章 はじめに

1. 調査に至る経過

通称今宿新道の国道202号線の開通と福岡市営地下鉄1号線の開通は、従来小田部大根の産地として有名であった、近郊農村地帯の有田・小田部・南庄地区を一変させた。沿線には店舗や共同住宅、民家が建ち混み、往時の面影を見る事は難しくなってしまった。

有田・小田部・南庄地区に所在する有田遺跡群は福岡市では重要遺跡として、昭和52年度から個人住宅のような小規模開発についても埋蔵文化財の審査を行ない、専従の調査班を配徹して、個人住宅については国庫補助事業として発掘調査を行っていた。

今回の調査は地権者の毛利三男氏から提出された早良区小田部5丁目162の専用住宅建設に伴うものである。調査は昭和60年11月8日から61年2月14日迄行い、弥生時代から中世に至る集落を検出した。調査面積は706㎡である。なお、昭和60年度は本調査区を含めて7カ所の調査を行っている。

2. 調査の組織

昭和60年度の調査組織は以下のとおりである。

調査主体	福岡市教育委員会
調査総括	埋蔵文化財課長 柳田 純孝 (現文化財部部長)
事務担当	埋蔵文化財課第2係長 飛高 憲雄 (当時) 第1係長 山口 諒治 (現在) (庶務) 岸田 隆 (当時) 文化財整備課 谷口真由美 (現在)
調査担当	埋蔵文化財課第2係 山崎龍雄、米倉秀紀
調査員	谷沢 仁 (現佐賀県大和町教育委員会)
調査作業	明野隆、有富いつ子、板倉文子、井上紀世子、井上真寿美、緒方マサヨ、金子由利子、神尾順次、北原ヒサ子、清原ユリ子、合屋龍介、後藤ミサヲ、坂口フミ子、佐藤テル子、柴田勝子、庄野崎ヒデ子、高橋正弘、高浜謙一、上斐崎初栄、徳永ノブコ、西尾たつよ、馬場寿男、平井和子、深堀雅基、藤岡毅雄、堀川ヒロ子、松井フミ子、松井邦子、松尾和雄、箕原幸江、三島博子、古岡田鶴子、吉村哲美、萬スミヨ(五十音順)
整理作業	蜂須賀博子 大賀順子、大神真理子 (平成11年度)

第2章 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地 (PL. 1)

有田遺跡群は、福岡市の西南部に位置する早良平野と呼ぶ小平野に所在する遺跡である。この平野は早良区と西区の東半分に広がり、沿岸の海岸砂丘と室見川水系によって形成された沖積地から構成されている。平野の西側は飯盛山から長垂丘陵、東側は鴻巣山、油山山塊、南側は背振山系で限定されている。

有田遺跡群は平野の北側、室見川右岸にある最大標高15mを測る独立中位段丘上に立地している。この段丘は室見川や金屑川による浸食を受け、北に八手状に台地が広がる独特な形状を呈している。台地の規模は南北約1.7km、最大幅約0.8kmを測り、台地中央部の有田1・2丁目を最高所として、北に緩やかに傾斜している。第106次調査区はこの台地の北西部に立地している。

2. 歴史的環境 (Fig. 2)

有田遺跡群が所在する早良平野は古くから開けた地域で、旧石器時代から遺跡が知られている。旧石器時代の遺跡は数は少ないが、台地・丘陵部に遺跡が分布している。主な遺跡としては吉武遺跡や、本遺跡などが知られている。

縄文時代は早期から前期にかけて古い時期の遺跡が平野最奥部の内野地区や山沿いの台地に分布する。時代が新しくなるにつれて、遺跡は海岸近くの平野部まで進出してくるが、進出限界は有田から福重あたりまでである。主な遺跡として内陸部の四箇遺跡、田村遺跡、東入部遺跡、松木田遺跡などがある。

弥生時代になると遺跡は下流低地部から海岸砂丘部まで広がる。初期の遺跡は本遺跡や拾六町平田遺跡、石丸古川遺跡などが知られ、博多区の板付遺跡とはほぼ同時期の環壕集落が本遺跡で見つかっている。また古武遺跡では弥生時代前期末から中期にかけての、多くの副葬品を持つ甕棺墓・木棺墓などが調査され、弥生時代のクニの王墓と考えられている。平野内には吉武遺跡や有田遺跡など地域の核となる拠点集落がいくつか存在している。後期後半頃には平野西側の野方遺跡では環壕に囲まれた大規模な集落が確認されている。

古墳時代の遺跡は前時代と同様に分布する。海岸砂丘部では藤崎遺跡で方形周溝墓が調査され、主体部から三角縁神獣鏡が出土している。また今は消滅したが、海岸部の五島山では前期の古墳が調査されている。前方後円墳は少なく、拌塚古墳や壱波古墳、梅林古墳、羽根戸南古墳群などがあるだけである。後期の群集墳は東西の山沿いに多数造られている。大規模な集落遺跡としては本遺跡以外には西新町遺跡、藤崎遺跡、原遺跡、野方遺跡、田村遺跡などがある。

歴史時代になると、古代は早良郡となる。早良郡には7郷があり、本遺跡は田部郷にある。また有田地区では該期の時期の大型建物群が検出されており、早良郡衙の可能性が高い。また都市化が進む前迄は、平野には条里の遺制が良く残っていた。「三十田」、「池ノ坪」などの地名が残る。

中世の村落は田村遺跡、次郎丸遺跡、原遺跡などで調査されている。戦国時代になると油山の西側にある荒平山山頂に安楽平城が築かれ、戦国大名の大内氏、大友氏の早良郡支配の拠点となった。16世紀後半には大友氏の被官の小田部氏が安楽平城主となるが、江戸時代の『筑前国続風土記拾遺』には小田部氏の皇城が有田村にあったと書かれており、有田の小田部城がそれではないかと考えられる。



Fig. 1 有田遺跡群と周辺遺跡 (1/25,000)

- | | | | | |
|------------|-------------|-----------|------------|-----------|
| 1. 有田遺跡群 | 2. 有田七田前遺跡 | 3. 原遺跡群 | 4. 原談儀遺跡 | 5. 原深町遺跡 |
| 6. 飯倉原遺跡 | 7. 飯倉野木遺跡 | 8. 飯倉遺跡群 | 9. 干隈古墳 | 10. 免遺跡群 |
| 11. 野芥大敷遺跡 | 12. 次郎丸高石遺跡 | 13. 田村遺跡群 | 14. 橋本榎田遺跡 | 15. 吉武遺跡群 |
| 16. 四箇遺跡群 | 17. 拝塚古墳 | 18. 梅林古墳 | | |

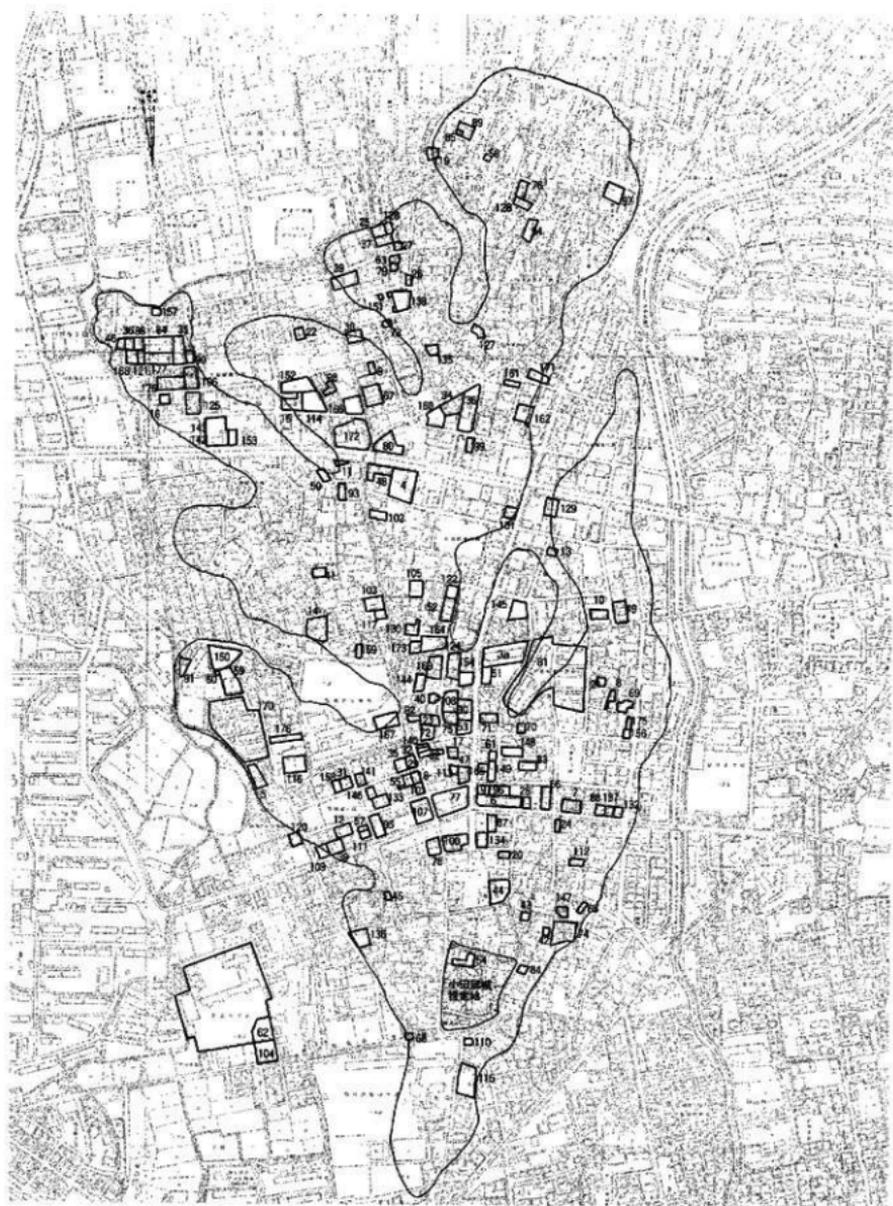


Fig. 2 有田遺跡群調査地点位置図 (1/7,500)

第3章 第106次調査の記録

1. 調査の概要

本調査区は早良区小田部5丁目162に所在する。北に向かって八つ手状に広がる台地の北西側の部分に立地し、東側には北から谷が入り込んでいる。調査区付近は有田遺跡群でも遺構が濃密に残る地域で、過去多くの調査が行われている。調査の結果から弥生時代の臺棺墓地や集落、古墳時代全般に亘る集落、古代の橋で囲まれた大型建物群、中世の居館跡など各時代の遺構が検出されている。特に北西側の第177次調査区では臺棺墓から中国製の青銅鏡が副葬品で出土している。

今回の調査は昭和60年11月8日から61年2月14日まで実施した。調査面積は706㎡である。調査前は畑地であった。遺構面は褐色の烏柄ROOM土で、東に谷が入るため、東に向かって緩やかに傾斜して行く。遺構面までの深さは、西側で約0.2m、東側で約1.4mを測る。東側斜面には包含層があり、その上面褐色土層から中世の溝が切り込み、ピット、建物、竪穴住居跡などは主に、下の黒褐色粘質土層上面で検出している。包含層上での遺構検出は困難を極め、予想以上に時間を費やした。主な検出遺構は竪穴住居跡10棟以上、掘立柱建物6棟、溝4条などである。

2. 遺構と遺物

① 竪穴住居跡 (SC)

報告するのは10棟である。时期的に弥生時代が2棟、古墳時代が8棟である。調査時は30棟ほど番号を附したが、整理した結果、確実と思われる住居跡について報告する。遺構番号は当時の番号を利用してはいる。

SC01 (Fig. 6, Pl. 5) 調査区西壁にかかるコーナーの一部である。確認規模は3.1×2.4m以上で、残存壁高は最大で16cm程である。壁下には深さ8cm程の溝が巡る。床面には潰れたような土器と、作業台石があった。支柱穴は4本と考えられる。埋土は地山ROOM粒子を含む暗褐色土である。

出土遺物 (Fig. 7・18・19, PL. 13・14) 須恵器や土師器、鉄器片などが出土している。1～4は須恵器の坏身。1・2は床面出土。1はほぼ完形で、口径は11.8cm、器高は4.4cm、受部径は14.3cmを測る。口縁部の立ち上りは内傾し、口端部内面に軽い沈線が巡る。底部2/3はヘラケズリで、ろくろ回転は時計回りである。胎土は精良。2は口縁部が欠失する底部1/3片である。1と同タイプである。復元受部径は13.0cmを測る。ろくろ回転は逆時計回りである。3・4は1/6片・1/8片である。復元口径は3が11.0cm、4が11.6cmを測る。口縁部の立ち上がりは直に近く、内面に稜が付く。5・6は土師器の甕である。5は1/3片。復元口径は19.6cm、器高21.1cmを測る。頸部はしまりが無く、内外面指押さえ痕が残る。外面は部分的にタテのハケ目が残る、又二次的加熱を受けたのか、煤が付き、剥落がひどい。内面下半はヘラケズリ。6は床面出土。頸部が締まり、口縁が直立気味の甕の底部と口縁部片である。復元口径18.8cmを測る。全体に磨滅するが、底部外面にハケ目と黒斑、内面はヘラケズリである。5・6の色調はにぶい黄橙色、にぶい橙色で、いずれも胎土に粗砂を多く含む。95は作業台石である。石材は玄武岩で、最大長44.2cm、最大幅27.4cm、最大厚8.9cmを測る。上面は平坦になっている。側面に使用痕が残る。93は鉄製の手鎌片。当初器種は不明であったが、透過X線撮影と保存処理の結果、手鎌の刃部であることが判明した。中央付近で折れており全体の大きさは不明であるが、現状で刃部長4.2cm、幅1.9cm、厚み約1mmを測る。袋部は錆が詰まっており、入り口部分で最大幅約5mm、最小幅3mm程度を測る。有機質の遺存は認められない。

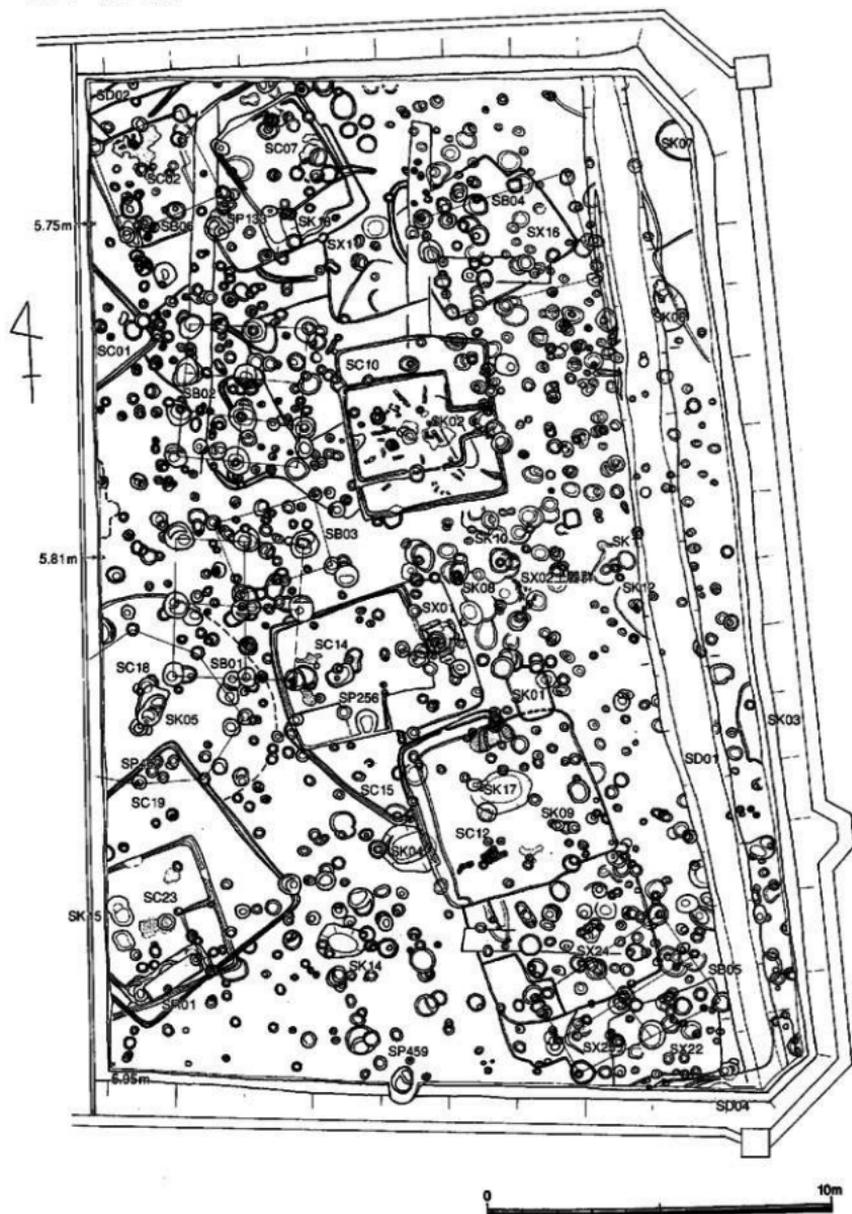


Fig. 3 遺構全体図 (1/150)

- 調査区北壁土層名称
1. 黄土 (雑草土)
 2. 灰褐色土
 3. 褐色土 (やや腐植も著び、炭化物をわずかに含む)
 4. 褐色土 (やや粘質もあり、炭化物・土塊質を含む)
 5. 沖積褐色粘土 (深褐色粘土少量混入)
 6. 深褐色粘質土 (わずく腐植を含む)
 7. 6で腐植が強い
 8. 腐植体土
 9. 腐植体粘質土 (堆山ローームブロック混入)
 10. 8で堆山ローームブロック混入
 11. 褐色堆山ローームブロック
 12. 沖積褐色粘土
 13. 深褐色粘質土 (砂子は細かい)

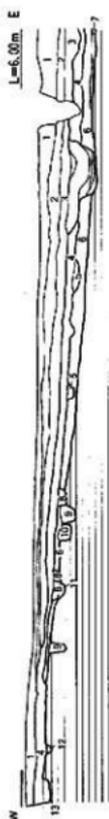


Fig. 4 調査区北壁土層図(1/120)

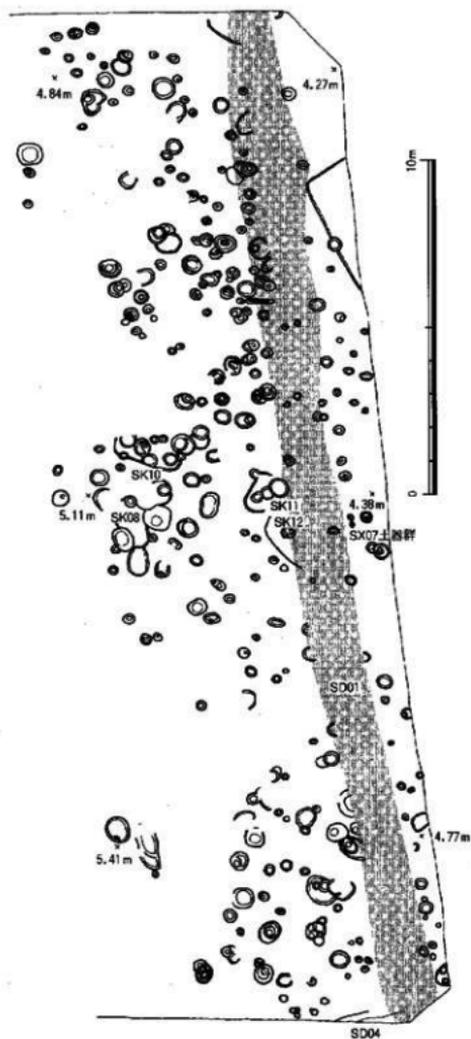


Fig. 5 東側包含層下遺構検出図(1/150)

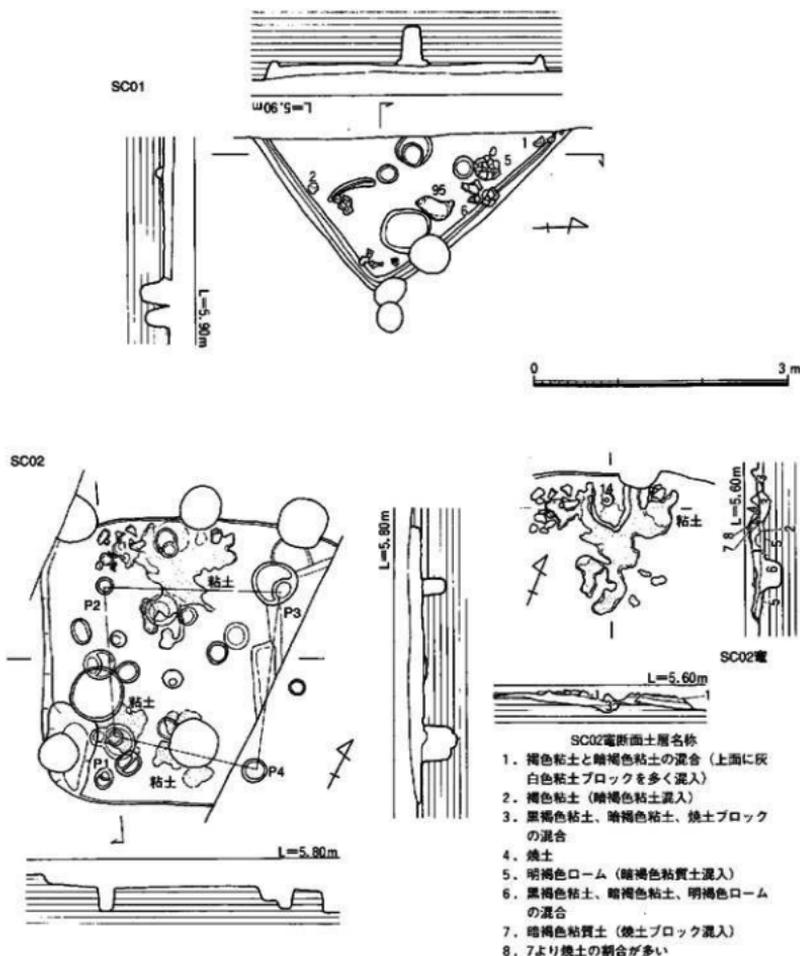
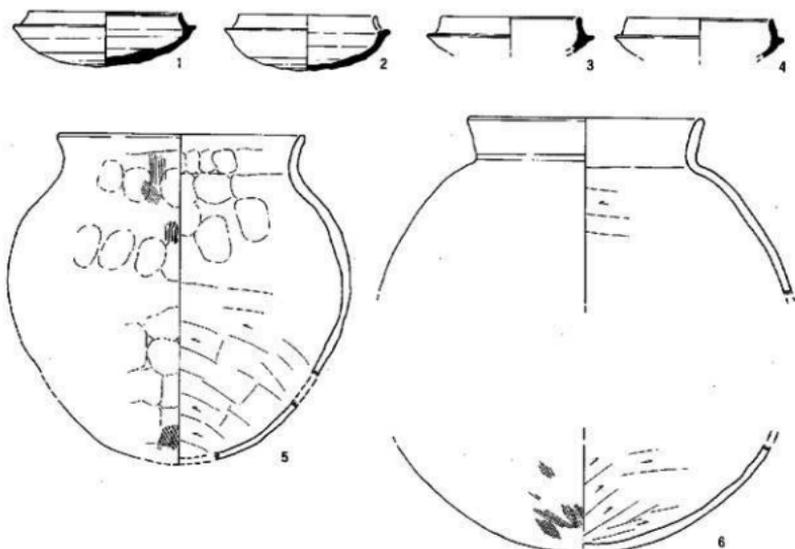


Fig. 6 SC01・02 (1/60)

SC02 (Fig.6, PL.5・10) 北西端で検出した隅丸方形を呈する小型の住居跡で、東側はトレンチにかかる。規模は南北方向3.4m、東西方向壁長3.5m以上、残存壁高14cm余りを測る。北壁に中央に粘土で造った竈がある。竈は崩れており、南北1.5m東西1.7mの範囲で褐色粘土や焼土ブロックが広がっていた。その壁沿いに土師器の高坏の脚部を立てて置いた支脚があり、その部分が竈本体である。竈本体の幅は約0.65m程である。南壁側にも粘土・焼土ブロックが散布している。支柱穴は4本である。柱間はP1-2は1.8m、P2-3は2.1m、P3-4は2.2m、P4-1は1.7mを測る。この

SC01



SC02

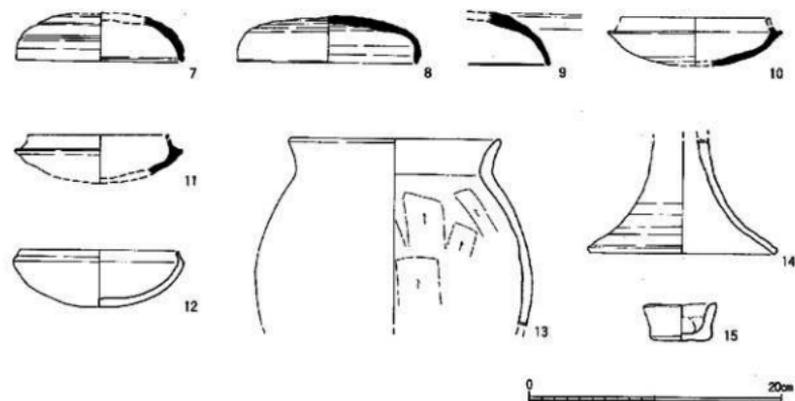


Fig. 7 SC01・02出土遺物 (1/4)

住居の東側床面下にはSC07がある。住居の埋土は黒褐色粘質土で地山ロームを含む。

出土遺物 (Fig. 7, PL. 14) 弥生土器から土師器・須恵器が出土した。7～11は須恵器で小田編年のⅢB期のもの。7～9は坏蓋。それぞれ1/6片、4/5片、細片である。口径は復元で7が約13cm、8が14.3cm、器高は8が3.8cmを測る。7の口端部内面には軽い段が付き、外面天井と口縁部の境に

浅い沈線が巡る。天井部3/4は回転ヘラケズリでその他はナデ。8は天井部1/2は回転ヘラケズリ、その他はナデ。ろくろ回転は逆時計回りである。9は天井部外面は回転ヘラケズリである。7・9の胎土は精良で、色調は灰白色である。10・11は坯身1/4片・1/3片で、復元口径は10・11が11.8cm・10.4cm、器高は10が4cmを測る。12~15は土師器である。12は坯身1/3片で、復元口径は12.4cm、器高は4.6cmを測る。磨減がひどく調整は不明。色調は黄橙色で、胎土に粗砂を多く含み、焼成はやや不良。13は壘1/6片で、復元口径は16.8cmを測る。外面は磨減がひどく調整は不明。胴部内面はヘラケズリ。色調はにぶい黄橙色である。14は竈支脚に使われていた高坏脚部。脚端径14.6cmを測る。ろくろ底形で水引き痕が残る。色調は明橙色である。15は高坏の脚部片を転用したと思われる小坏。口端部は擦られている。口径5.8cm、器高3cmを測る。内外面ナデ。色調はにぶい灰褐色。胎土は13~15はいずれも粗砂を多く含む。

SC07 (Fig. 8, PL. 6・10) 北側SC02の東で検出した。当初、SC07・17の2棟の重複と考えたが、明確な2棟分の柱を確認出来ず、可能性は残すものの1棟として報告する。平面形態はいびつであるが、規模は南北長軸長5.2m、東西短軸長は4.38mで、残存壁高は西側で20cm程である。東側は3×3.1mの方形状の範囲で更に床面が20cm下がる。壁溝は内側の方形状に下がる部分と北壁に部分的に巡る。西壁に焼土が、北壁から東壁近くに粘土ブロックや炭化物が分布する。西側の焼土は約0.8×0.8mの範囲で、壊されてはいるが蓋と思われる。壁近くに支脚に使用されたと思われる焼石があった。この下はビット状 (SP133) に落ち込む。上柱は4本であるが、柱間はP1-2が2.4m、P2-3が1.7m、P3-4が2.3m、P4-1が1.66mを測り、床面を精査した結果、SK13という上坑状の落ち込みがある。また南東隅から浅い溝が延びる。住居の埋土は黒褐色粘質土である。

出土遺物 (Fig. 10・20, PL. 14・16) 弥生土器から古墳時代土師器・須恵器などが出土した。16~18は須恵器坯身で、それぞれ3/4片・1/3片・1/6片である。16は上層から出土したものでV期のものである。口径は11cm、器高は3.5cmを測る。体部下半から底部はヘラケズリ後ナデで、底部にはヘラ記号がある。17・18はⅢB期からⅣA期にかけてのものである。17は床面、18は西側焼土面から出土した。復元口径は14.4cm、12.0cmで、器高は17が4.4cmを測る。17の底部3/4が回転ヘラケズリ、18の底部2/3が回転ヘラケズリである。ろくろ回転は時計回り、逆時計回りである。色調は16~18いずれも灰色、胎土は17が精良である。19~22は土師器。19は把手である。20は床面のSK13から出土した高坏脚部4/5片。脚端径10.9cmを測る。洗い過ぎによる磨減がひどく、調整は不明。21は焼土下のSP133から出土した壘1/4片である。ひずみが大きく、また器厚も一定していない。胴外面にはハケ目がかすかに残る。内面はヘラケズリ。色調は19が明橙色、20がにぶい黄褐色、21が淡黄色で、胎土はいずれも粗砂を多く含み、19は赤色粒子を含む。22はジョッキ形土器の把手の一部である。2.4×1.8cmの断面楕円形である。全面指ナデ調整である。色調は淡褐色を呈し、胎土は粗砂を少量含む。106は清石製の白玉である。一部欠失するが直径4.5mm、孔径1.5mm、厚み2mmを測る。113はガラス製の小玉で、色調は淡緑色を呈する。直径2.5mm、孔径1mm、厚み2mmを測る。

SC10 (Fig. 8, PL. 6) 調査区中央北よりの包含層中で検出した住居跡である。南北に主軸を取る長方形の住居で、規模は長軸長5.16m、短軸長4.4mを測る。残存壁高は西側で30cmを測る。床面の南北両側には幅0.9~1.2mのL字型のベッド状遺構が付く。ベッド状遺構は地山削り出しで、その部分は床面よりは12~16cm程高くなる。東側ベッド状遺構が途切れる部分には出入り口と考えられる不定形土坑がある。規模は0.6×0.7m、深さ35cmを測る。西側には梯子をかける為の張り出しがある。壁溝は各壁面及びベッド状遺構下に巡る。床面には炭化物・焼土が散乱しており、火災にあった状況を示していた。主柱は2本で、その間隔は3.2mを測る。住居の埋土は黒褐色粘質土で地山ローム土

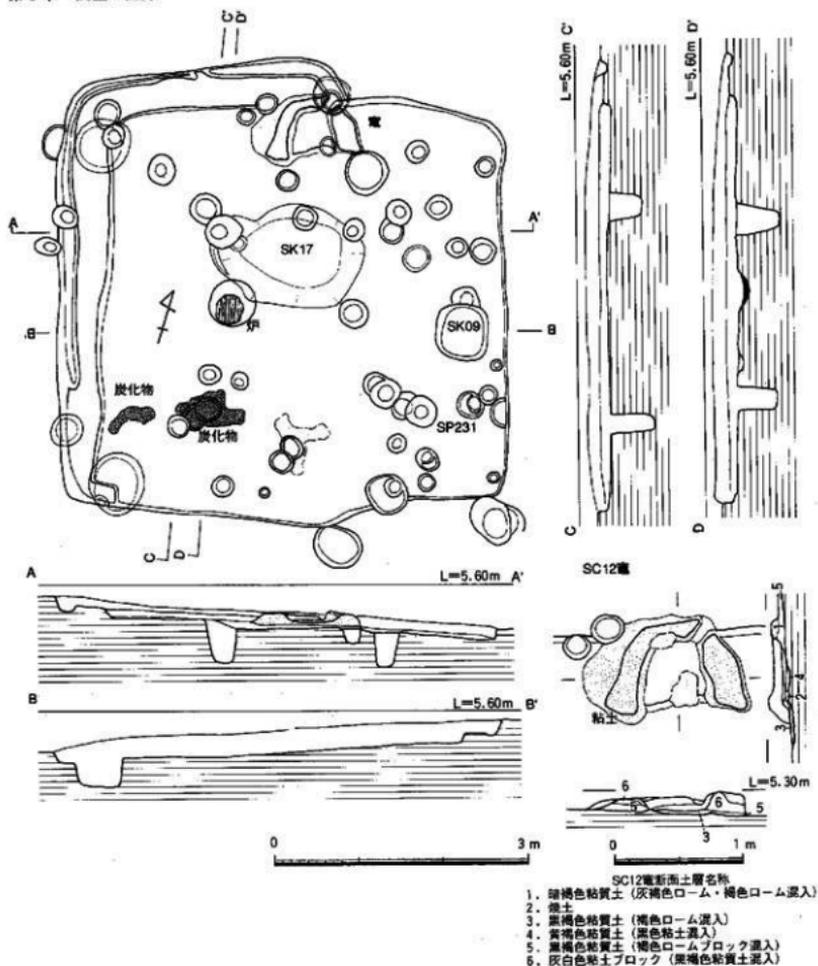


Fig. 9 SC12 (1/60・1/40)

を少量含む。

出土遺物 (Fig.10・19・20, PL.14・16) 弥生土器から上器器、石器類などが出土しているが、火災の際持ち出されたのか、床面に残った完形の土器はなかった。23は蓋の口縁部1/6片、復元口径は13.8cmを測る。器壁は磨減するが、内面に粗いハケ目が残る。24は小型丸底増1/8片で、復元口径は11.4cmである。器壁は磨減し、調整は不明。25は底部片で底径6cmを測る。やや上げ底気味の小さな底部で、外面磨減がひどいがタキキ痕が残る。26は口縁が外に大きく開く鉢の小片である。器壁は磨減し、調整は不明。色調はいずれも淡黄橙色で、胎土は23・24が精良、25・26が粗砂を多く含む。27~29は時期が古く住居に伴うものでない。26は浅鉢の口縁部小片。復元口径22.8cmを測る。28は金

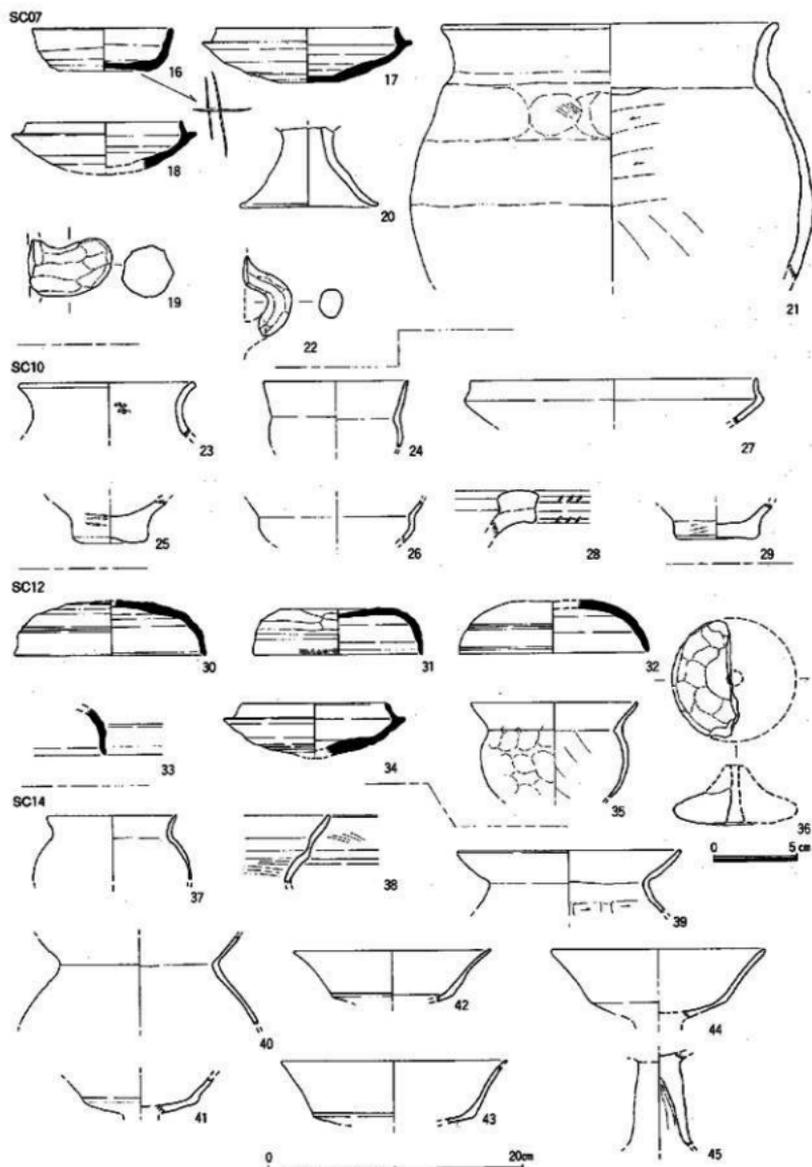


Fig. 10 SC07・10・12・14出土遺物 (1/4・1/3)

海式竈棺の口縁部細片。29は底部片である。96・97は作業台石。96は長方形を呈し、各面粗い敲打調整痕が見られ、上面は使用面で擦痕が残る。石材は玄武岩である。全長19.8cm、最大幅11.8cm、厚み4.5cmを測る。97は不整形を呈すが破片である。全体に敲打痕が残り、上面と側面は擦られて磨滅している。残存長23cmを測る。石材は96が玄武岩、97が砂岩である。98は破片で種類は不明であるが、各面は研磨されている。残存長5.3cm、幅2.7cmを測る。石材は砂岩である。107は滑石の白玉1/2片である。復元口径4.5mm、孔径1.5mm、厚み2mmを測る。114は碧玉の管玉で、色調は灰緑色を呈する。全長11mm、直径3.5mm、孔径1.5mmを測る。

SC12 (Fig. 9, PL. 8・10) 調査区中央南側の包含層中で検出した平面方形の住居跡である。北壁中央部から西壁にかけて30~60cmの幅で、10cm前後高くなって張り出す。これも当初SC12・30と2軒の住居の重複と考えたが、柱穴を抽出、分離出来ないで、1棟と考えて報告する。規模は張り出し部分を含めて南北軸長5.62m、東西軸長5.3m、張り出し部分を除くと南北軸長5.1m、東西軸長4.86mを測る。残存壁高は西側で張り出し部で約15cm、張り出し部分から更に10cm前後の壁高がある。壁溝は張り出し部分に浅い溝が巡るが、全周はしていない。また北壁中央には粘土で造られた馬蹄形状を呈する竈が付く。竈は張り出し部分に10cm程突き出て、北東側に粘土の切れ目があり、この切れ目が溝に繋がる。この竈の他に、住居中央西よりに直径0.6m前後の炭と焼土が集中する円形の浅い落ち込みがある。住居の炉跡と考えられ、強いて言えばもう1棟の住居に伴う可能性がある。主柱は4本でそれぞれ2本ずつあり、2度ほどの建て替えを考える。床面は粘土が貼られており、それを撤去すると土境 (SK17) やピットを確認した。東壁中央には長軸長0.7m、短軸長0.6m、深さ35cmを測る隅丸方形の土坑 (SK09) がある。貯蔵穴であろうか。住居の埋土は黒褐色粘質土が主体で暗褐色粘質土ブロックを少量含む。

出土遺物 (Fig. 10・19・20, PL. 14・16・17) 弥生土器から古墳時代の須恵器、土師器、石器類、玉などが出土した。30~34は須恵器。30~33は坏蓋。いずれも口縁部から天井部1/3片・1/3片・1/4片・細片で、復元口径は15.0cm・13.3cm・15.0cm、器高は4.4cm・3.7cm・4.2cmである。30は床面出土。天井部と口縁部の境に段を有す。天井部3/4は回転ヘラケズリ。ろくろ回転は逆時計回りである。31は竈から出土。天井部は手持ちヘラケズリで、その他はナデ。口縁部外面に細かいケテハケを施す。32は住居内SP231出土。磨滅がひどく調整は不揃。33は口縁部がやや外に開き、天井部と口縁部の境に軽い段が付く形態。色調は30が暗灰色、31が灰色、32が灰白色、33が暗褐色を呈する。胎土はいずれも精良である。30・32の焼成はやや甘い。34は床面出土の坏身1/3片で、復元口径11.6cmを測る。底部1/2は回転ヘラケズリ。色調は灰色で、胎土は精良。35は口縁部が外折する鉢の1/4片である。復元口径は13.2cmを測る。全体に磨滅がひどいが外面に指押さえ痕、内面にヘラケズリ痕が残る。色調は橙色、胎土は粗砂を多く含む。36は土製の紡錘車1/2片である。復元径は7.2cmを測る。中央部が山状に高まる形態で、中央に上面径で0.4cm、底面径で1cmの孔があり、使用により底面の方が広がる。全面指押さえ仕上げで、指圧痕が残る。胎土は粗砂を多く含む。99は敲石の破片である。下端が使用面である。残存長4.5cmを測る。100・101は磨石。100は下面と側面が擦られている。上面は敲打痕が残る。101は石鏡状を呈する形状で、全長8.1cm、最大幅5.3cm、厚み2.3cmを測る。上面と側面は擦られており、上面には使用による敲打痕が残る。石材は99・100が砂岩、101が玄武岩である。108はガラス小玉。直径は4.5mm、孔径は1.5mm、厚さ3mmを測る。色調は風化した青白色を呈す。109・110は滑石の白玉である。いずれも直径は6mm、孔径は2mm、厚みは4.5mm・5mmを測る。

SC14 (Fig. 11, PL. 7) 調査区中央で検出した東西方向に主軸を取る長方形の住居跡である。南側はSC15と切り合い、SC12に接する。SC15との前後関係は明確に出来ていない。規模は東西長軸

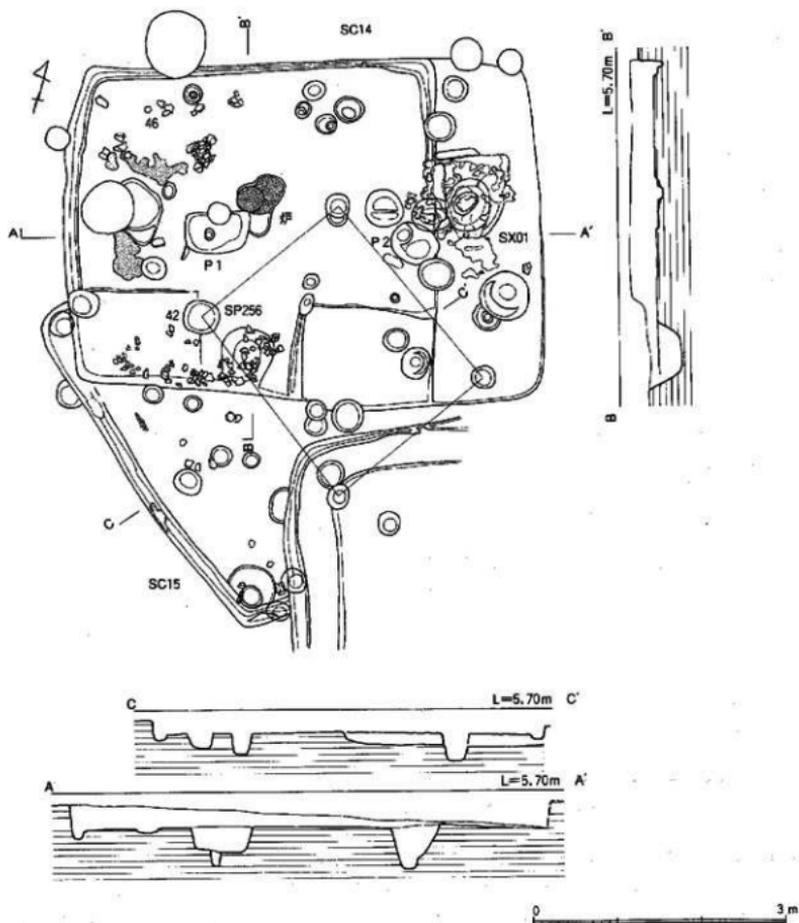


Fig. 11 SC14・15 (1/60)

長5.66m、南北短軸長4.2mを測る。壁高は西側で35cmを測る。南側から東側にかけては1～1.2mの幅でベッド状遺構があり、南壁中央やや西寄りに長さ0.7m、幅0.6m、深さ25cmを測る不整形の上坑が付き、そこが出入り口となる。ベッド状遺構は部分的に粘土を貼り付けており、一部掘りすぎたりしている。東側ベッド上には粘土を張り付けて造られた後世の炉跡(SX01)がある。壁溝は北壁から西壁にかけてと東側ベッド状遺構の部分に巡っている。主柱は2本で柱間距離は2.3mを測る。炉跡はP1近くに0.4×0.6の範囲で焼七面があり、これが炉になるのであろう。また西側床面には炭化物が散乱していた。住居の埋土は黒褐色粘質土で、暗褐色や褐色粘質土ブロックを含む。

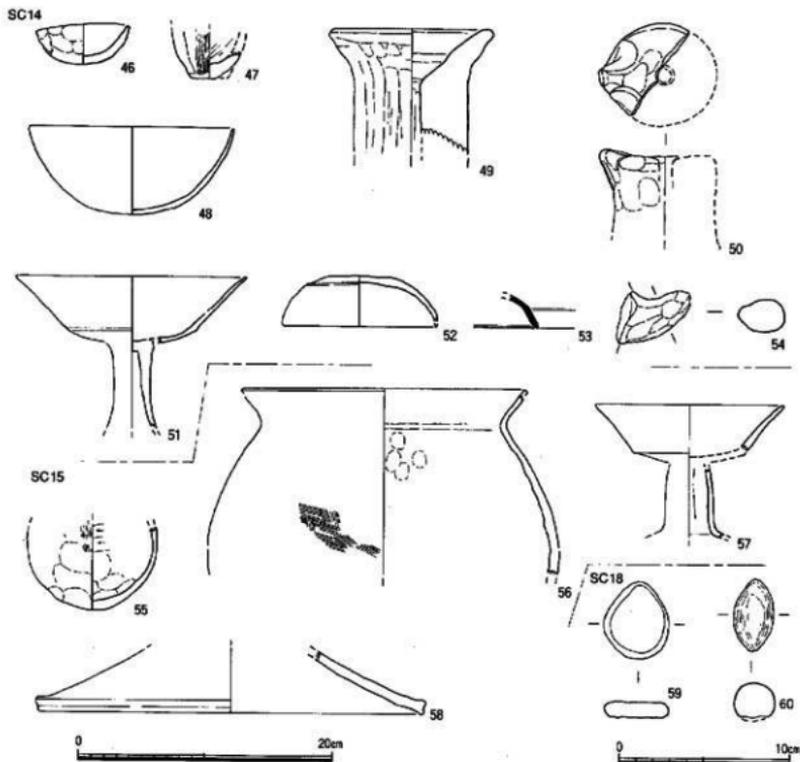


Fig. 12 SC14・15・18出土遺物 (1/4・1/3)

出土遺物 (Fig. 10・12・19, PL. 14・17) 弥生上器から古墳時代の土師器、須恵器や石器などが出土している。床面北西隅と南側ベッド状遺構上を中心に出土している。37～52は土師器である。37は小型の壺か甕の1/4片である。復元口径は10.2cmを測る。全体として磨減がひどく、調整は不明。色調は明橙色を呈し、胎土は精良、金雲母を含む。38～40は甕。38は複合口縁状の口縁部細片。ナデ調整で、内面は粗いハケ目である。ヒビが外面に入る。39・40は布留式土器の甕。39は口縁部1/6片で、復元口径17.8cmを測る。磨減するがナデで、胴部内面はヘラケズリ。40は細片で傾きは推定である。表面は磨減がひどく調整は不明。色調は38がにぶい赤褐色、39が灰黄褐色、40が淡黄色を呈し、胎土はいずれも粗砂を多く含む。41～45は高坏である。41～44は坏部で、41～43は1/4片、44は1/2片である。いずれも坏底部と底部の境に段または稜を有す。41は口縁部を欠失する。器壁は磨減し、調整は不明。42～44の復元口径15.6cm、17.8cm、17.0cmを測る。器壁は磨減・剥落がひどく、調整は不明だが、44はナデ。45は脚部片で壺溝から出土。外面は磨減するが、内面にしほり痕が残る。色調は41・42・44・45が橙色、43が明橙色である。胎土は44・45が精良である。46～48は鉢である。46は手摺ねで口縁部を欠失する。口径7.2cm、器高3.2cmを測る。全面に指押さえ痕が残る。47は底が深い器

形で、ミニチュア土器の1/4片である。復元底径2.8cm、器高は4cm以上を測る。外面はナデ後細かいタテハケ、内面は工具ナデである。48は丸底で1/2片である。復元口径16.2cm、器高7.0cmを測る。器表の磨滅がひどく、調整は不明。色調は46が明橙色、47が暗褐色、48が橙色である。胎土は46・48が精良で赤色粒子を含み、47は粗砂を多く含む。49・50は支脚である。49は筒形の頂部1/3片である。復元頂部径13.1cm、器厚は3.8cmを測る。筒部外面はタテナデ、内面はヨコナデで頂部には指押さえ痕が残る。50はいわゆる沓形の頂部1/2片である。頂部の一部が斜め上方に少し突出する。頂部中央に孔径約1.2cmの上下に通じる孔がある。色調は49は橙色、50はにぶい橙色である。胎土は粗砂を多く含む、焼成は良好である。51はP256出土の土師器高坏である。52~54は混入品である。52は床面出土のⅢB期の須恵器を模倣した土師器の坏蓋2/3片である。ろくろ成形である。磨滅がひどいが、犬井部は回転ヘラケズリのようなものである。色調は明橙色、胎土は精良。焼成は不良。53は埋上出土の須恵器坏蓋細片である。口端部内面に軽い段が付く。色調は灰色、胎土は精良。54は壁間溝出土の把手。ナデ仕上げである。色調はにぶい黄褐色、胎土に粗砂を含む。102は刃部を欠失した磨製石斧片。残存長9.6cm、幅6.7cmを測る。石材は玄武岩である。

SC15 (Fig. 11, PL. 7) SC14・12と重複する住居跡だが、前後関係が不明である。遺存状態は悪く、南西壁の一部が残るのみである。残存壁高は約20cmを測る。残存規模は南西壁で4.6mを測る。この南西壁下には幅15cmの溝が巡る。土器を見ると5世紀代のものであり、住居の主軸方向も併せて、SC19と同じ頃の時期と考え、支柱は4本と推定する。

出土遺物 (Fig. 12, PL. 14) 弥生土器から古墳時代の土師器などが出土している。須恵器は含まない。55・56は甕である。55は小型の甕胴部1/3片である。外面は磨滅がひどいがナデか、内面はヘラケズリで内底には指押さえ痕が残る。56は中型の甕口縁から胴部1/4片である。復元口径は22.8cmを測る。器壁はやや磨滅するが、外面はナデ。胴部中央から下半はハケ目、内面はナデで指押さえ痕が残る。胴部外面には黒斑がある。色調は55が橙色、56が明橙色を呈し、胎土はいずれも粗砂を多く含む。57・58は高坏。57は坏から脚部片。復元口径15cmを測る。器壁は磨滅がひどく調整は不明。脚部内面にはしほり痕が残る。58は裾が大きく開く脚部1/6片である。復元脚端径は30.4cmを測る。器壁の磨滅がひどく調整は不明。口縁部の可能性も有す。色調は57が橙色、58がにぶい橙色で、胎土は58が精良である。105は敲石である。形態は棒状、断面は長方形を呈する。全長19.3cm、最大幅5.8cmを測る。各面擦られて磨滅しているが、部分的に使用による敲打痕が残る。石材は玄武岩である。

SC18 (Fig. 13, PL. 10) 調査区西壁にかかる円形住居跡である。調査時には円形住居跡と確認出来なかったが、隣地の第175次調査で初めて円形住居であることを確認した。SC19に切られたりして遺構の残りは悪く、調査区では壁高は10cmである。有田遺跡群で良く見られる松葉里型住居であり、中央部に円形土坑 (SK05) とその両側に円形のピットが付く。支柱穴は推定で8本を考える。住居の規模は第175次調査区分や中央土坑、柱穴の配置から推定して、南北径6.5m、東西径7.4mを測り、平面形がいびつな楕円形状を呈する。住居の埋土は地山ローム粒子を少量含む黒褐色粘質土である。

出土遺物 (Fig. 12・19, PL. 14・17) 弥生土器片、石器、黒曜石の剥片などが出土しているが、量としては少ない。59は上が尖り下がが丸い、土器片を利用した円板状の土製品である。長さ4.6cm、幅3.8cm、厚み0.9cmを測る。側面は擦って再調整を加えている。色調は黄褐色である。60は土製の投弾である。一部欠失するが、長さ4.4cm、最大径2.4cmを測る。表面の磨滅・剥落はひどく。色調はにぶい黄褐色で、胎土は精良であるが、焼きはやや不良。103は小型方柱状片刃石斧片である。断面は長方形を呈する。残存長3.7cm、残存幅1.1cm、残存厚1.2cmを測る。全面研磨仕上げで、刃部は使用により、磨滅している。石材は頁岩である。

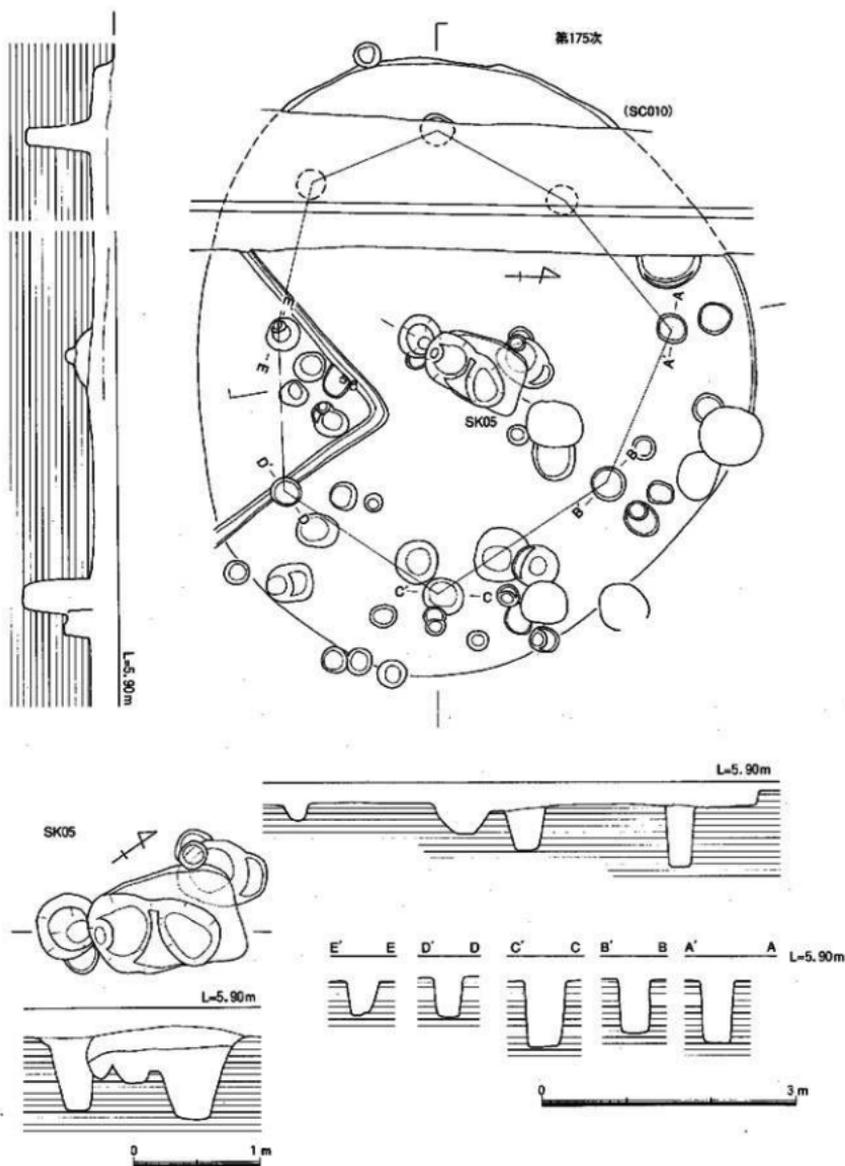
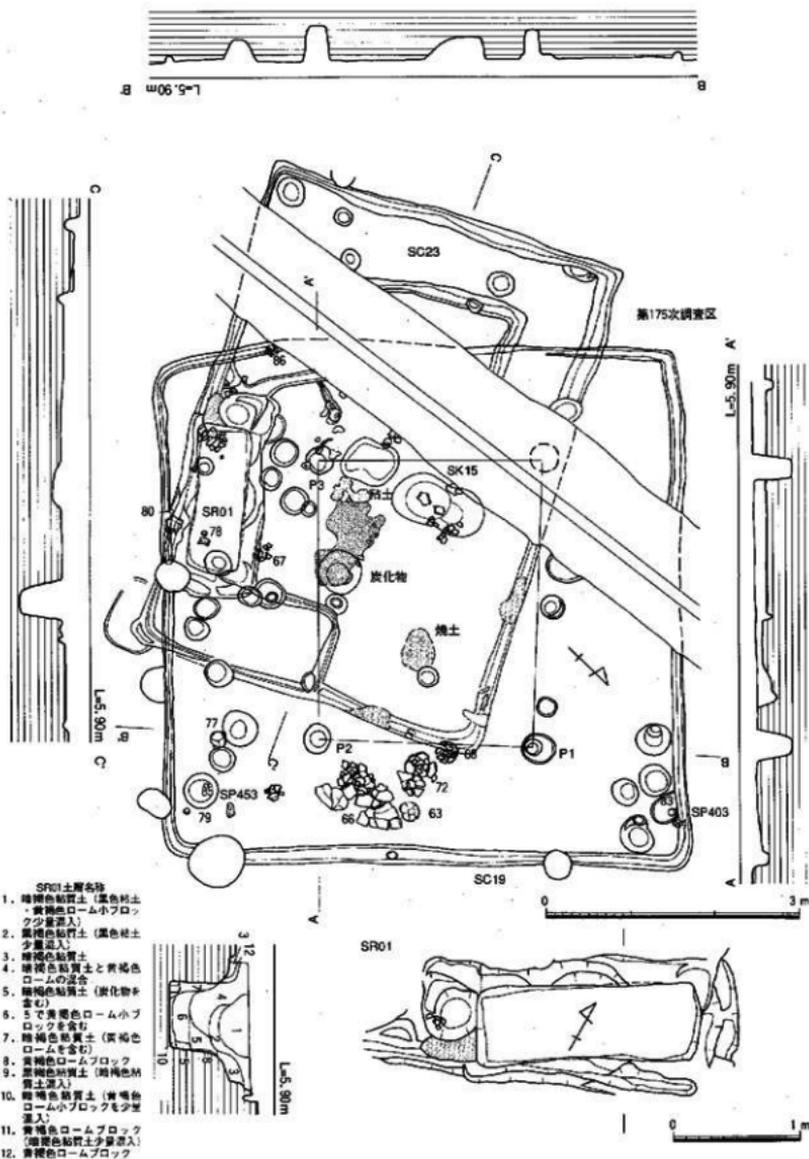


Fig. 13 SC18 (1/60 · 1/40)



SC19 (Fig. 14, PL. 9) 調査区西壁にかかって検出されたSC18・23を切る住居跡である。隣接する第175次調査区で西側コーナーを確認している。ほぼ方形の平面形で、規模は長軸長6.3m、短軸長6.1mを測る。住居の残りは悪く、壁の残りは4～5cm程である。壁下には溝が全周する。支柱は4本でP1-2が3.3m、P2-3が2.5mを測る。床面には焼土、炭化物や土器が潰れた状況で検出された。床面中央やや東よりに焼土面があり、炉と思われる。この住居の出入り口は西壁または北壁にあると考えられる。住居の埋土は褐色味を帯びた黒褐色粘質土で、地山ローム粒子を含む。

出土遺物 (Fig. 15・16・18・19, PL. 13・15) 床面を中心に多量の古墳時代土器器が出土している。5世紀前半代のもが多く、SC23の時期のものも混入している。

61～74は床面出土。61は小型丸底蓋である。口縁部を一部欠失するが、ほぼ完形。口径は9.1cm、器高は8.5cmを測る。外面はナデで、胴部内面はヘラケズリである。胴部下半に穿孔がある。色調はにぶい橙色を呈し、胎土は粗砂を多く含む。62・63は壺。62は口縁から胴部1/2片。締まった頸部から外洩気味に口縁部が直立する。外面は磨滅するがナデで、細かいタテハケが残る。口縁部内面は粗いヨコハケ、内面はヘラケズリ。外面には黒斑がある。63は1/2片である。丸い胴部を持つ形態。復元口径は13.2cm、復元器高24.7cm、最大胴径22.8cmを測る。全体に磨滅がひどいが、胴部外面には細かいタテ又はナメのハケ目が残る。胴部内面はヘラケズリである。色調は62が灰オリープ色、63が明褐色を呈し、胎土に粗砂を多く含む。64・65は甕。64は口縁部1/4片で、復元口径は17.2cmを測る。磨滅がひどく調整は不明だが、胴内面はヘラケズリである。外面には黒斑がある。65は胴部1/3片。外面タテ・ヨコのハケ目で、内面上半はナデ、下半はヘラケズリである。布留式蓋の崩れた形態である。色調は64がにぶい黄褐色、65がにぶい橙色を呈す。胎土は65は砂粒を少量含む。66は口縁部が打ち欠かれた大型壺の胴部である。ほぼ復元完形で、頸部径19.3cm、最大胴径46.7cm、器高44.8cmを測る。頸部の割れ口は二次的調整を加えている。全体に磨滅するが、胴部外面はヨコ又はナメの粗いハケ目、内面の上半はナデで、部分的にナメの粗いハケ目を施し、中央から底部にかけてはヘラケズリである。外面には黒斑が2カ所ある。胴部には意図的に打ち割られたと思われる孔があいている。色調はにぶい黄褐色で、胎土は粗砂を含む。

67～75は高坏である。67～72は坏部片。それぞれ1/3片・ほぼ完形・1/2片・2/3片・1/3片・ほぼ完形である。口径は復元で18.6cm・19.7cm・18.0cm・20.5cm・17.2cm・16.4cmである。67は磨滅がひどいが、外面は丁寧なナデで、ヒビ割れている。68はひずみ大きい器形である。器壁の磨滅がひどく、調整は不明だが、内面にかすかにハケ目残り、黒斑がある。69も器壁の磨滅がひどく、調整は不明だが、外面に黒斑がある。70・71は磨滅がひどく調整は不明。71の外面には黒斑がある。72はかなりひずんだ器形である。二次的加熱を受けたのか、表面の磨滅がひどく調整は不明。外面には部分的に黒斑がある。色調は67が浅黄褐色、68が淡褐色、70・71が淡黄色、72が黄褐色から赤褐色である。胎土はいずれも粗砂を多く含む。73は坏部から脚部片を図上復元したもの。復元口径は21cm、器高12.2cm、脚端径11.1cmを測る。坏部内外面は丁寧なナデだが、表面の剥落がひどい。内面に部分的にハケ目がある。外底部にはハケ目が残る。脚部は磨滅がひどいがナデで、内面はヘラケズリである。色調は赤褐色、胎土に粗砂を多く含む。74・75は脚部片である。74は外方に大きくラップ状に開く形態で、全体に磨滅がひどいが、外面ハケ後ナデ、内面は奥はヘラナデ、下半はナメ又はヨコハケである。75は復元脚端径11.4cmを測る。外面は磨滅がひどいがナデ。内面は奥の奥が指ナデ、内面はヘラケズリである。色調は74が浅黄褐色、75がにぶい黄褐色を呈す。胎土は75が粗砂粒を含む。

76・77は鉢。76は皿状で、1/2片弱。復元口径11.2cm、器高2.9cmを測る。全面ナデ仕上げで、指押さえ痕が残る。77は口縁部が短く反する盤状の形態。1/2片弱で口縁部の残りが無いが、復元口径

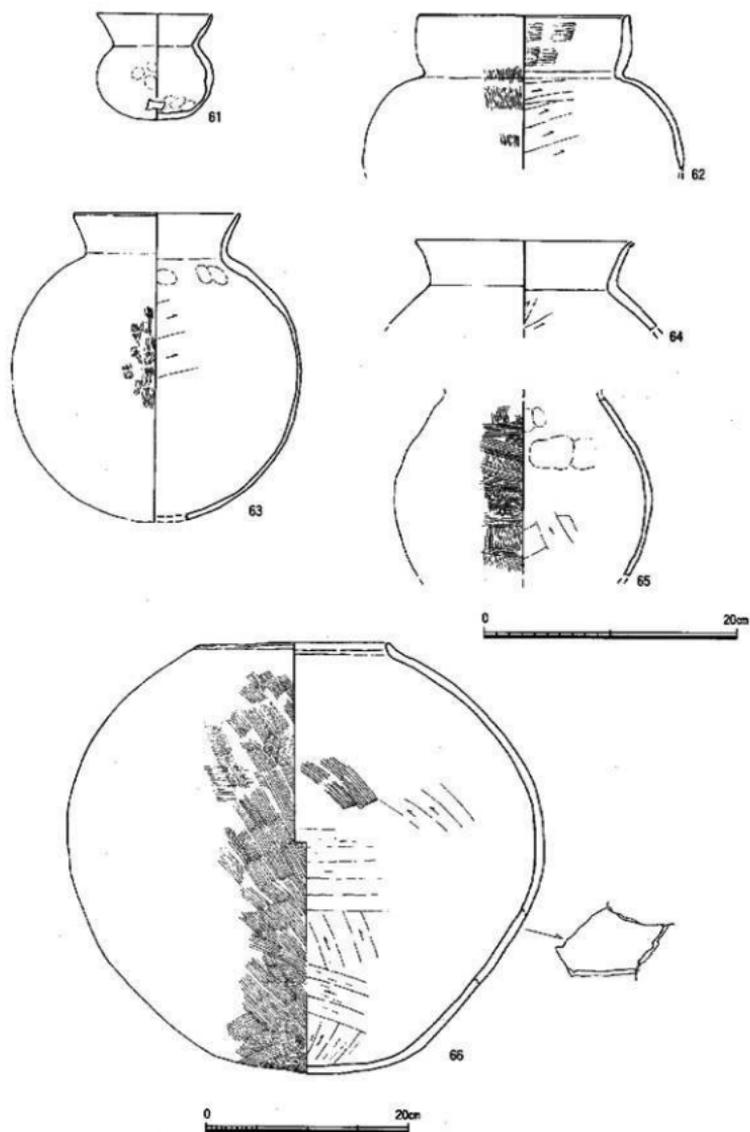


Fig. 15 SC19出土遺物 1 (1/4・1/5)

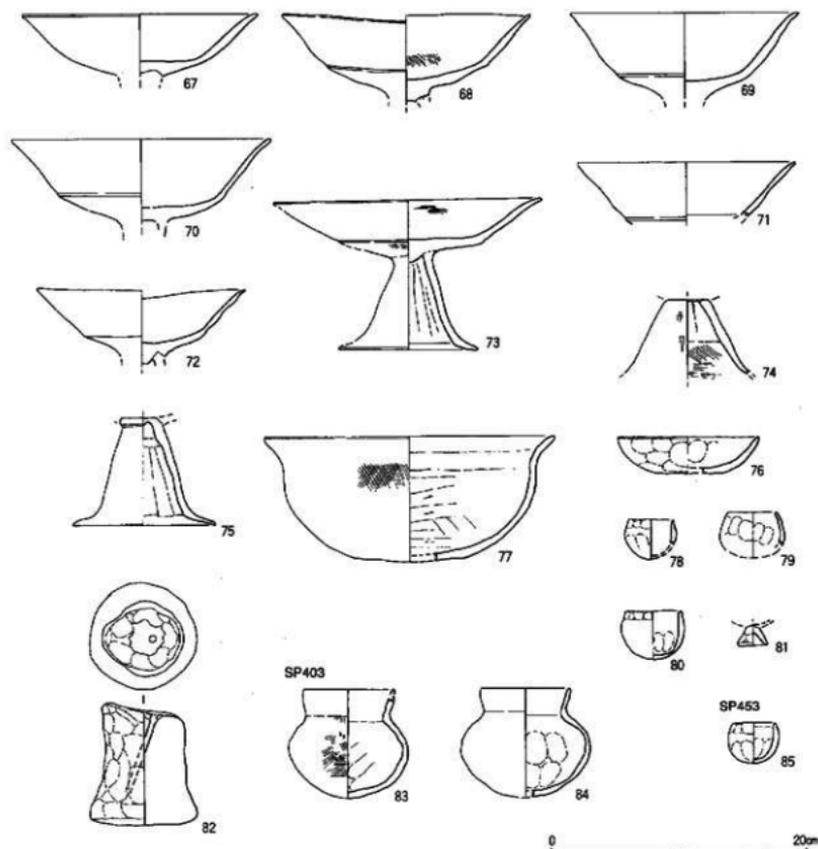


Fig. 16 SC19出土遺物 2 (1/4)

は23cm、器高は10.1cmを測る。表面はやや磨滅するが、外面はナデで、ナナメのハケ目が部分的に残る。胴部内面はヘラケズリである。底部は二次的加熱を受けている。色調は76がにぶい黄橙色、77が浅橙色を呈し、胎土はいずれも粗砂粒を多く含む。78~81はミニチュア土器で、いずれも手捏ねである。78~80は鉢形のもので、78は1/5片で、復元口径は約3.5cm、79は1/5片で、復元口径は約3.6cm、80はほぼ完形である。口径はひずみがあるが4.4cm、器高は3.9cmを測る。81は脚台の部分である。脚端径は2.5cmを測る。色調は78が黒灰色、79・80が灰褐色、81がにぶい黄橙色を呈す。78・81の胎土は精良である。82は杏形の器台で、ほぼ完形。底径は8.5~8.7cm、器高は9.9cm、頂部径は長径6.7cm、短径6.0cmを測る。頂部と側面はナデで、指押さえ痕が全面に残る。底面は丁寧なナデである。頂部から底部にかけて直径5mmの円孔がナナメに入る。色調はにぶい黄橙色で、胎土は砂粒を含み重い。83・84は住居内ピットSP403から出土した小型丸底壺。83は口縁部を一部欠失するがほぼ完形、84は

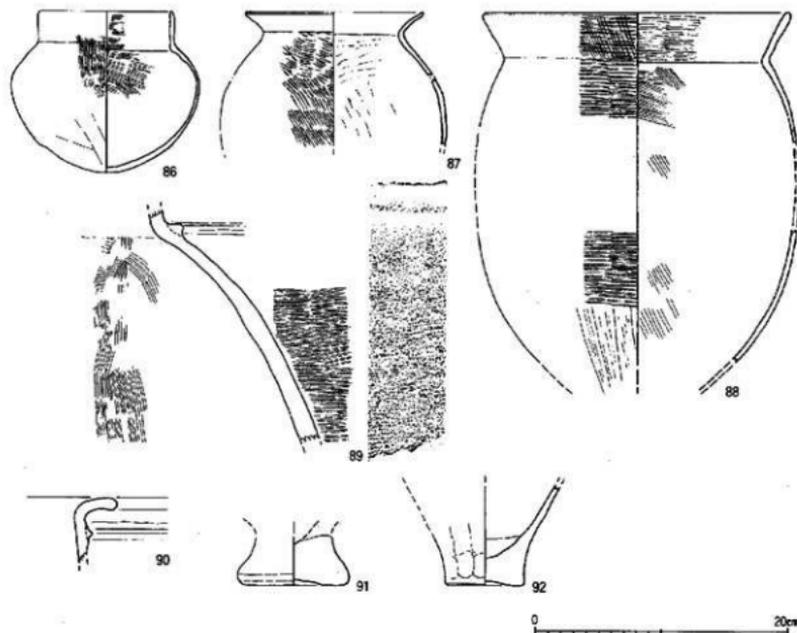


Fig. 17 SC23出土遺物 (1/4)

1/3片である。口径は83が7.1cm、84が復元で7cmを測る。器高はいずれも8.8cmを測る。83が表面は磨滅するが、外面ハケ目が残し、内面指ナデ痕が残る。84も表面の磨滅がひどいが、内面に指押さえ痕が残る。色調は83・84とも明橙色を呈し、胎土も83・84とも精良である。焼成は84がやや甘い。85は床面のSP453出土のミニチュア土器である。口径3.4cm、器高は3.2cmを測る。色調は淡黄色を呈す。104は磨製石斧の欠損品である。残存長9.1cm、残存幅6.1cmを測る。石材は玄武岩である。94は鉄製刀子である。現存長11.5cm、刃部現存長7.4cmを測る。柄には鹿角が部分的に残る。透過X線による観察では目釘は確認されなかったが、肉眼観察では鹿角の下に、茎の幅よりやや狭い、茎を挟み込む何らかの部材らしきものが見られる。現状では鉄製に見えるが、実際には鉄の部品なのか、有機物に鉄分が染み込んだものかは不明である。刃部に付着物等は見られない。

SC23 (Fig. 14, PL. 9) SC19に切られる住居跡で、床面は一段下がる。隣接地の分を合わせる

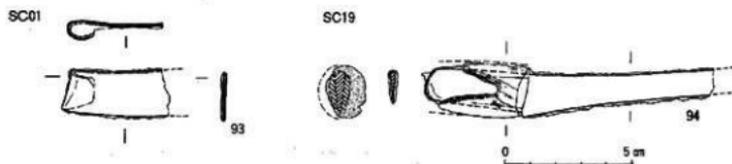


Fig. 18 SC01・19出土鉄器 (1/2)

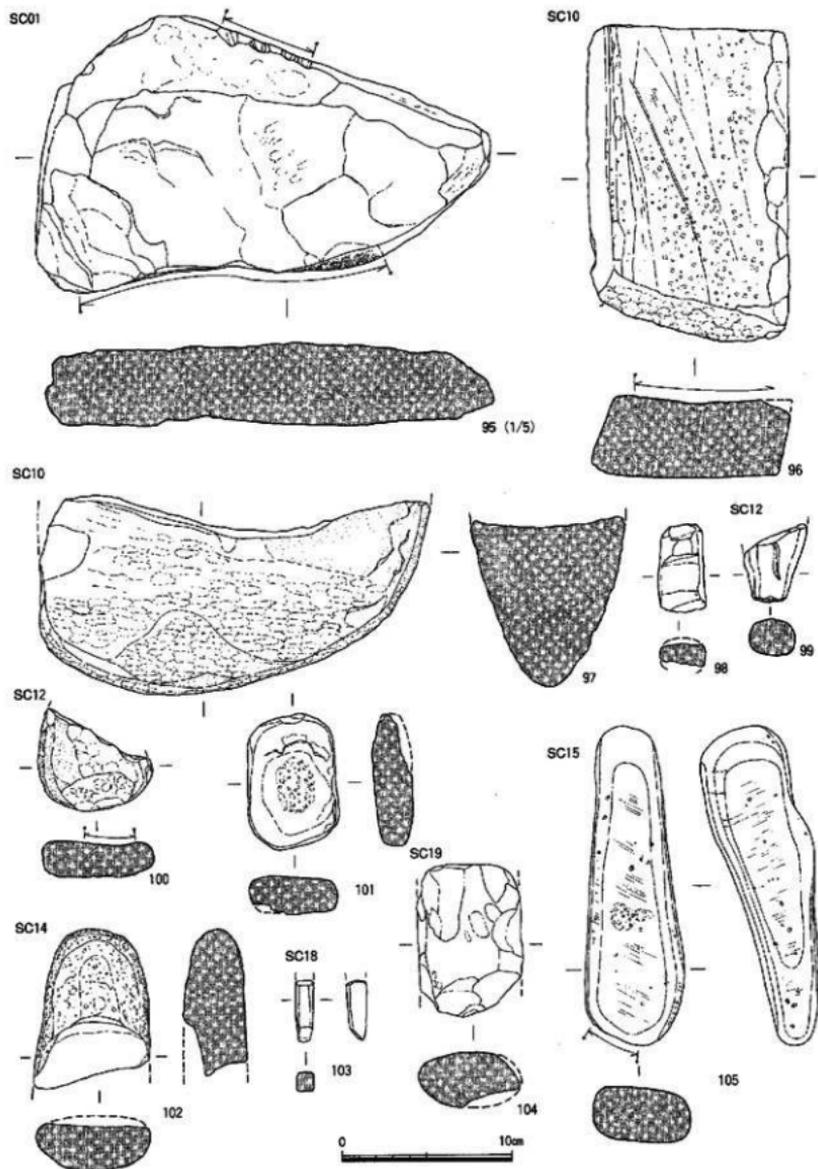


Fig. 19 各竪穴住居跡出土石器 (1/3・1/5)

と、長方形の平面形で、東西両壁にL型のベッド状遺構が付く形態である。東側ベッド状遺構は木棺墓SR01に切られるが、幅は60~90cm程である。壁溝は各壁とベッド状遺構の下に巡る。規模は東西長軸長6.1m、南北短軸長4.3mを測る。残存壁高は15cm程である。南偏中央は出入り口部分で、0.45×0.6mの円形状の土坑がある。主柱は2本である。床面には炭化物が残っていた。住居の埋土は黒褐色粘質土で地山ロームブロックを多く含む。

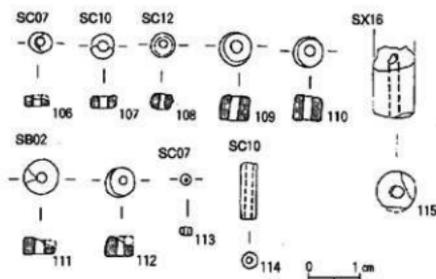


Fig. 20 各遺構出土土壺 (1/1)

出土遺物 (Fig. 17, PL. 15) 弥生中期の土器なども含む。86は直立する口縁部の壺で、破片から復元した。復元口径10.5cm、器高13cmを測る。外面はヘラナデで胴部上半は細かいハケ目、内面上半はやや粗いハケ目を施し、内底にかけては丁寧なナデである。87~89は壺。87は口縁から胴部片である。頸部から胴部にかけてはナメのタタキを施し、内面はナデ。色調は橙色、胎土は粗砂を多く含む。筑前型庄内壺と呼ばれるものである。88は口縁部が「く」字状に外反する長胴の壺胴部片。復元口径24.6cmを測る。口縁部外面から胴部中央にかけて横の平行タタキ、下半は板ナデである。口縁部にはハケ目を加える。口縁部内面はヨコのハケ目、胴部内面はナデ後ハケ目を加える。色調は淡黄色で、外面には黒斑がある。胎土は粗砂粒を多く含む。89は大型壺の肩片である。頸部に1条の突帯が付く。外面は磨減するが、平行タタキを加え、内面はハケ日後ナデである。色調はぶい橙色、胎土は粗砂を多く含む。90~92は弥生前期末から中期の土器で混入品。90は逆L字の口縁部細片。SC19床面出土である。91・92は底部片。91は上げ底の前期末の時期。底径は91が復元で8.8cm、92が6.3cmを測る。

② 掘立柱建物 (SB)

6棟確認したが、他にも柱穴として立派なピットがあり、実際にはまだ建物があったと考える。

SB01 (Fig. 21, PL. 11) 調査区西側中央で検出した、主軸を南北方向のN-7°-Eに取る2×2間の総柱建物である。南北桁行全長4.1~4.15m、東西梁行全長3.6~3.8mでやや歪む。柱間隔は1.85~2.15mを測る。柱穴は円形又は不整形円で、直径は55~80cm、深さは50~80cmを測り、大きく深くしっかりしている。底面のレベルは北側に向かって深くなる傾向がある。柱径は痕跡から15cm前後である。柱穴埋土は柱痕跡が暗褐色粘質土、掘方が黒褐色粘質土である。倉庫であろう。

出土遺物 (Fig. 23) 各柱穴から弥生土器、古墳時代土師器・須恵器片、黒曜石の剥片などが出土しているが、細片が大半で、時期を示しうるものは少ない。116は土師器の高台付埴底1/4片である。内外面調整はナデ。色調は明赤褐色を呈し、胎土は精良。平安時代のものである。117は須恵器の坏身小片である。復元口径8.5cmを測る。表面は磨減するが、ナデか。IVB期のものである。色調は灰白色で、胎土は精良。焼成は甘い。

SB02 (Fig. 21, PL. 11) SB01の北側で検出した、主軸をN-9°-EとSB01に揃える2×3間の総柱の建物である。桁行全長4.0~4.15m、梁行全長3.45~3.6mを測る。柱間は桁間が1.1~1.65m、梁間が1.65~1.8mを測る。柱穴は円形または不整形形で、直径60~80cm、深さは40~90cmを測る。底面のレベルは北側が若干深くなる。規模的にはSB01と変わらない。柱径は痕跡から15~20cmを推

第3章 調査の記録

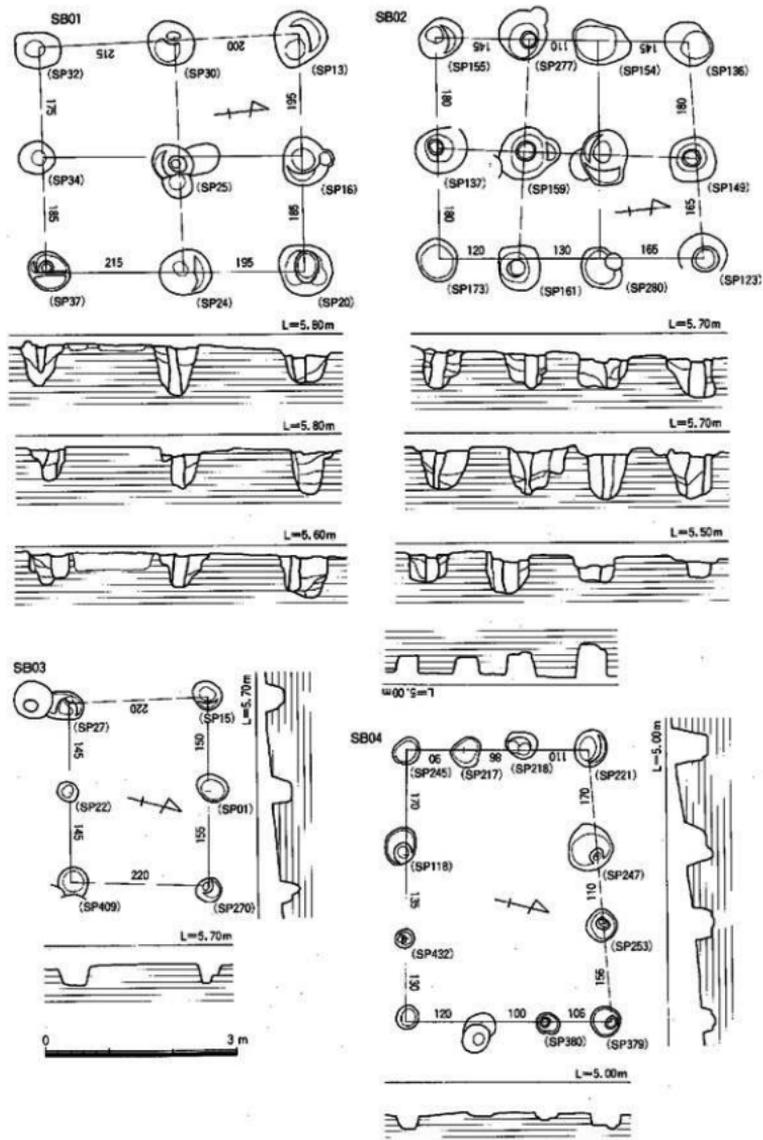


Fig. 21 SB01-04 (1/80)

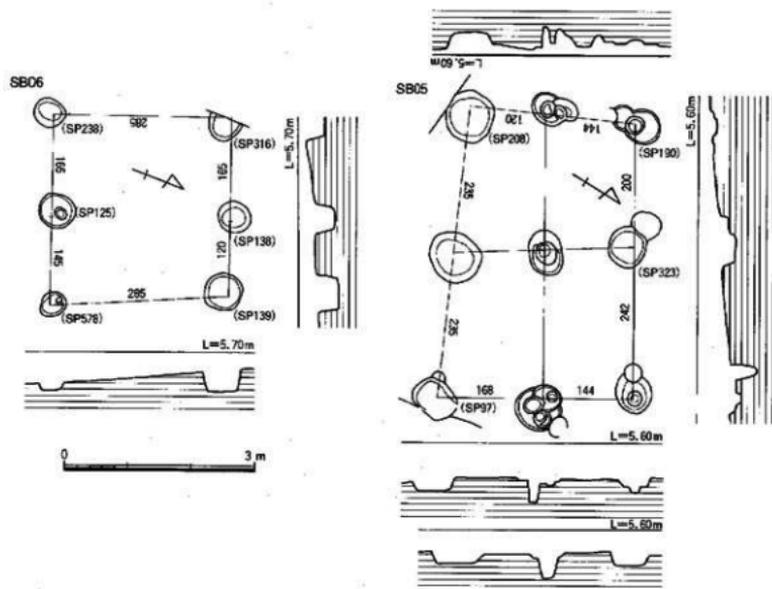


Fig. 22 SB05・06 (1/80)

定する。埋土は柱痕が暗褐色粘質土、掘方が黒褐色粘質土である。

出土遺物 (Fig. 20, PL. 16) 各柱穴から弥生土器片や古墳時代土師器・須恵器片、黒曜石の剥片などが出土しているが、図示しうものは少ない。111は滑石の白玉片である。直径6mm、厚み3mm、孔径2mmを測る。

SB03 (Fig. 21, PL. 12) SB01に切られる、主軸をN-77°-Eに取る1×2間の建物。桁行全長2.9~3.05m、梁行全長2.2mを測る。柱間は桁側で1.45~1.55m、梁側が2.2mである。柱穴は円形または楕円形で、直径は30~60cm、深さは30~50cmである。柱径は痕跡から約15cmである。また根石を持つものもある。埋土は暗褐色または黒褐色粘質土を主体とする。

出土遺物 各柱穴から弥生土器、古墳時代土師器・須恵器片、黒曜石の剥片などが出土しているが、図示しうものはない。

SB04 (Fig. 21, PL. 12) 調査区北側包含隔下層で検出した、主軸を東西南方向N-73°30'-Eに取る、3×3間の建物である。桁行全長4.36m、梁行全長2.86~3.26mを測り、全体に台形気味の平面である。柱間は桁側が1.1~1.7m、梁側が0.86~1.2mを測り、特に梁側が狭い。柱穴は円形から楕円形状で、直径は30~80cm、深さは4~65cmを測る。特に谷部側の東側が浅い。底のレベルは谷に向かって低くなる。柱径は痕跡から10cm前後であろうか。埋土は黒褐色粘質土を主体とする。

出土遺物 (Fig. 23) 各柱穴から弥生土器片を初め、古墳時代土師器・須恵器、黒曜石の剥片などが出土した。118・119は土師器。118は高坏脚部小片。119は甕脚部小片。いずれも磨滅がひどく調整は不明。色調はにぶい橙色、明橙色である。胎土は118が粗砂を少量含む。120~122は須恵器。120

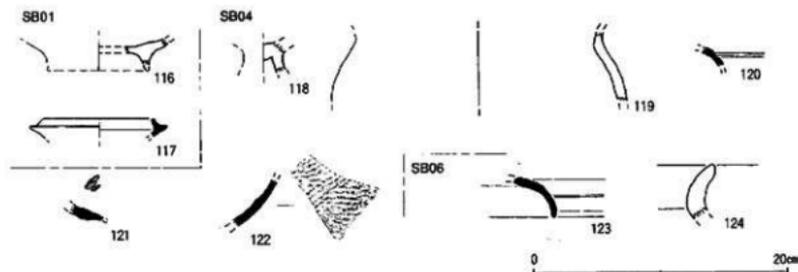


Fig. 23 各掘立柱建物出土遺物 (1/4)

は坏蓋ⅢB期頃の細片である。121は甕の肩部片。樽歯状の鋸歯文を加える。122は胴部細片。外面木目直線のタタキ、内面は当て具痕をナデ消し。色調は120が灰色、121・122が明灰色を呈す。胎土・焼成はいずれも良い。

SB05 (Fig. 22) 調査区谷部南東隅、包含層を撤去した段階で確認した、主軸を東西方向のN-61°-Eに取る2×2間の総柱建物である。桁行全長4.42~4.7m、梁行全長2.64~3.12mを測り、平面形がいびつな形状を呈す。柱間は桁側が2~2.42m、梁側が1.2~1.68mを測る。柱穴は円または楕円形で、直径は60~80cm、深さは10~20cm程であるが、谷部に向かって柱底のレベルは下がる。柱径は10~20cm程か。柱穴埋土は黒褐色粘質土を主体とする。

出土遺物 各柱穴から弥生土器片から古墳時代土師器・須恵器片、黒曜石の剥片などが出土するが、図示出来るものはない。

SB06 (Fig. 22, PL. 12) 調査区北西隅で確認したSC02を切る、主軸を東西方向のN-71°-Eに取る1×2間の建物である。桁行全長2.85~3.1m、梁行全長2.85mを測る。柱間は桁側が1.2~1.65m、梁側が2.85mを測り、梁間が広い。柱穴は円形又は楕円形状で、直径は44~60cm、深さは12~35cmを測る。底のレベルは余り差がない。柱径は痕跡から10~15cmであろうか。埋土は暗褐色から黒褐色粘質土を主体とする。

出土遺物 (Fig. 23) 123は須恵器の坏蓋小片である。天井と口縁部の境に沈線を巡らす。色調は灰色を呈し、胎土・焼成は良い。ⅢB期頃のものであろう。124は土師器甕の口縁部小片。全体に磨減がひどく、調整は不明。色調はぶい橙色を呈し、胎土は精良で金雲母を含む。

③ 土坑 (SK)

番号を附したものは17基あるが、住居跡に伴うものなどがあり、主なものを報告する。

SK01 (Fig. 24) SC12の北側で検出した、平面形が隅丸長形状の土坑。規模は長軸長1.56m、短軸長1.15m、最大深7cmを測る。底面はほぼ水平である。埋土は暗褐色粘質土で、地山ロームブロックを少量含む。

出土遺物 (Fig. 27) 弥生土器片など少量と須恵器細片が1点、黒曜石の剥片が出土している。125は土師器の甕口縁部1/6片である。復元口径は21cmを測る。口端部外面に紐状の薄い突帯が付く。磨減はひどく調整は不明。色調は淡橙色を呈し、胎土は精良。126は弥生土器甕底部片。底径は10.6cmを測る。器壁は磨減するが、ナデで内底には指押さえ痕が残る。色調は明橙色、胎土は粗砂を少量含む。

SK02 (Fig. 24) SC10の上面で検出した、平面形が長楕円形の溝状の土坑。規模は長軸長2.38m、

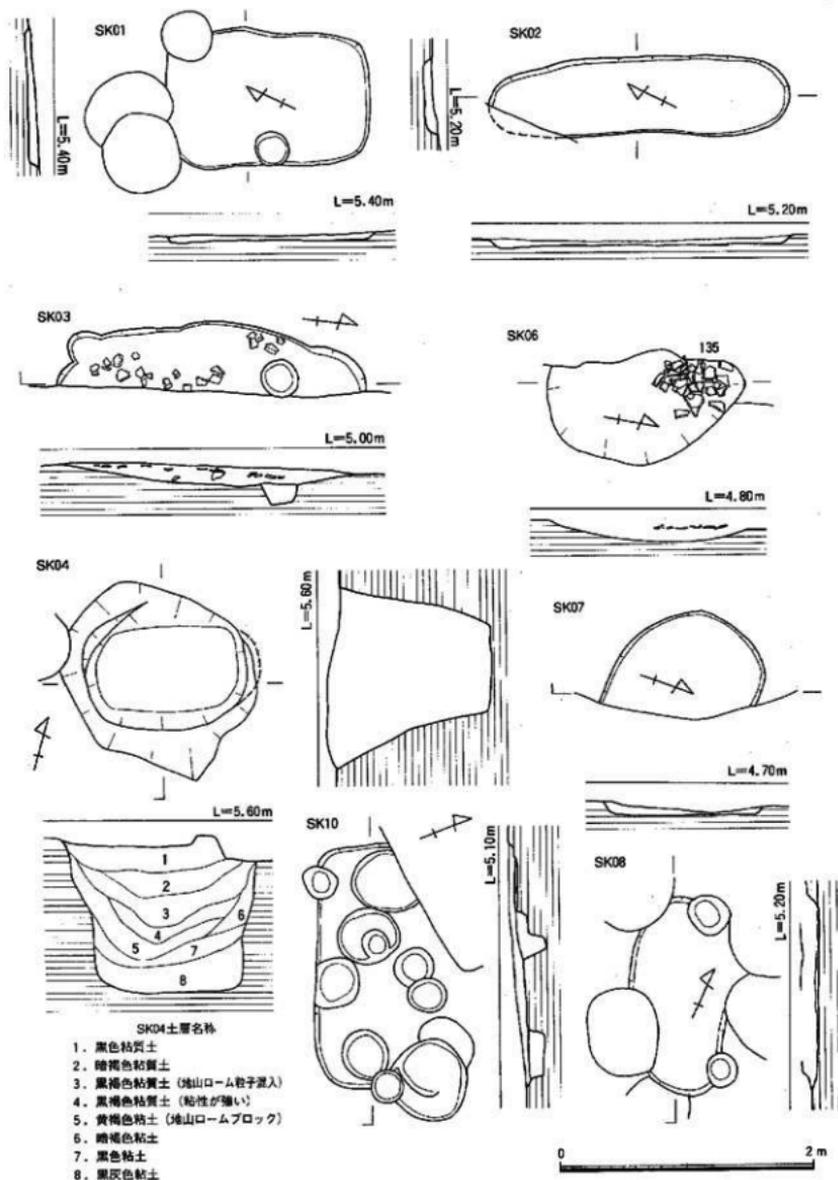


Fig. 24 SK01~04・06~08・10 (1/40)

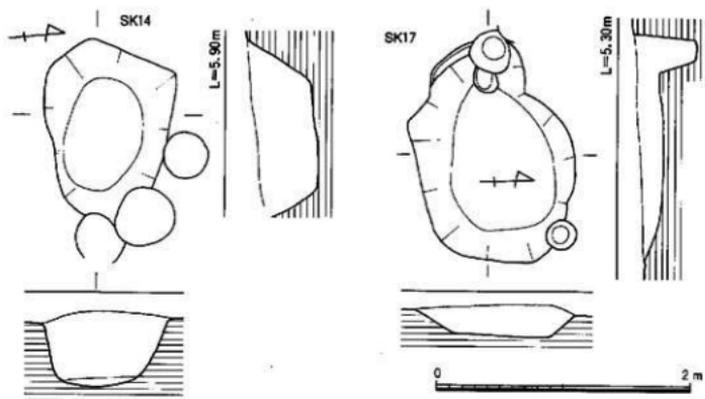


Fig. 25 SK14・17 (1/40)

短軸長0.66m、最大深7cmを測る。壁の残りは悪く、底面はほぼ水平である。埋土は黒褐色粘質土で、地山ロームブロックを少量含む。

出土遺物 (Fig. 27・33) 弥生土器から古墳時代土師器・須恵器片、黒曜石の剥片などが出土している。127は須恵器の高坏脚部片である。外面カキ目を施す。内面はナデ。色調は暗灰色。胎土は粗砂を少量含む。214は坏身1/4片で、復元口径は12.8cmを測る。ろくろ回転は逆時計回りである。128～130は土師器。128は甕の口縁部1/4片で、復元口径3cmを測る。内外面ハケ目。129は皿1/6片。復元口径は15.6cmを測る。全体に磨滅がひどく、調整は不明。130は把手。直径は2.4cmほどである。磨滅がひどいが、指ナデ調整である。色調は128が暗橙色、129が明橙色、130がにぶい黄色である。胎土は128・130が粗砂を含まず、129は精良である。

SK03 (Fig. 24, PL. 13) 調査区東壁にかかって検出した、平面形が長楕円形の土坑。規模は長軸長2.43m、短軸長0.55m以上、最大深16cmを測る。壁の残りは悪く、底面は中央がわずかに深くなる。埋土は黒褐色から暗褐色粘質土である。弥生土器の破片が散らばった状態で検出された。

出土遺物 (Fig. 27・35, PL. 17) 弥生前期の土器片などの破片が出土している。131～133は弥生土器。131・132は甕の口縁部小片。131は復元口径20.8cmを測る。内面に指押さえ痕とハケ目が残る。132は甕の口縁部細片。L字状に外反し、口端部が肥厚する形態。器壁の磨滅・剥落がひどいが、ナデである。133は口縁部が少し外反して開く鉢の口縁部1/6片である。口縁下に一条の三角突起が付く。口端部にわずかに刻目が残るようである。前期後半である。色調はそれぞれにぶい黄橙色、淡橙色、淡黄橙色を呈す。胎土はいずれも粗砂を多く含む。257は円形の磨石である。直径は7.4cm、厚みは2.7cmを測る。使用により全面磨滅している。石材は灰白色を呈す玄武岩である。

SK04 (Fig. 24, PL. 13) SC12の西側で検出した、平面形が上面で長楕円形、底面で長方形を呈す土坑。規模は長軸長1.71m、短軸長1.61m以上、最大深128cmを測る。壁面は途中から勾配が転換して直に近くなる。また西側と東側でオーバーハングする。底面はほぼ平坦である。埋土は凸レンズ状の堆積で、勾配の転換点までは黒色から黄褐色粘質土、それより下は黒色、黒灰色粘土である。貯蔵穴であろうか。

出土遺物 (Fig. 27) 土器片が少量出土している。134は夜白式土器の鉢底部片。底径6.0cmを測る。

全体に磨滅がひどいが、外面には黒斑が残る。色調は明黄褐色を呈し、胎土は粗砂粒を多く含む。

SK06 (Fig. 24) SD01の東側で検出した、平面形が楕円形状を呈すと思われる土坑。溝に切られるが、規模は長軸長1.55m、短軸長0.91m以上、最大深57cmを測る。中央が深くなる皿状の底面である。この北側に須恵器の甕1個体が潰れた状態で出土した。

出土遺物 (Fig. 27, PL. 16) 土師器の細片やIVA期位の須恵器片が少量出土している。135は須恵器の甕1/3片で、締まった頸部から外に開く短い口縁部が付く形態である。口端部は上方に短く屈折する。復元口径は19.8cm、最大胴径36.4cm、器高34.6cmを測る。胴部外面は木目直交のタタキ、内面は同心円状の当て具痕が密に残る。色調は灰白色、胎土は粗砂をわずかに含む。焼成は良好・堅緻。

SK07 (Fig. 24) 調査区北東隅で検出した不整の楕円形を呈すと思われる土坑。長軸長1.32m、短軸長0.88m、深さは10cmを測る。底面はほぼ平坦である。埋土は表と同じ褐色土で、新しい感じの土である。

出土遺物 古墳時代の土師器細片が少量と須恵器の細片3点、黒曜石の剥片などが出土している。

SK08 (Fig. 24) 包含層除去後、地山面上で検出した、平面が楕円形を呈する土坑。長軸長1.58m、短軸長0.8m、深さは15cmを測る。深さは浅く、底面はほぼ平坦である。出土遺物はない。

SK09 (Fig. 9) SC12の東側床面で検出した隅丸形状の土坑。住居内の土坑であろう。

出土遺物 (Fig. 27) 弥生土器片などが少量出土している。136は刻目突帯文土器の深鉢の口縁部1/5片である。復元口径は22.8cmを測る。口端部より少し下に、棒状工具による刻目突帯が付く。外面は貝殻腹縁によるナデ。内面は磨滅するがナデか。色調はにぶい褐色。胎土に粗砂を多く含む。

SK10 (Fig. 24) 包含層下の地山面上で検出した隅丸長方形形状の土坑である。長軸長1.96m、短軸長1.07m、深さ4cmを測る。壁面の残りは悪い。底面は東側に傾斜している。出土遺物はない。

SK14 (Fig. 25) 調査区南側で検出した不整形形状の土坑。規模は長軸長1.48m、短軸長1m、深さは60cmを測る。上面にはピットが切り込むが、掘り上げた状態では底面断面は船底形を呈した。底のレベルは東側が深くなる。出土遺物はない。

SK17 (Fig. 25) SC12床面で検出した不整楕円形状の土坑。規模は長軸長1.78m、短軸長1.26m、

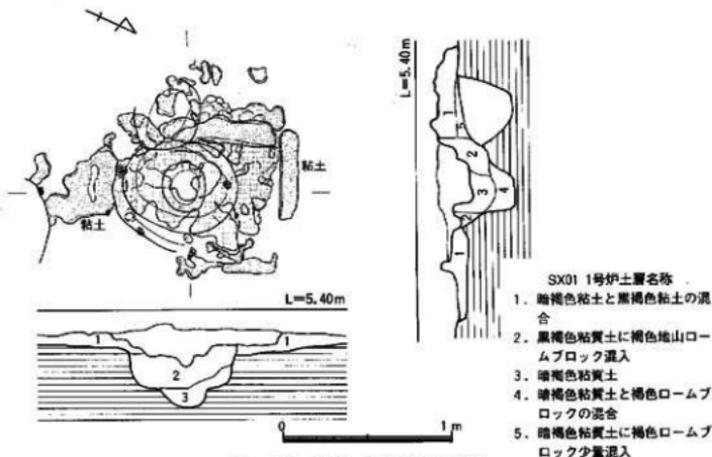


Fig. 26 SX01 1号炉跡 (1/30)

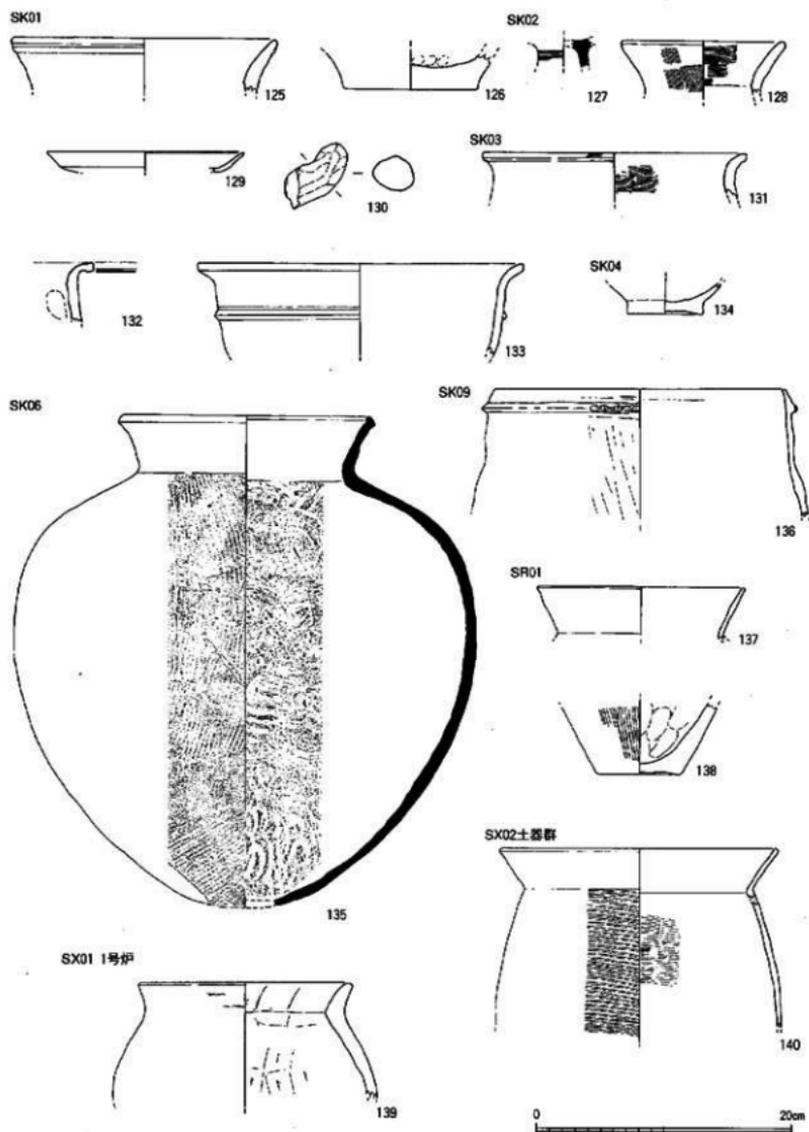


Fig. 27 各土坑・SX01 1号伊跡出土遺物 (1/4)

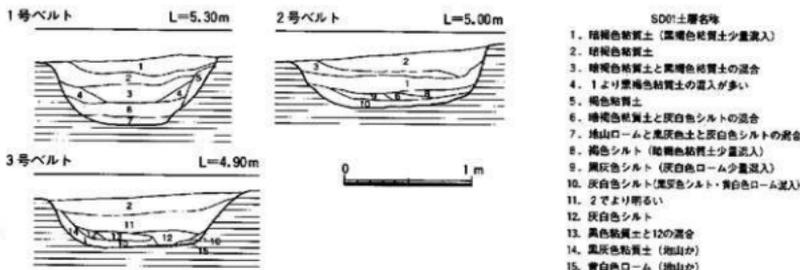


Fig. 28 SD01土層図 (1/40)

深さは25cmを測る。断面は逆台形を呈する。埋土は黒褐色粘質土と地山褐色ロームの混合である。

出土遺物 古墳時代の土師器片が少量出土している。

④ 木棺墓 (SR)

SR01 (Fig. 14, PL. 12) SC23のベッド状遺構を切る長方形を呈する墓である。全体の規模は長軸長1.9m、短軸長0.9m、深さは60cmを測る。土層断面を見ると、墓壇は二段掘りのようである。墓壇本体は長軸長1.78m、短軸長0.6m、深さ40cmを測る。墓壇の壁はほぼ直立し、底面は平坦である。土層断面と形状から木棺墓と考えた。

出土遺物 (Fig. 27・35) 137は土師器の甕口縁部1/4片である。復元口径16.4cmを測る。「く」字状に外折する口縁で、器壁は磨滅がひどく、調整は不明。138は弥生土器底部1/2片。復元口径6.8cmを測る。外面はハケ目、内面はナデである。色調は137がにぶい黄褐色、138がにぶい黄褐色で、胎土はいずれも粗砂を多く含む。258は凹石である。最大長16.1cm、最大幅11.1cm、厚みは5.4cmを測る。上面には使用痕が明瞭に残る。石材は灰褐色の砂岩である。

⑤ その他の遺構 (SX)

SX01 1号炉 (Fig. 26, PL. 10) SC14の東側のベッド状遺構の上面で検出した炉である。平面は長形状を呈し、規模は長軸長1.5m、短軸長1.15mを測る範囲で確認した。南から西、北にかけての周囲に白色粘土が分布し、それに囲まれる中央部分が焼土面である。その上面の埋土は黒褐色粘質土を主体とする。炉の焼土と粘土を撤去するとピットを確認した。竪穴住居の竈の可能性も考えたが、形態的にも難があるので個別の炉とした。

出土遺物 (Fig. 27, PL. 16) 139は土師器の甕口縁部1/4片。復元口径は16.8cmを測る。短く外反し、肥厚する口縁部を持つものである。器表外面は磨滅がひどいがナデ、口縁部は工具痕がかすかに残り、内面はヘラ削りである。外面には黒斑がある。色調はにぶい黄褐色、胎土は砂粒を少量含む。

SX02土器群出土遺物 (Fig. 27) SC14の東側包含層中で検出した土器群である。140は土師器の甕の口縁から胴部片である。復元口径は22cmを測る。全体に磨滅するが、胴部外面は平行タケキ、内面はヨコのハケ目である。色調は淡黄色を呈し、胎土は粗砂を多く含む。

⑥ 溝状遺構 (SD)

番号を付したものは4条である。

SD01 (Fig. 28, PL. 4) 調査区東側、包含層上面で検出した南北方向に直に延びる溝である。北

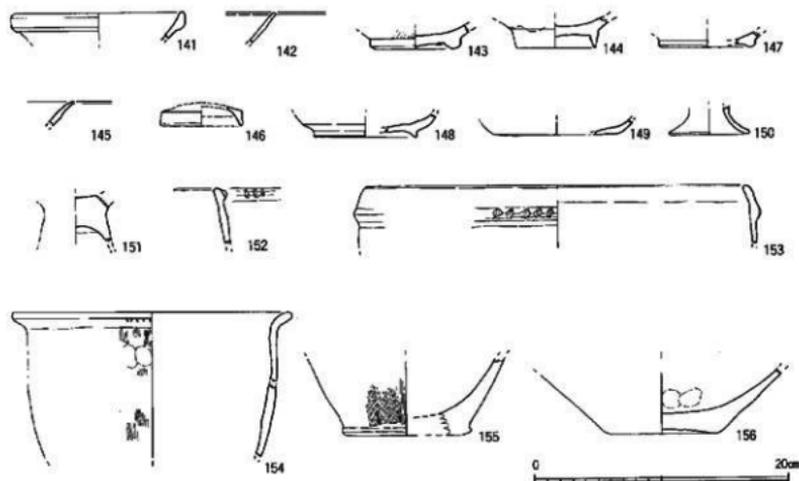


Fig. 29 SD01出土遺物 (1/4)

例第35次調査区の1号溝、第90次調査区の溝に繋がるものである。溝幅は北側で1.55m、南側で1.3mを、深さは0.45~0.55mを測る。底のレベルは南から北にかけて深くなる。溝断面は逆台形を呈する。溝の土層は暗褐色粘質土を主体とし、底にかけては灰白色シルトや黒灰色シルトが多くなる。弥生土器など古い時代の遺物が多いが、遺構の時期としては中世の13世紀頃と考える。

出土遺物 (Fig. 29・35, PL. 16) 弥生前期から古墳時代土師器・須恵器、中世の土師器、中国産磁器や黒曜石剥片などがコンテナ2箱程出土しているが、中世の時期を示す遺物の量はそれほど多くない。141~144は白磁である。141は碗口縁部1/8片である。復元口径は13.2cmを測る。クリーム色の釉が厚めにかかる。142は碗か皿の口縁部細片である。黄味がかった灰白色の釉が薄目にかかる。143はIV類の底部1/3片である。復元高台径は7.0cmを測る。外面はケズリ、畳付きは磨っている。釉は内面にかかるが、素地には化粧土をかけている。釉色は黄白色で、発色は悪い。144は高台部片である。高台径6.3cmを測る。高台部はケズリであるが、釉は淡黄色で薄目にかかるが、発色は悪い。胎土は141が白色、142・144は灰白色、143は黄白色で、それぞれ精良である。145は青磁碗か皿の口縁部細片である。灰オリブ釉が薄目にかかる。146は合子の蓋1/4片。復元口径は6.4cmを測る。口端部は釉を掻き取りするが、淡緑灰色の釉がかかる。細かい貫入が入る。青白磁であろうか。12~13世紀のもの。胎土は145・146とも灰白色で精良である。147は土師器埴底部片。復元高台口径は7.6cmを測る。磨減がひどく調整は不明。148は瓦質土器の埴底部1/3片。復元口径は8.2cmを測る。磨減するが、ナデ調整である。色調は147が淡橙色、148が灰白色を呈する。焼成はやや甘い。149は土師器の杯底部片。磨減がひどく調整は不明。150は土師器の脚台1/4片である。復元底径は6.4cmを測る。色調はにぶい橙色を呈し、胎土は精良である。151は弥生土器の高坏片か、磨減がひどく調整は不明。色調は浅黄色、胎土に粗砂を多く含む。152・153は夜白式土器である。152はやや内傾する口縁部を持つ小片である。153は深鉢の口縁部に刻目突帯を持つ小片である。磨減がひどく調整は不明。復元口径は約30cmを測る。口端部から2cmほど下の部分に1cm幅の刻み目のある三角突帯が付く。器壁は磨減が

ひどいが、調整はナデか。色調はいずれも浅黄橙色、154がにぶい黄橙色である。胎土はいずれも粗砂を多く含む。154~156は弥生土器である。154は甕1/8片で、復元口径は22cmを測る。口縁部が外反し、口端部の下側に浅い刻目が付く。外面は粗いハケ目後ナデである。155・156は底部片。155は1/2片で復元底径10.4cmを測る。外面ハケ後ナデ、工具痕が残る。156は壺の底部で、底径は8.8cmを測る。器壁は磨滅するがナデ。色調は155がにぶい赤褐色、154・156がにぶい黄橙色である。胎土は粗砂を多く含む。259は砥石片である。残存長8cm、最大幅6.6cmを測る。断面方形の形状で、各面が使用面である。石材は砂岩である。260は滑石の鍋底部細片である。外面はノミによるケズリ、内面は丁寧なケズリで、内外面煤が付着する。

⑦ 住居跡遺構出土遺物 (SX)

調査時に堅穴住居として調査した長方形の遺構から出土した遺物である。

SX16出土遺物 (Fig. 20・30, PL. 16) 157は瓦質土器の楕鉢か捏ね鉢の口縁部1/8片である。復元口径は30.6cmを測る。口縁部内面に段を持つ。内外面とも磨滅がひどいが、外面にはカキ目状の沈線が全体に施され、内面はナデか。色調は灰白色から灰色で、胎土は細砂を多く含む。焼成はやや甘い。158~164は須恵器である。158は坏葎天井部1/3片。天井は回転ヘラケズリ、その他はナデである。色調は灰白色、胎土は精良である。159~162はⅢB期頃の時期の坏身の口縁部1/6片・1/3片・細片・1/5片である。復元口径は159が12.5cm、160が10.4cm、162が11.7cmを測る。器高は160が3.8cmを測る。160の内底には同心円状の当て具痕が残る。色調は159・162が灰白色、160・161が灰色を呈す。胎土は160以外は精良である。163は坏1/4片である。復元口径14.8cm、器高は5.1cmを測る。8世紀代のものである。器表面は磨滅がひどく、調整は不明。色調は灰白色を呈し、胎土に粗砂粒を多く含む。焼成は甘い。164は高坏の細長い脚部片。ヘラ切りによる細長い透かしが入るが、中まで到達していない。透かしの下に沈線が1条入る。内外面しほり痕が残る。色調は黒灰色から灰色を呈し、胎土に粗砂を多く含む。165・166は土師器である。165は軽く外反する口縁部細片である。166は壺の底部1/6片である。平底気味の底部を持つ。表面の磨滅がひどく、調整は不明。色調は黄橙色を呈し、胎土は粗砂を多く含む。167はミニチュア土器の鉢で、口縁部を欠失する。口径は7.8cmを測る。器表面は磨滅するが、外面はタタキ痕が残り、内面に指押さえ痕が残る。115は色調は濃緑色を呈し、石材は碧玉であろうか。管玉片である。残存長1.4cm、直径0.8cm、孔径2mmを測る。

SX17出土遺物 (Fig. 30, PL. 16) 168はミニチュア土器の皿2/3片である。復元口径5cm、器高3cmを測る。外面は指押さえ痕が全面に残り、内面はナデである。色調は明褐色で黒斑があり、胎土は精良。

SX24出土遺物 (Fig. 30, PL. 16) 169は小型丸底増または鉢の口縁から胴部片。器壁は磨滅するが、外面はタテ、ナナメ、ヨコのハケ。内面に指押さえ痕が残る。色調はにぶい黄橙色を呈し、胎土は精良。

SX27出土遺物 (Fig. 30) 170は須恵器の坏身口縁部細片。色調は灰白色、胎土は精良、焼成は甘い。

SX28出土遺物 (Fig. 30) 171は須恵器の甕口縁部片。復元口径は20.2cmを測る。外面には縄縞波状文を施し、内面はナデ。色調は灰白色、胎土は黒色粒子を少量含む。焼成はやや甘い。

⑧ ビット出土遺物 (Fig. 32, PL. 16)

遺構番号を付けたのは596基である。ビットの埋土は暗褐色、黒褐色を呈するものが主体であり、時期的には弥生時代から中世にかけてのものである。

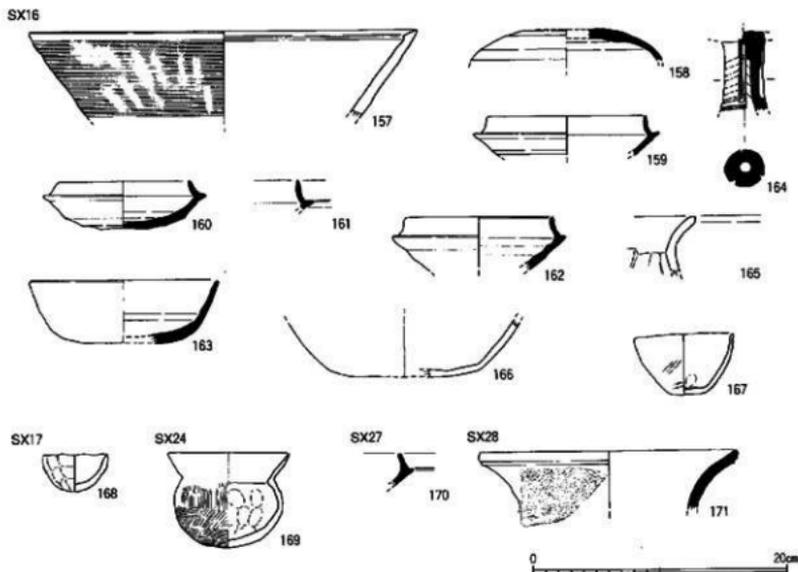


Fig. 30 住居跡状遺構出土遺物 (1/4)

172はSP5出土。須恵器の坏身口縁部1/3片。復元口径は12.6cmを測る。色調は灰色から暗灰色で、外面には自然釉がかかる。高台が付く形態で8世紀のものである。173はSP54出土。土師器の小皿1/4片で、復元口径は10.6cm、器高は1.2cmを測る。表面の磨滅がひどく、調整は不明。焼成はやや甘い。174はSP74出土。須恵器の坏身口縁部1/6片。色調は灰色で、外面には自然釉がかかる。175はSP93出土。白磁の口縁部細片である。176はSP95出土。土師器の底部1/2片。外面はナデで黒斑があり、内面も指ナデである。色調は橙色から暗灰褐色を早す。177はSP111出土。弥生上器の甕底部片。底径は7cmを測る。上げ底で調整はナデであるが、外面に工具痕が残る。色調はにぶい橙色で、胎土は質感があるが、締まっていない。前期末頃のものであろう。178はSP125出土。須恵器の天井部1/3片。天井部は回転ヘラケズリである。179はSP126出土。須恵器の坏身の細片。180はSP131出土。土師器の把手。断面は楕円形で、径は3.6×2.7cmを測る。色調はにぶい橙色。181はSP143出土。須恵器の坏蓋1/4片。復元口径は14.4cm、器高は3.1cmを測る。口縁部内面には明瞭な段が付く。ⅢA期頃であろうか。天井部は回転ヘラケズリで、ろくろ回転は時計回りである。内面にヘラ記号がある。182はSP155出土。須恵器の坏蓋1/4片。口縁内面に断面三角形の短いかえりが付く。色調は暗褐色から褐灰色で、胎土は精良。183はSP159出土。須恵器のV期の坏蓋1/4片。復元口径8.5cmを測る。口縁内面に断面三角のかえりが付く。色調はにぶい黄

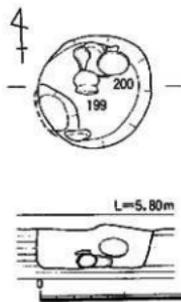


Fig. 31 SP459遺物出土状況(1/30)

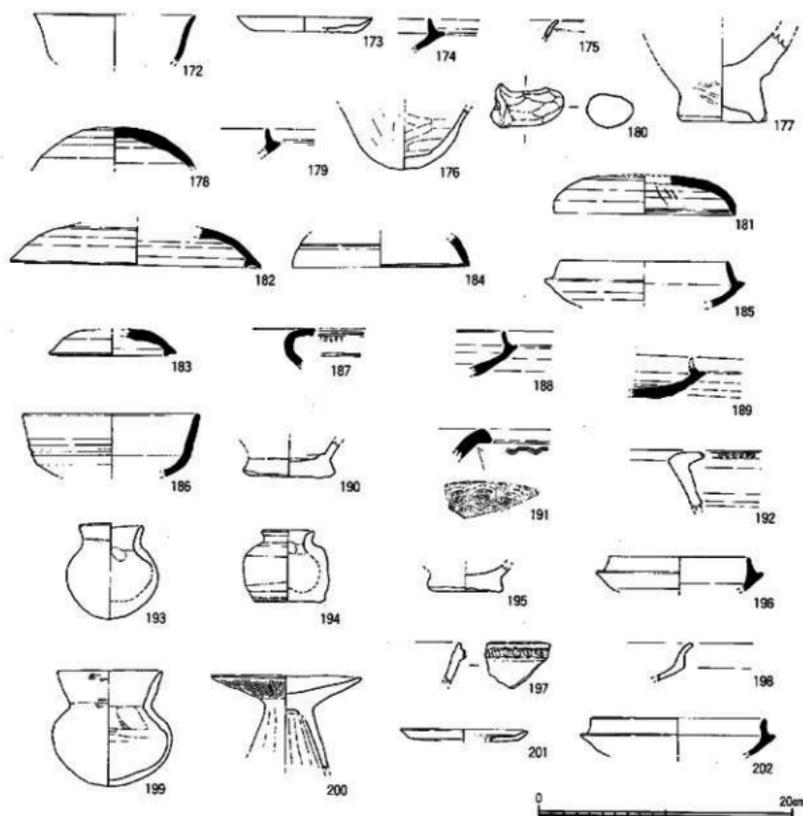


Fig. 32 各ピット出土遺物 (1/4)

橙色で、胎土は精良で、焼成は甘い。184はSP161出土。須恵器の坏蓋1/6片。復元口径は14cmを測る。口端部内面に軽い段が付き、天井部と口縁部の境に浅い沈線が巡る。胎土は精良。185はSP168出土。須恵器の坏身1/6片。復元口径13.2cmを測る。口縁部の立ち上がりが高い。内外面はナデ。色調は灰黄色で、胎土は精良。186～189は須恵器である。186はSP221出土。高坏の坏部片1/3片。復元口径は13.8cmを測る。口縁部外面には沈線が巡る。胎土に砂粒を含むが精良。187はSP238出土。大きく外反する口縁部細片である。口端部に浅い沈線が巡る。口縁部外面に櫛齒状のナデが入る。188はSP240出土。坏身の細片で、外面は灰色で、自然釉がかかる。189はSP253出土。坏身1/6片。口縁部を欠失する。底部は回転ヘラケズリ。色調はにぶい赤褐色で、胎土は砂粒を含む。190はSP280出土。夜臼式土器の底部片。調整は磨減がひどいが、ナデである。色調はにぶい黄褐色で、胎土に粗砂粒を多く含む。191はSP399出土。須恵器の壺口縁部小片。口縁部外面には波状の沈線が、口端部直下には爪形の刺突文が入る。色調は外面オリブ黒色である。192はSP324出土。弥生土器の甕口縁部片。口

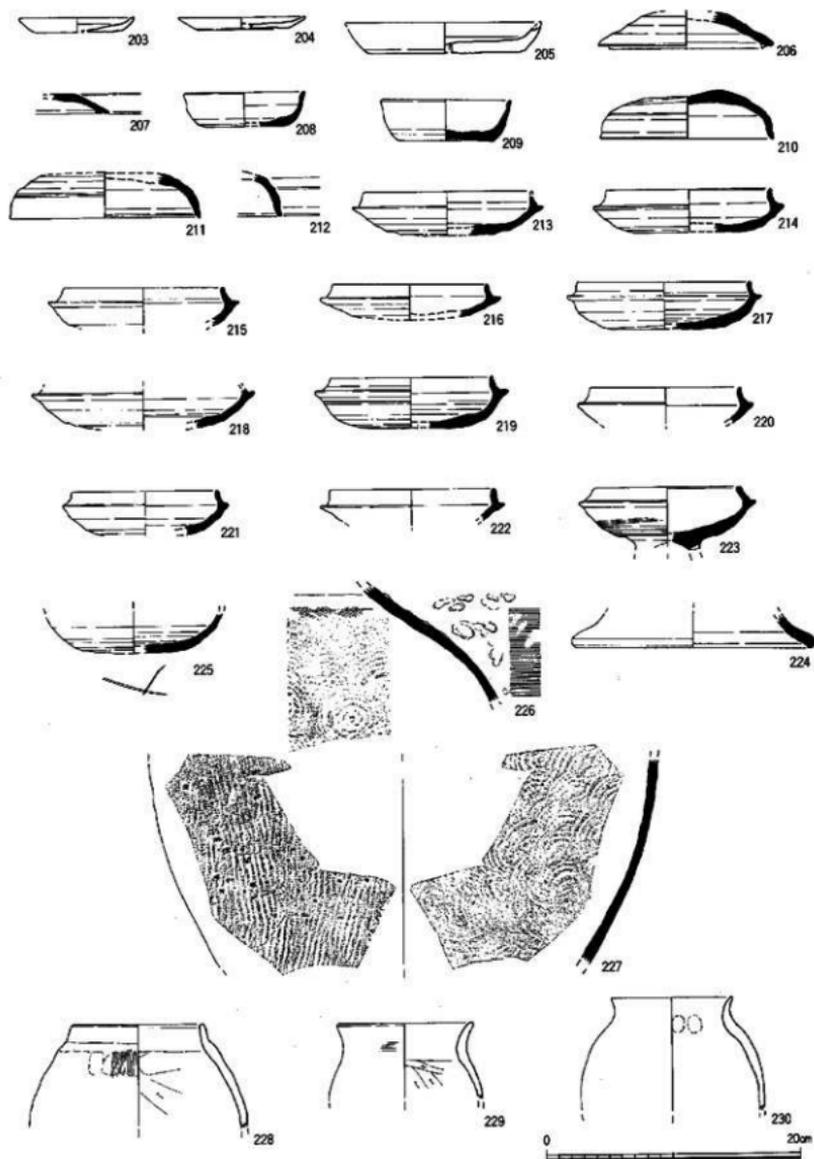


Fig. 33 包含層出土遺物 1 (1/4)

縁部に刻目、頸部に三角突帯が付く。中期初めか。193はSP343出土。小型壺で完形である。口径は5.1cm、器高7.7cmを測る。丸底で内外面調整はナデ。内面に指押さえ痕が残る。色調は橙色で、外面には黒斑がある。胎土は精良。194はSP348出土。壺形の小壺で完形である。口径は4.0~4.2cm、最大胴径は6.6~7.4cm、器高7.8cmを測る。外面はヘラナデ、底部は回転ヘラケズリ、内面はナデである。色調は淡黒色を呈し、胎土は粗砂を少量含み、焼成は良好。SB05を切るピットである。195はSP378出土。弥生土器の底部片である。底径6cmを測る。調整はナデ。196はSP413出土。須恵器坏身1/6片。復元口径は11.0cmを測る。調整はナデとケズリである。197はSP414出土。夜白式土器の口縁部片。口端部より少し下に突帯が付く。磨滅がひどく、調整は不明。198はSP423出土。浅鉢口縁部細片である。弥生前期前半代のもの。199・200はSP459 (Fig. 31) 出土。199は小型丸底壺でほぼ完形である。口径8.3cm、器高は9.3cmを測る。器表面は磨滅するがナデで、外面に黒斑がある。200は高坏で口縁部がない。意図的に再調整を加えている。坏部外底はハケ目でその他はナデ、脚部内面はヘラケズリである。色調は199は灰黄褐色、200が明黄褐色である。201はSP497出土。土師器の小皿1/6片。復元口径10cm、器高は0.9cmを測る。磨滅がひどく調整は不明。202はSP509出土。須恵器の坏身1/6片。復元口径は13.8cmを測る。口縁の立ち上がりが直に近い形態。

⑨ 包含層出土遺物 (Fig. 33・34・36, PL. 16)

東側の包含層から縄文晩期末から弥生前期前半頃の夜白式土器や弥生時代中期にかけての土器、古墳時代前期から後期の土師器・須恵器、古代、中世の土師器皿などの遺物が多量に出土している。黒曜石の石鏃・剥片なども多数出土している。図化出来た主なものを紹介する。

203・204は土師器皿1/3片・1/2片である。復元口径は9cm・10cmを測る。204の底部は回転糸切り。205は土師器の坏1/2片。復元底径12.4cmを測る。器表面は磨滅するが、外底はヘラケズリ。胎土は精良である。8世紀代か。206~227は須恵器。206は7世紀後半代の坏蓋1/6片。大井部に拵みと、口縁内部に短いかえりが付く形態である。207も坏蓋1/6片で、短いかえりが付く形態。7世紀前半代。208・209は坏身。底部1/3片と1/4片で、復元口径は9.5cm・10.2cm、器高は2.8cm・3.4cmを測る。7世紀前半のもの。210~212は坏蓋片。6世紀後半のⅢB期のもの。210は1/2片、211は1/3片、212は口縁部細片である。復元口径は210が13.6cm、211が14.8cm、器高は210が3.9cmである。いずれも口端部内面に軽い段を有する。213~222は坏身片。いずれもⅢ期であろう。213は1/5片で復元口径は13.2cmを測る。214~217は1/4片で、復元口径は12.8cm・12.5cm・12.2cm・13.8cmを測る。214のろくろ回転は逆時計回り。217は色調がぶい赤褐色である。218は1/5片で、復元受部径は17.4cmを測る。有蓋高坏の可能性ある。219・220・222は1/6片、221は1/4片で、復元口径はそれぞれ12.8cm・11.8cm・13.2cm・11.6cmを測る。器高は219が4.1cmを測る。223は有蓋高坏坏部1/3片。復元口径は11.4cmを測る。外底にはカキ目が入る。脚部にはヘラ切りによる透かしが入る。224は高坏の脚部小片。脚部径は復元で19cmを測る。225は壺の底部1/3片。底部は回転ヘラケズリで、ヘラ記号がある。色調は灰色でやや黒い。226は大型の甕か壺の肩部から胴部片。外面はカキ目を施すが、自然釉やガラス質の付着物が厚く付着している。内面は頸部がナデでヨコハケ、胴部内面は同心円状の当て具痕が残る。色調は灰オリーブから青灰色を呈し、胎土は精良。227は甕の胴部下片。外面はカキ目後平行タタキ、自然釉がかかる。内面は同心円状の当て具痕が残る。

228~239は土師器。228は小型壺の口縁部から胴部1/3片。内傾する短い口縁を持つ。復元口径は10.2cmを測る。外面はタテのハケ目、内面はヘラケズリ。229~231は甕。229は胴部1/10片で、復元口径は約11cmを測る。230は1/4片で、復元口径は9.4cmを測る。締まりのない頸部から、外反する短

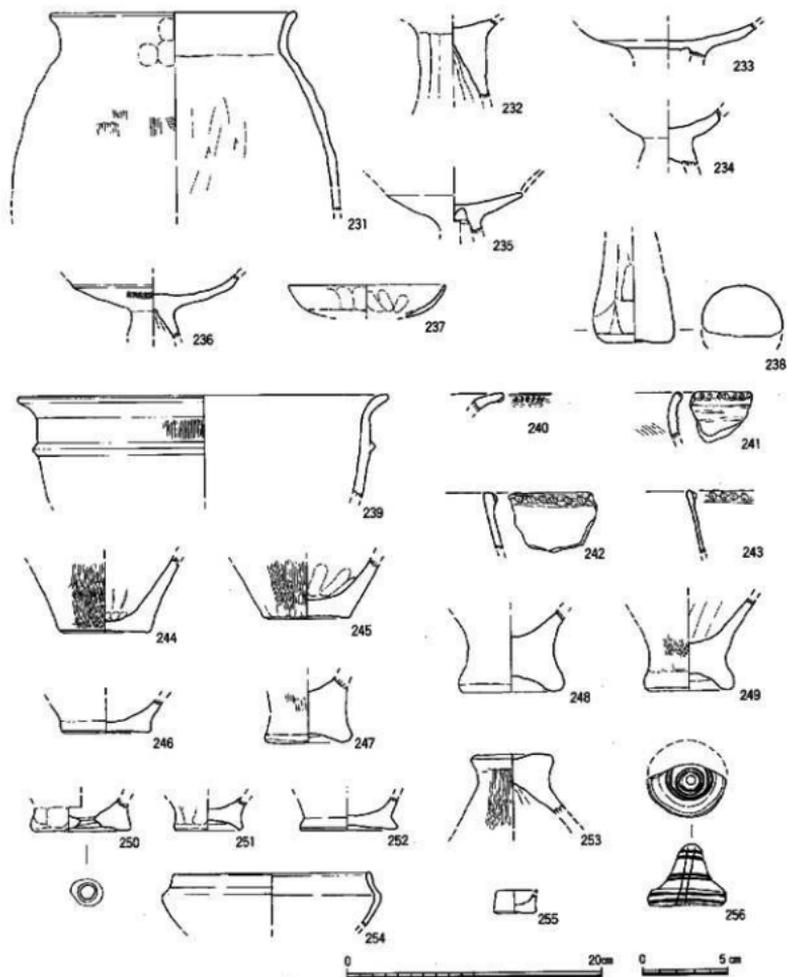


Fig. 34 包含層出土遺物 2 (1/4・1/3)

い口縁が付く形態。磨滅がひどいが、内面に指押さえ痕が残る。231は口縁から胴部1/4片。復元口径は19.4cmを測る。器壁は磨滅するが、ハケ目と指押さえ痕、内面はヘラケズリである。色調はにぶい橙色で、粗砂粒と赤色粒子を含む。232～236は高坏である。232は脚筒部1/2片。外面はヘラケズリ。色調は橙色で、胎土は精良。奈良時代の8世紀後半代のものである。233は坏底部の3/4片。234は坏部片。底が丸味を持つ形態。器壁の磨滅はひどい。235・236は坏底部片である。235は器壁の磨滅がひどい。

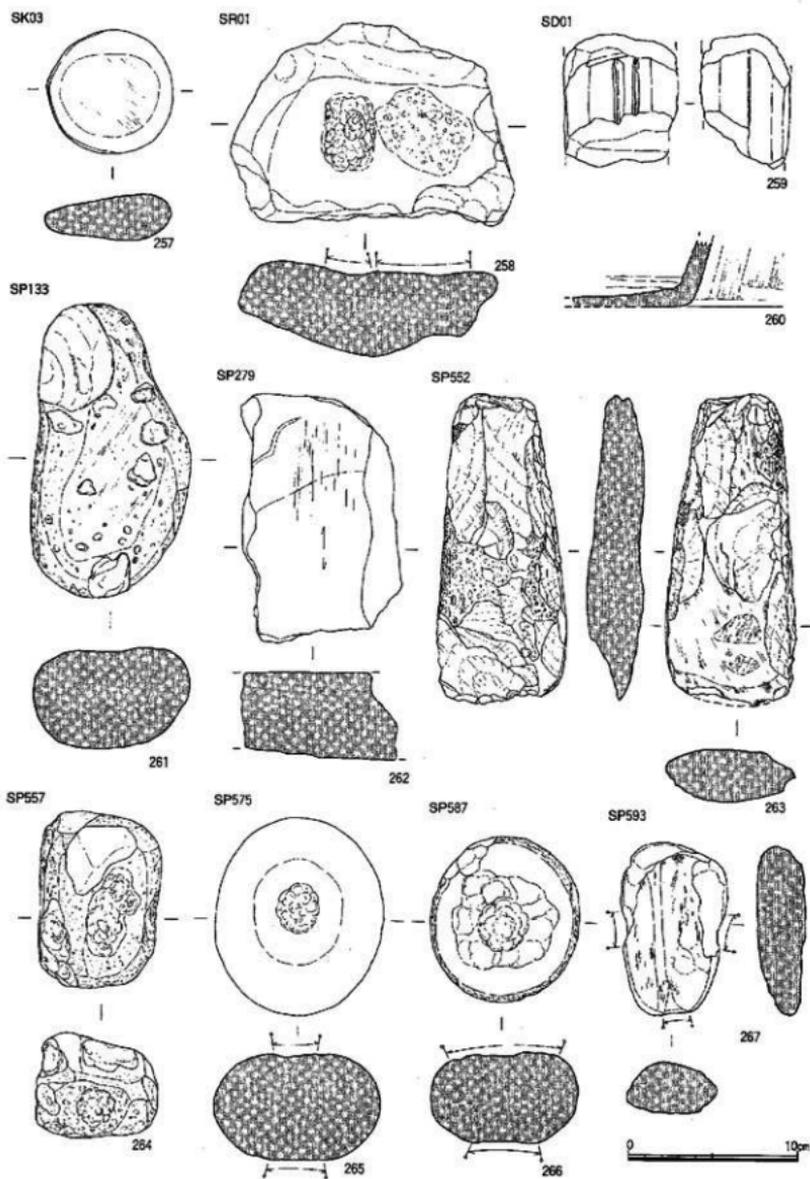


Fig. 35 各遺構出土石器 (1/3)

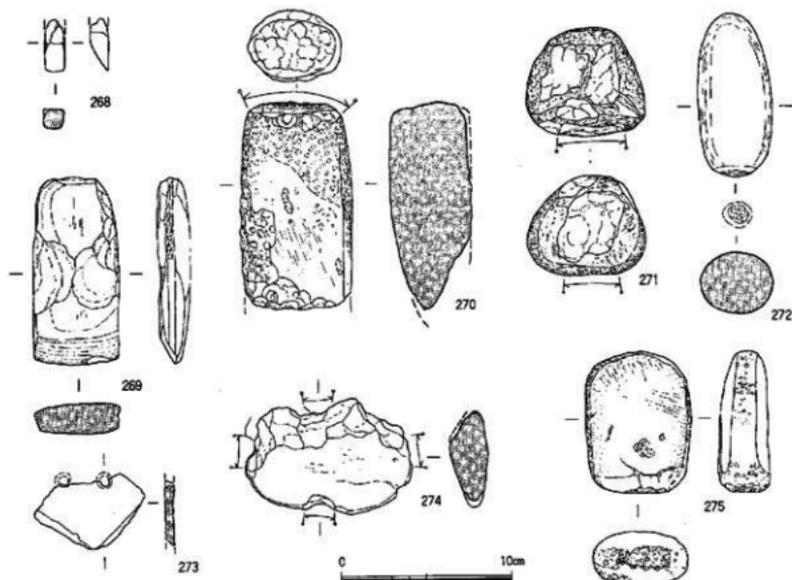


Fig. 36 包含層出土石器 (1/3)

236は1/3片で、外面にハケ目が残し、底部と口縁部の境に段を有する。237は小型の皿1/6片。復元口径は12.2cmを測る。指押さえ痕が内外面に残る。238は角形と呼ばれる支脚片である。中実で、復元底径は6.4cm、残存高は8.3cmを測る。色調は明赤褐色を呈し、胎土は粗砂を多く含む。

239～256は弥生土器。239は甕の口縁部1/8片。復元口径は29.3cmを測る。頸部に1条の三角突帯が巡る。240～243は刻目を持つ口縁部小片。240は甕か。241～243は夜白式土器の深鉢か。244～252は底部片。244・245はわずかに上げ底。底径は7.4cm・6.8cmを測る。244は外面にハケ目、内面に工具痕が残る。245の底部には軽い段が付く。外面はハケ目で工具痕、内面には指押さえ痕が残る。246は底部片で、底径は7.0cmを測る。器壁の磨滅がひどく、調整は不明。247～249は上げ底の甕底部片で、前期末から中期初めのもの。底径はそれぞれ6.9cm・8.2cm・7.0cmを測る。249の内面には上具ナデと外面にハケ目が残る。250は甕の底部片である。底径は7.8cmを測る。孔は直径1.2cmを測るが、焼成後に穿孔されている。251・252は底部片。底径は251が5.4cm、252が7.6cmを測る。251は高台状の底部である。252は具痕が残り、内面はナデ。253は蓋の天井部片。天井径6.4cmを測る。外面はタテのハケ目で工具痕が残り、内面はナデ。254は鉢口縁部1/6片で、復元口径は15.6cmを測る。器壁は磨滅がひどく、調整は不明。255はミニチュア土器の杯である。口縁部を欠失するが、底径は3.3cm、復元口径は3.2cm、復元器高は1.9cmを測る。器壁は磨滅し、調整は不明。色調は黄褐色で、胎土は精良。256は土製紡錘車1/2片強である。直径4.6cm、器高は3.8cmを測る。頂部、中央、底部に2条ずつ、6条の沈線が巡る。頂部から底にかけて斜めの直径5mmの孔が穿たれている。色調は暗褐色を呈し、胎土は精良である。弥生時代前期のものである。

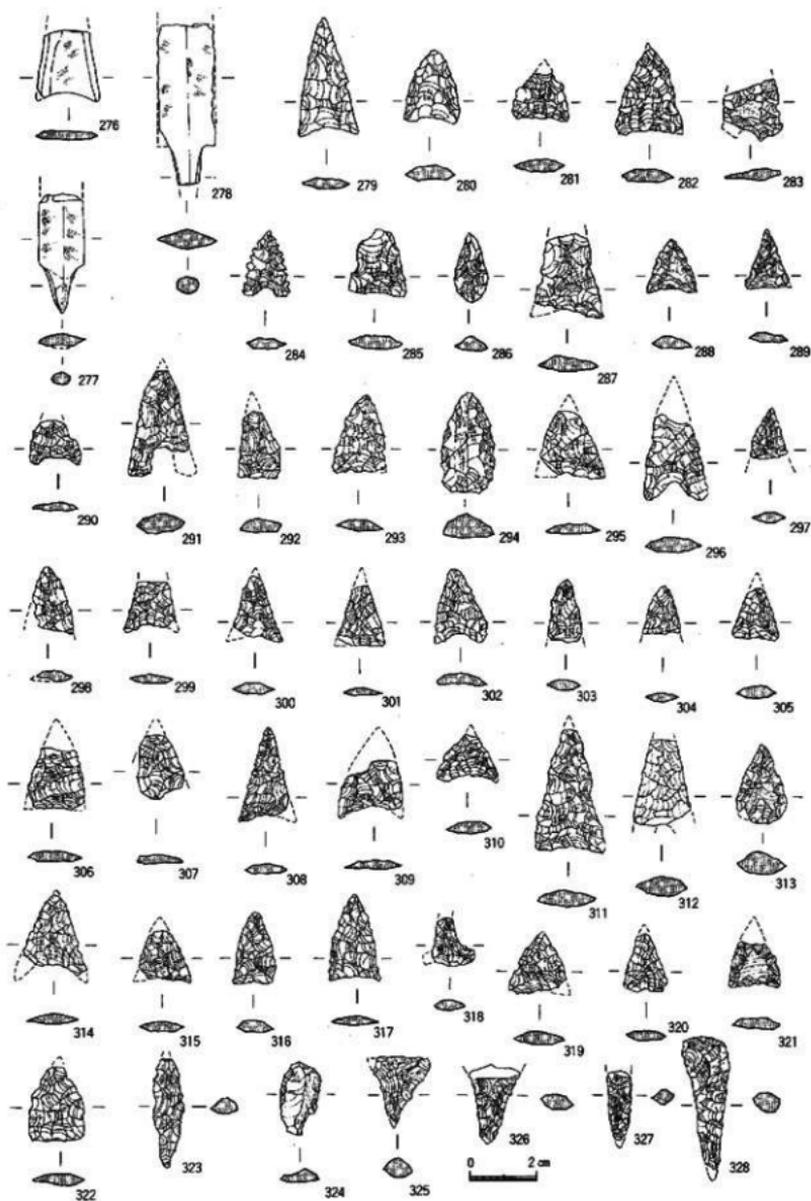


Fig. 37 各遺構出土石鏃・石鏃 (2/3)

⑩ 各遺構出土石器

各ビット出土石器 (Fig. 35・37, PL. 17) 261はSP133出土の褐色を呈する転蹠で、赤く焼けているような色調を呈す。全長17.7cm、幅9.1cm、厚み6.3cmを測る。中に小石を取り込んでいる。使用によるのか部分的に磨滅している。262はSP279出土。台石か砥石である。上面は凸面状に湾曲するが、使用により磨滅している。残存長は14.8cmを測る。263はSP552出土。大型の磨製石斧の欠損品。残存長18.7cm、最大幅7.6cm、厚み3.3cmを測る。刃部は研磨で研ぎ出すが、全体に使用による欠損がひどいが、敲打調整痕が残る。石材は暗灰色の粘板岩か。264はSP557出土。石銚形を呈す砥石である。全長10.5cm、幅7.1cm、厚み6.5cmを測る。各面に敲打調整痕と使用痕の凹みがある。石材は浅黄色を呈す砂岩。265はSP575出土。楕円形を呈す凹石で、長径11.9cm、短径9.9cm、厚み6.4cmを測る。上下両面に使用痕が残る。石材は花崗岩。266はSP587出土。楕円形を呈す凹石で、長径10cm、短径8.7cm、厚み5.6cmを測る。上下両側面に使用痕が残る。石材はピンク味を帯びた灰白色の花崗岩。267はSP593出土の自然礫の石錘。全長10.5cm、幅6.3cm、厚み2.9cm、重量248gを測る。各側面中央に紐掛けのノッチがあり、紐ずれ痕がある。石材は玄武岩か。

包含層出土石器 (Fig. 36, PL. 17) 268はトレンチ出土の小型方柱状片刃石斧片である。残存長3.1cm、幅1.1cm、厚み1.1cmを測る。全体に磨滅がひどい。石材は粘板岩で、風化が進んでいる。269は遺構面出土。扁平片刃石斧で、表面の風化欠損が著しい。全長は11.3cm、最大幅5.1cm、厚み1.9cmを測る。石材は灰白色を呈す粘板岩。270～275は包含層出土。270は磨製石斧を転用した砥石である。残存長12.4cm、最大幅6.7cm、厚み4.9cmを測る。研磨調整だが、敲打痕が残り、基部は砥石の使用痕が残る。また表面の荒れはひどい。石材は明オリブ灰色を呈す凝灰岩か。271は砥石。円球状の転蹠を利用したもの。全長6.5cm、最大幅7.0cm、厚み5.9cmを測る。各面に使用痕が残り、所々擦っている。石材は暗緑灰色を呈す緑泥片岩か。272は丸い棒状の砥石。全長9.7cm、径は4.3×3.7cmを測る。下端に使用痕がある。石材は灰白色を呈す花崗岩である。273は石包丁の細片。残存長は6.5cm、厚み0.8cmを測る。表面は剥落している。石材は粘板岩である。274は籐蹠で1/3が欠損する。残存長9.9cm、残存幅6.9cm、厚み2.2cmを測る。各面に紐掛けのノッチがある。石材は玄武岩である。275は石銚状の磨石。最大幅8.6cm、6.2cm、厚み3.1cmを測る。各面が擦られ、下端は打撃使用痕が残る。石材は砂岩である。

各遺構出土石鏃・石鏃 (Fig. 37, PL. 17) 276～278は磨製石鏃で、いずれも先端を欠損する。276はSC07出土の無茎の石鏃である。277はSC18出土。残存長3.6cm、最大幅は1.3cm、厚み4mmを測る。278はSD03出土。残存長は4.9cm、幅1.7cm、厚み5mmを測る。281～322は打製石鏃。279・280はSC07出土の無茎のもの。279はサヌカイト製。残存長3.6cm、幅1.8cm、厚み3mmを測る。280は先端部を欠損。残存長2.2cm、幅1.7cmを測る。石材は黒曜石である。281～283はSC10出土。いずれも無茎のもの。281は残存長1.4cm、幅1.6cm、厚み4mmを測る。282は残存長2.6cm、最大幅2.0cm、厚み3mmを測る。いずれも先端を欠失する。283は先端と基部の欠損。残存長1.4cm、幅1.3cmを測る。いずれも石材は黒曜石。284はSC12出土。無茎の凹基のもの。残存長2cm、幅1.4cm、厚み4mmを測る。側面は丁寧な調整を加えている。285・286はSC14出土。285は先端を欠損する。残存長2.0cm、幅1.7cm、厚み4mmを測る。286は細長い断面三角形のもの。残存長2.1cm、幅0.95cm、厚み4mmを測る。いずれも石材は黒曜石である。287はSC15出土。基部と先端を欠損する。残存長は2.6cm、幅2.0cm、厚み5mmを測る。石材は黒曜石である。288・289はSC19出土。288は三角形のもので、残存長は1.6cm、幅1.5cm、厚み4.3mmを測る。289は基部を欠損するが二等片三角形のもの。残存長は1.8cm、幅1.4cm、厚み2.5mmを測る。石材は黒曜石である。290はSB01出土。先端部を欠損する。残存長は1.4cm、幅1.4

cm、厚み2.5mmを測る。石材は黒曜石。291はSK04出土。凹基で、基部・先端を欠損する。残存長3.2cm、幅1.8cm、厚み6mmを測る。石材は黒曜石であるが、色は薄く透明感がある。292～296・298はSD01出土。いずれも石材は黒曜石である。残存長はそれぞれ2cm・2.4cm・3.0cm・2.0cm・2.6cm・2.1cm、幅は1.2cm・1.5cm・1.6cm・1.9cm・1.9cm・1.2cm、厚みは3mm・3.5mm・7mm・3mm・5mm・3mmを測る。297は包含層出土。先端部である。残存長1.6cm、幅は1.1cm、厚みは3mmを測る。石材は黒曜石。299～304はSX16出土。石材は黒曜石である。いずれも一部を欠損する。残存長は1.5cm・1.6cm・1.8cm・2.2cm・1.9cm・1.5cm、幅は1.5cm・1.5cm・1.3cm・1.5cm・1.0cm・1.2cm、厚みは3mm・3mm・2mm・3mm・3mm・3mmを測る。305はSX22出土。石材は黒曜石。先端を欠損し、残存長は1.6cm、幅1.4cm、厚み3.5mmを測る。306はSX07土器群出土。石材は黒曜石で、先端を欠損する。残存長は1.9cm、幅1.6cm、厚み3mmを測る。307はSP85出土。石材は黒曜石である。残存長は1.9cm、幅1.4cm、厚み2mmを測る。308はSP190出土。石材は黒曜石で、基部を欠損する。残存長は2.8cm、幅1.5cm、厚み3mmを測る。309はSP436出土。石材は黒曜石で、先端部と基部を欠損する。残存長は1.7cm、幅1.9cm、厚み3mmを測る。310はSP513出土。石材は黒曜石である。先端を欠損する。残存長は1.4cm、幅1.8cm、厚み3mmを測る。311～319は包含層出土。石材は312・214が安山岩、他は黒曜石である。311は大型で残存長3.7cm、幅2.1cm、厚み5.5mmを測る。312も大型の石鏃。残存長は2.6cm、幅1.8cm、厚み6mmを測る。313は基部が丸い形態。残存長は2.3cm、幅1.5cm、厚み7mmを測る。314は基部を欠損する。残存長は2.5cm、幅1.8cm、厚み3mmを測る。315は基部と先端を欠損する。残存長は1.6cm、幅1.6cm、厚み2mmを測る。316は五角形状を呈す。残存長は1.7cm、幅1.3cm、厚み3.5mmを測る。317は剥片利用か。残存長は2.6cm、幅1.6cm、厚み2.5mmを測る。318は異形であるが、一応石鏃とする。残存長は1.4cm、幅1.2cm、厚み3mmを測る。319は三角形で、基部を欠損する。残存長は1.9cm、幅1.7cm、厚み3mmを測る。320は遺構面出土。石材は黒曜石で、残存長は1.8cm、幅1.4cm、厚み3mmを測る。321は表採。石材は黒曜石で、残存長は1.4cm、幅1.5cm、厚み3mmを測る。322は北側トレンチ出土。石材は黒曜石。残存長は2.2cm、幅1.6cm、厚み3.5mmを測る。323～328は打製の石鏃で、石材は黒曜石である。323はSC07出土。細長い棒状で、両端が尖る。鏃部は使用により欠ける。残存長は3.3cm、幅0.9cm、厚み5mmを測る。324はSC10出土。鏃部が尖る形態。残存長2.2cm、幅1.1cm、厚み4mmを測る。325はSK01出土。逆三角形で、鏃部が尖るが欠けている。残存長は2.0cm、幅1.7cm、厚み7mmを測る。326はSX01 1号炉出土。鏃部先端は潰れている。残存長は2.4cm、幅1.5cm、厚み4mmを測る。327はSP247出土。棒状の鏃部片。残存長2.1cm、幅0.7cm、厚み4.5mmを測る。328は包含層出土。頭部が大きい棒状の鏃。先端は欠損する。残存長4cm、幅1.4cm、厚み6mmを測る。

3. 小 結

以上、調査の概要について述べたが、ここではそれらの簡単なまとめを行う。

遺構は時期幅は弥生時代から中世迄であるが、時期の主体としては弥生時代から古墳時代である。

竪穴住居跡は調査時、30棟ほどの番号を付したが、実際住居跡として報告できたのは10棟であった。時期別には弥生時代は2棟、残り8棟は古墳時代である。本調査区の住居の時期幅は畷辺諸地点で検出されている住居の時期幅にほぼ一致するものである。弥生時代はSC18・23であり、最も古いのはSC18で、時期を決める遺物はないが、住居の形態から前期後半代から中期前半にかけてのものであろう。SC23が後期末半頃の時期である。古墳時代は前期がSC10・14、中期がSC15・19、後期がSC01・02・07・12である。前期のものはSC10が古く前期初め頃である。中期のものはSC19が5世紀前半である。後期の住居跡は籠を持っており、須恵器の形態から6世紀後半代であろう。有田遺跡群ではこの

時期以降は竪穴式住居はほとんど見られなくなる。

掘立柱建物は、大きく主軸方向から2タイプに分類出来る。Ⅰ類の主軸をほぼ南北方向にとるSB01・02と、Ⅱ類の斜面に直交する主軸を東西方向に取るSB03～06に分ける事が出来る。時期的には遺構の切り合い関係などからⅡ類がⅠ類より古い。柱穴掘方から出土した遺物や、切り合い関係から遡ってもⅡ類が6世紀後半から7世紀前半頃である。Ⅰ類が9世紀の平安時代初期頃迄の時期である。当地点周辺では第64次地点周辺で該期の3本柱の構に囲まれた大型建物群があり、建物の方向は異なるものの、建物規模からそれに関連するものかもしれない。

土坑は16基の番号をつけたが、住居跡に伴うもの土坑もある。全体に残りが悪く、土坑の性格も明確でない。時期的にはSK03が弥生時代前期後半、SK06が7世紀初め頃である。他のものもほぼその時代幅の範疇に入ろう。

溝状遺構は中世の時期である。調査区一帯は16世紀前半、大内氏支配時の早良郡代であった大村興景の知行地、「中園屋敷」があったとされ、当地に中園という小字名が残っており、それに関わるような居館跡も調査で確認されている。今回の溝は時期差があるものの、第35次調査区の1～3号溝や、第125次調査区のSD02などに関連して区画を形成する可能性がある。

木棺墓SR01は切り合い関係から、弥生終末期の住居SC23を切りそれ以降、5世紀前半の住居SC19の前の時期に収まるものである。

1号炉跡は時期を決めうる明確な遺物はないが、切り合い関係などから古墳時代前期以降の時期であろう。

ここで特筆される事として各遺構・包含層から多量の黒曜石の石器及び剥片が出土している事である。この傾向は北側の第35次調査区でも見られる。弥生時代前期から中期にかけて、当地で黒曜石の石器製作が行なわれていた事が推測できる。

調査されてから、今回の報告書作成までに、既に15年の歳月が経過した。作成にあたっては、かなりの調査の記憶が筆者の脳裏から消し去られており、また調査の記録も紛失した部分があり、報告が表面的な書き方になってしまった。反省すると共に、やはり早く報告は出さなければいけないという事を痛感した。また当時の作業員のリストを整理した際、何人かの人が既に鬼籍に入っていた。改めて15年という歳月の長さを感じる次第である。

隣接調査区の関係文献

第35次調査区 【有田・小田部 第9集】福岡市埋蔵文化財調査報告書第173集 1988

第125次調査区 【有田・小田部 第20集】福岡市埋蔵文化財調査報告書第378集 1994

第175次調査区 【有田・小田部28】福岡市埋蔵文化財調査報告書第513集 1997

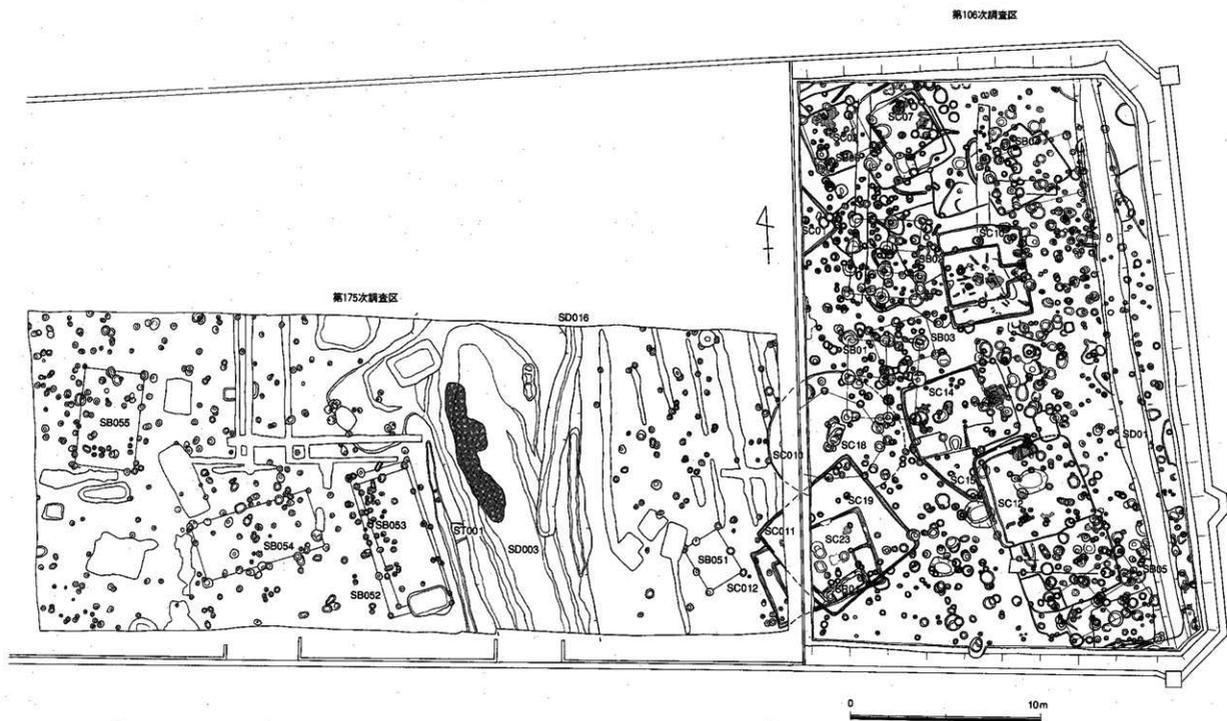


Fig. 38 第106・175次調査区遺構配置図 (1/200)

第4章 第147次調査出土遺物 (追加分)

1. 調査の概要と出土遺物 (Fig.39・40, PL.17)

調査区は早良区有田2丁目7-7に所在する。発掘調査は平成元年1月24日～3月31日まで行った。発掘調査の報告は1995年の『有田・小田部第21集』(福岡市埋蔵文化財調査報告書 第426集)で行ったが、谷部包含層の土器群出土遺物を中心に、報告もれの遺物があったので、今回報告するものである。調査の詳細については報告書を参照されたい。

1はSP11出土。須恵器の高台が付く坏底部1/5片。復元底径6.0cmを測る。2はSP48出土。須恵器の高坏杯部片。1条の三角突帯とその下に溝描きの波状文が施される。3はSP51出土。弥生土器の甕で、「く」字状を呈す口縁部片である。4～22は包含層出土。4～6は上層。4は古墳時代土師器の高坏坏部1/4片。復元口径は19.0cmを測る。器壁は磨滅するが、ナデか。接合面にはハケ目が残る。5は陶質土器と思われる坏口縁部細片。外面に2条の沈線が巡る。6は瓦質で、蓋1/6片である。復元口径13.6cmを測る。内外面はナデである。7は5c区で検出した。小型の完形の甕である。口径10.4cm、器高9.7cm、最大胴径10.2cmを測る。外面は粗いタテハケ、内面はナデで指押さえ痕が残る。色調は橙色で、胎土は精良。8は下層出土。逆L字の口縁部細片。頸部に突帯が付く。ナデ仕上げ。9～14は下層出土の甕の口縁部片。9～11は逆L字の口縁。調整は外面タテハケ、内面はナデである。9は5d区出土。1/4片で、復元口径29.4cmを測る。口縁内面には工具痕が残る。10は5e区出土。1/4片で、復元口径は28.0cmを測る。内面にはナデの擦痕が残る。11は5c区出土。1/4片で、復元口径は29.4cmを測る。12～14は「く」字状の口縁部片。12は5e区出土の1/2片。復元口径は16.2cmを測る。13は1/8片で、復元口径は19.0cmを測る。調整はナデ。14は上面出土。小片で外面はハケ目が残る。15～18は甕底部片。15・16は5d区出土。外面タテのハケ目と内面はナデである。15は1/2片で、復元底径は7.6cmを測る。16は底径7.5cmを測る。17・18は下層中間5d区・5e区出土。17は夜白式土器の底部1/4片。復元底径は6.8cmを測る。調整はナデである。18は底部1/3片。復元底径は9.2cmを測る。調整はナデで、指押さえ痕が残る。19は5c区出土。鉢口縁部片。復元口径は12.0cmを測る。器壁は磨滅するが、内面はヘラミガキか。色調は明橙色を呈す。20～22は器台。20は5d区出土。20は底部1/4片で、復元底径は12.0cmを測る。調整はナデ。21・22は下層中間の5e区・5d区出土。21は口縁部の1/3片。復元口径は11.0cmを測る。22は底部片で、底径は10.9cmを測る。いずれも調整はナデである。21の口縁部外面はハケ目が残る。色調はにぶい橙色を呈す。



Fig. 39 第147次調査遺構配置図 (1/250)

第4章 第147次調査出土遺物（追加分）

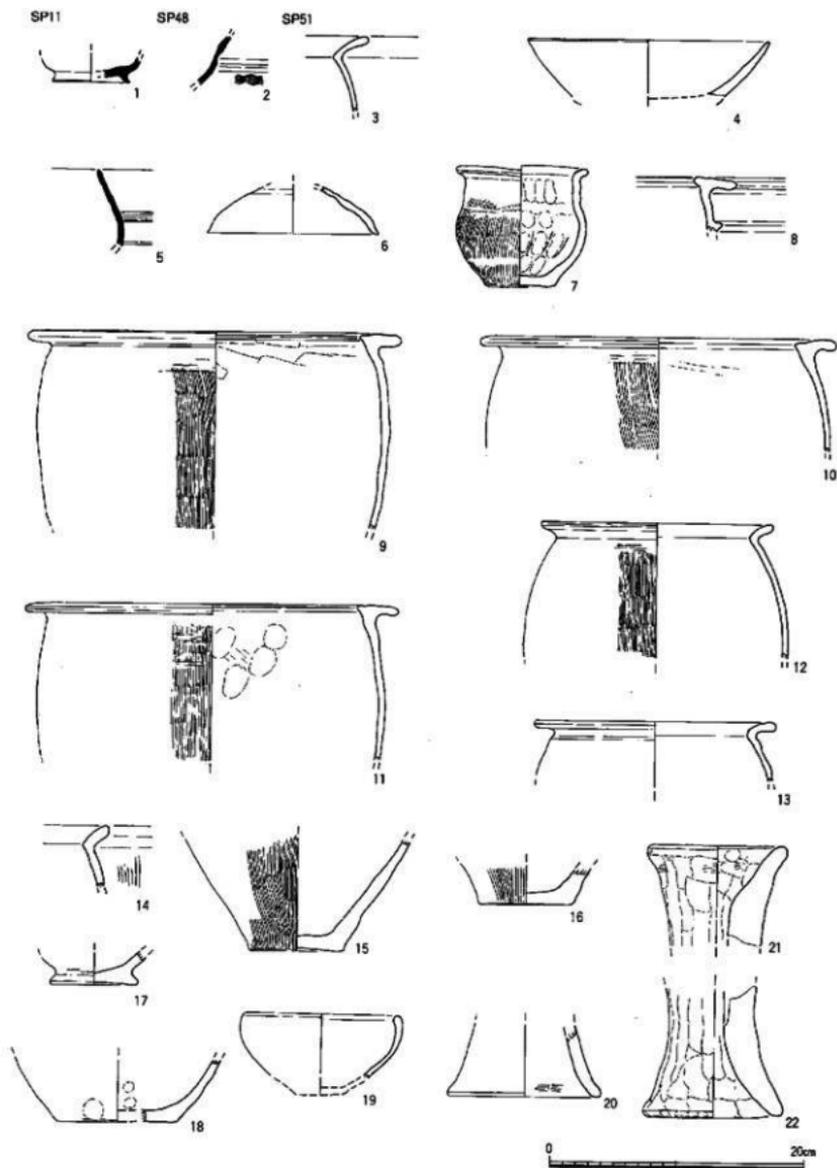


Fig. 40 ビット・包含層出土遺物 (1/4)

付 論

有田遺跡群第177次調査ST001-002から出土した弥生時代青銅鏡についての鉛同位体比

東京国立文化財研究所保存科学部

平尾良光

鈴木浩子

1 はじめに

福岡市教育委員会より、有田遺跡群から出土した青銅鏡2点に関して自然科学的な方法による調査の依頼があった。本調査は当研究室における「弥生時代青銅器の研究」の一環として、十分に研究協力する価値があった。そこで、資料の青銅材料に関して鉛同位体比法による産地推定を行い、自然科学的な面から考察した。

2 資 料

資料は福岡県有田遺跡群177次調査で発掘された前漢代の単圈銘帯鏡 (ST001出土) と韓鏡と考えられる小銅鏡 (ST002出土) である。前者は弥生時代中期末の、後者は後期初頭の甕棺墓内から出土した。各資料の遺跡名、遺構名、測定番号などの詳細と鉛同位体比値を表1に示した。また資料の写真を写真1・2に示し、その中に試料採取箇所を書き加えた。試料は○印内から鏝を採取している。

3 分析法

3-1 鉛同位体比法

1) 鉛同位体比法による青銅材料の産地推定

産地推定のために鉛同位体比法を利用した¹⁾。一般的に、鉛の同位体比は鉛鉱山の岩体が進えばそれぞれの鉱山毎に異なった値となることが知られており、産地によって特徴ある同位体比を示すことが今までの研究でわかっている。そこで、鉛の産地の違いが鉛同位体比に現れるならば、文化財資料に含まれる鉛の同位体比の違いは材料の産地を示すと推定される。古代の青銅には鉛が微量成分として0.01%程度、あるいは主成分の一つとして5~20%含まれている。鉛同位体比の測定に用いられる鉛量は測定器(質量分析計)の感度が非常に良いため、1マイクログラムの鉛があれば十分である。また資料は青銅の金属部分でも鏝部分でも、同位体比は変わらないと示されているので、資料からは鏝を微量採取するだけで十分である。これはほとんど非破壊と違って差し支えない。そこでこの方法を本資料の材料産地の推定に利用することを試みた。資料から鏝の一部を採取し、鉛を化学的に分離し、表面電離型質量分析計で同位体比を測定した²⁾。

2) 鉛同位体比の測定

資料から微量(1mg以下)の鏝を採取して、鉛同位体比測定用の試料とした。鏝試料を石英製のピーカーに入れ、硝酸を加えて溶解した。この溶液を白金電極を用いて2Vで電気分解し、鉛を二酸化鉛として陽極に集めた。析出した鉛を硝酸と過酸化水素水で溶解した。0.2 μ gの鉛をリン酸-シリ

カゲル法でレニウムフィラメント上に載せ、VG社製の全自動表面電離型質量分析計Sector-Jに装着した。分析計の諸条件を整え、フィラメント温度を1200℃に設定して鉛同位体比を測定した。同一条件で測定した標準鉛NBS-SRM-981で規格化し、測定値とした。

4 鉛同位体比の結果と考察

4-1 鉛同位体比測定値

測定した資料の鉛同位体比は表1で示した。得られた値を今までに測定された他の資料の値と比較し、図1に示した²⁰⁶Pb。

図1の鉛同位体比図において、縦軸が²⁰⁶Pb/²⁰⁸Pbの値、横軸が²⁰⁷Pb/²⁰⁸Pbの値とした図をA式図と呼ぶこととする。この図で鉛同位体比に関して今までに得られている結果を模式的に表わし、今回の結果をこのなかにプロットした。すなわち日本の弥生時代に相当する頃の東アジア地域において、Aは中国前漢鏡が主として分布する領域で、後の結果からすると華北産の鉛である。Bは中国後漢および三国時代の銅鏡が分布する領域で華南産の鉛である。Cは現代の日本産の大部分の主要鉛鉱石が集中する領域である。Dは多鈕細文鏡が分布する領域の中心線として示され、朝鮮半島産の鉛鉱石と一致した。またaは弥生時代の後期銅鐸が示したA領域の中でも特別な鉛を意味する領域である。

同様に縦軸が²⁰⁶Pb/²⁰⁸Pbの値、横軸が²⁰⁷Pb/²⁰⁸Pbの値とした図をB式図と呼ぶこととする。この図の中で、A'、B'、C'、D'は中国華北、華南、日本、朝鮮半島産の鉛領域を表わす。これらの図の中に本測定値を●で示した。

4-2 結果と考察

表1に今回測定した全資料の鉛同位体比を示した。以下、各資料ごとに考察を行った。

<単圈銘帯鏡；写真1>

単圈銘帯鏡の鉛同位体比値を表1に示し、図1にプロットした。図1のA式図において、単圈銘帯鏡は華北産の鉛を使用したと思われるA領域に位置した。B式図においても同様のことが言える。

発掘報告書⁶⁾によると、測定した鏡（面径7.55cm）は異体字銘帯鏡（単圈銘帯鏡）に分類され、岡村編年の漢鏡3期（前漢鏡）に属す。これまでの測定において、前漢鏡はA領域に位置する資料が多いので問題ないと思われる。

本資料は、重圈文系の大型鏡を除いた面径10cm前後以下の鏡としては6例目だが、その他の資料としてこれまでに吉武樋波62号甕棺墓（面径6.9cm）と隅西小田13地点23号甕棺墓（面径9.9cm）出土の鏡を測定している⁷⁾。それらの鉛同位体比を今回の単圈銘帯鏡とともに表2に示し、図2（A式図）にプロットした。前述で前漢鏡はA領域に位置する資料が多いと記したが、3点ともA式図において華北産の鉛を使用していると思われるA領域に位置した（B式図においても同様。ここでは省略した）。

<小銅鏡；写真2>

小銅鏡の鉛同位体比値を表1に示し、図1にプロットした。図1のA式図において、小銅鏡は華北産の鉛を使用したと思われるA領域に位置した。B式図においても同様のことが言える。

今回測定した小銅鏡は、韓鏡と位置づけられる鏡群の一つと考えられており、伝世と考えられる鏡

や時期不明鏡を除き、国内から出土した韓鏡は本資料を含め、福岡県横隈狐塚遺跡63号土壌墓・佐賀県二塚山遺跡46号甕棺墓の3点であるという¹⁰⁾。後者の2点はすでに鉛同位体比の測定を行なっている¹⁰⁾ので、本資料と比較するために表3にそれらの鉛同位体比値を示し、図3にプロットした。

これら3点の鏡の出土時期は、有田遺跡出土鏡；弥生時代後期初頭、横隈狐塚遺跡出土鏡；弥生時代後期前半、二塚山遺跡出土鏡；弥生時代後期前半であるが、互いに別地域と考えられ特に交流関係は見られないとのことである。鉛同位体比からこの3点の鏡を見てみると、有田遺跡出土鏡と二塚山遺跡出土鏡が華北産の鉛を、横隈狐塚遺跡出土鏡が朝鮮半島の鉛を使用していることがわかる(図3)。今のところは測定数が少ないので、このことが何を意味するかわからない。韓国から出土している同例の小銅鏡群の測定ができる機会が得られれば、推論の余地が加えられるだろう。

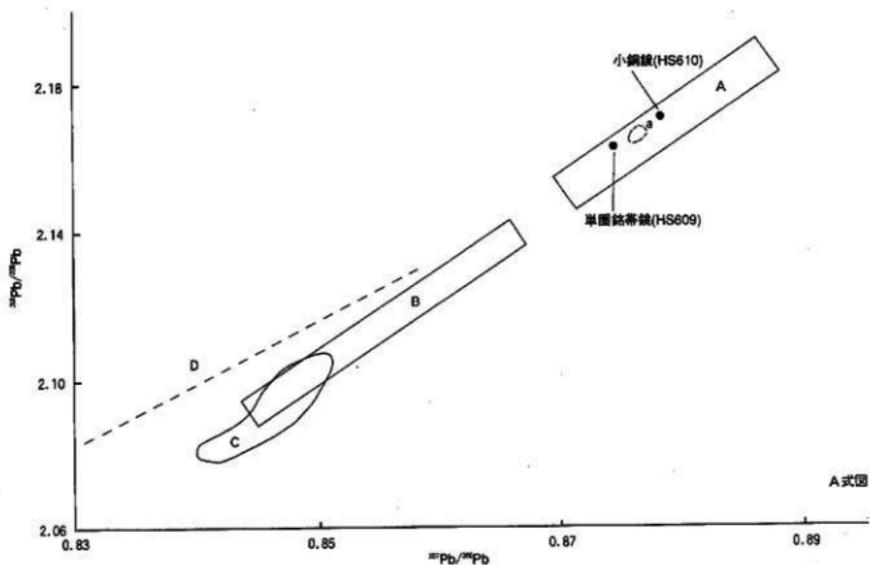
なお、鉛同位体比は材料の産地を推定しているのみで、鏡の製作地を推定しているのではないことを付記しておく。

6 引用文献

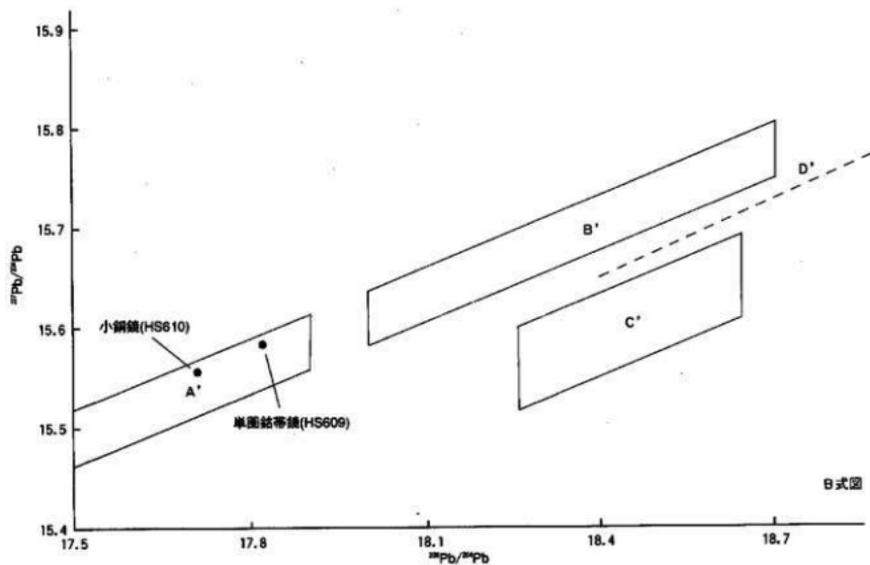
- (1) 平尾良光, 馬淵久夫: 表面電離型固体質量分析計VG-Sectorの規格化について; 保存科学28, 17-24 (1989)
- (2) 馬淵久夫, 平尾良光: 鉛同位体比法による漢式鏡の研究; MUSEUM No.370, 4-10 (1982)
- (3) 馬淵久夫, 平尾良光: 鉛同位体比から見た銅鐻の原料; 考古学雑誌68, 42-62 (1982).
- (4) 馬淵久夫, 平尾良光: 鉛同位体比法による漢式鏡の研究(二); MUSEUM No.382, 16-26 (1983)
- (5) 馬淵久夫, 平尾良光: 東アジア鉛鉛石の鉛同位体比-青銅器との関連を中心に-; 考古学雑誌73, 199-210 (1987)
- (6) 福岡市教育委員会: 有田・小田部28-有田遺跡群第175次・177次・179次調査報告一; 福岡市埋蔵文化財調査報告書第513集, 24-48 (1997)
- (7) 馬淵久夫, 平尾良光: 福岡県出土青銅器の鉛同位体比; 考古学雑誌75, 1-20 (1990).

表1 有田遺跡群第177次調査から出土した青銅鏡の詳細と鉛同位体比

測定番号	資料名	遺跡・遺構名	時代	$^{206}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$	$^{206}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$	$^{206}\text{Pb}/^{209}\text{Pb}$
HS609	半圓鏡背鏡	有田遺跡群第177次・ST001	弥生中期末	17.820	15.584	38.534	0.8745	2.1624
HS610	小銅鏡	有田遺跡群第177次・ST002	弥生後期初頭	17.710	15.556	38.434	0.8784	2.1702
誤差範囲				±0.010	±0.010	±0.030	±0.0003	±0.0006



A式図



B式図

図1 有田遺跡群第177次調査から出土した青銅鏡の鉛同位体比

表2 有田遺跡群第177次調査出土単圓銘帯鏡と類似した重圓文系統の鉛同位体比

資料名	遺跡・遺構名	$^{206}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$	$^{206}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$	$^{206}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{204}\text{Pb}$
単圓銘帯鏡	有田遺跡群・ST001甕棺墓	17.820	15.584	38.534	0.8745	2.1624
重圓文星雲鏡	吉武樋渡62号甕棺墓	17.824	15.576	38.493	0.8739	2.1596
重圓昭明鏡	隅西小田13地点23号甕棺墓	17.766	15.602	38.563	0.8782	2.1706
誤差範囲		± 0.010	± 0.010	± 0.030	± 0.0003	± 0.0006

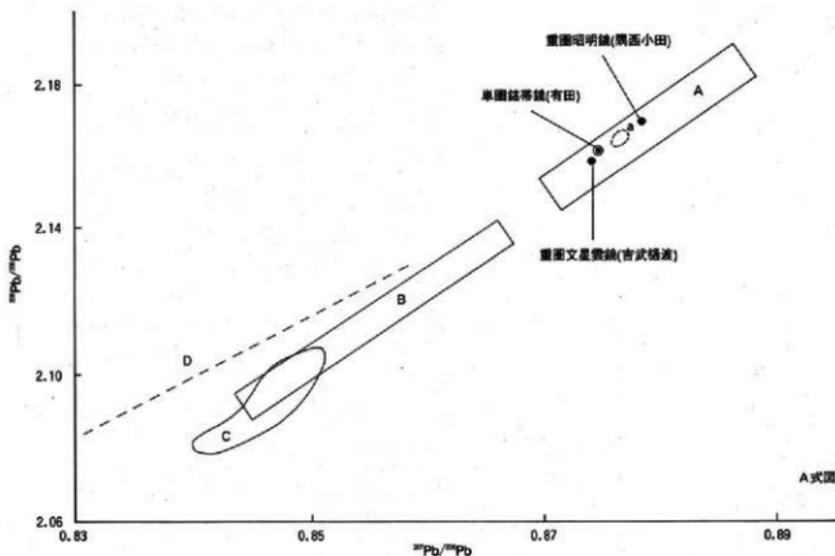


図2 有田遺跡群第177次調査出土単圓銘帯鏡と類似した重圓文系統の鉛同位体比



写真1 有田遺跡群第177次調査ST001から出土した単圓銘帯鏡（面径7.55cm）

表3 国内出土韓鏡の鉛同位体比

遺跡・遺構名	$^{206}\text{Pb}/^{207}\text{Pb}$	$^{206}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{208}\text{Pb}$	$^{207}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$	$^{208}\text{Pb}/^{206}\text{Pb}$
福岡県有田遺跡群・ST002甕棺墓 (HS610)	17.710	15.556	38.434	0.8784	2.1702
福岡県横隈狐塚遺跡63号土墳墓 ⁷⁾	18.618	15.691	39.204	0.8428	2.1057
佐賀県二塚山遺跡46号甕棺墓 ⁸⁾	17.675	15.520	38.293	0.8781	2.1665
誤差範囲	±0.010	±0.010	±0.030	±0.0003	±0.0006

*引用文献

- (4) 馬淵久夫、平尾良光：鉛同位体比法による漢式鏡の研究(二)；MUSEUM No.382, 16-26(1983)
 (7) 馬淵久夫、平尾良光：福岡県出土青銅器の鉛同位体比；考古学雑誌75, 1-20 (1990)

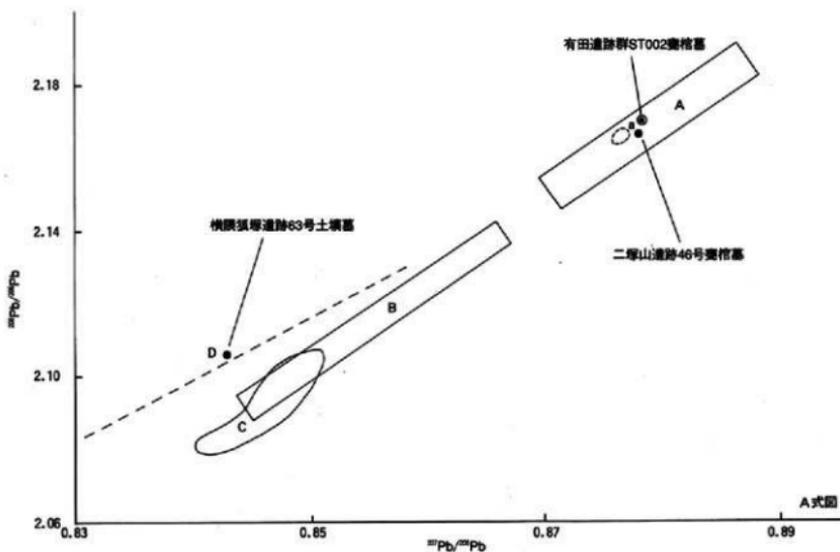


図3 国内出土韓鏡の鉛同位体比

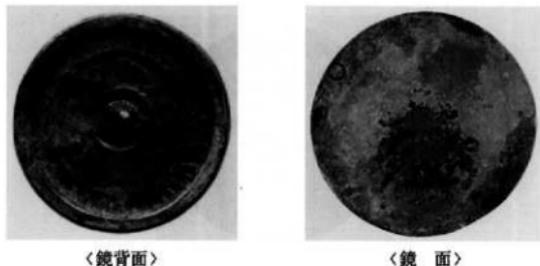


写真2 有田遺跡群第177次調査ST002から出土した小銅鏡 (面径5.1cm)

圖 版

PLATE



有田遺跡群周辺航空写真（1961年撮影）



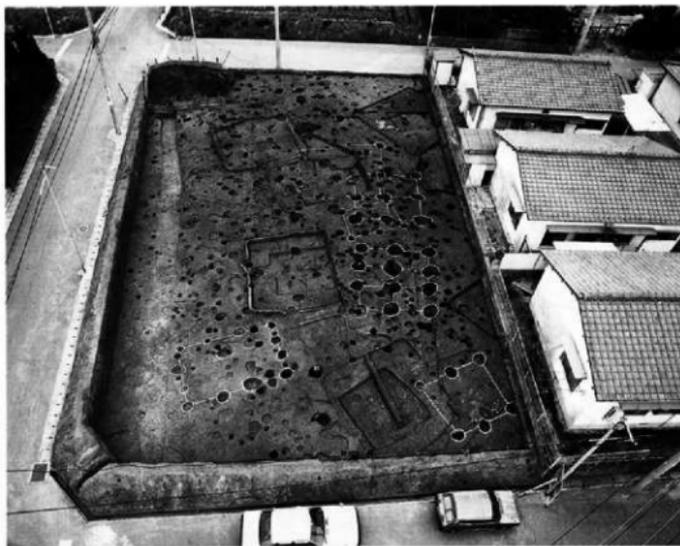
有田遺跡群周辺航空写真（1972年撮影）



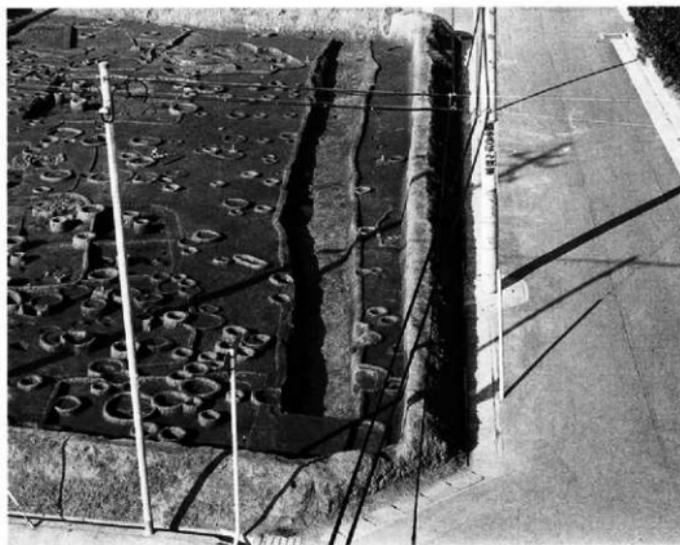
(1) 調査区全景（北東から）



(2) 同全景（南東から）



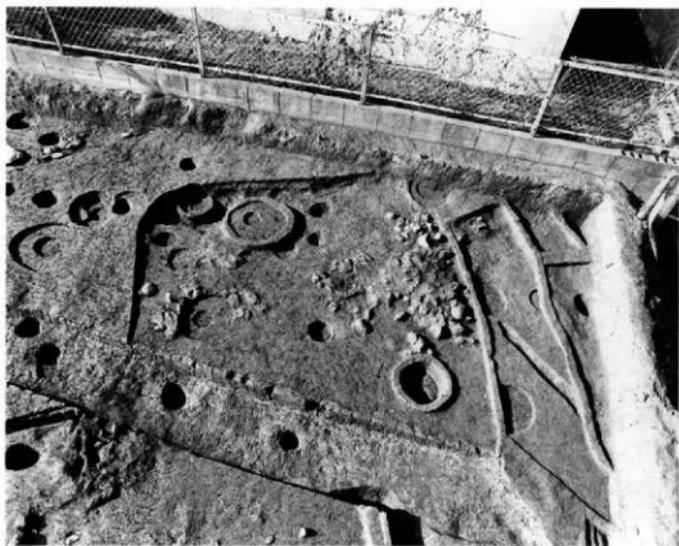
(1) 包含層完掘後全景 (北から)



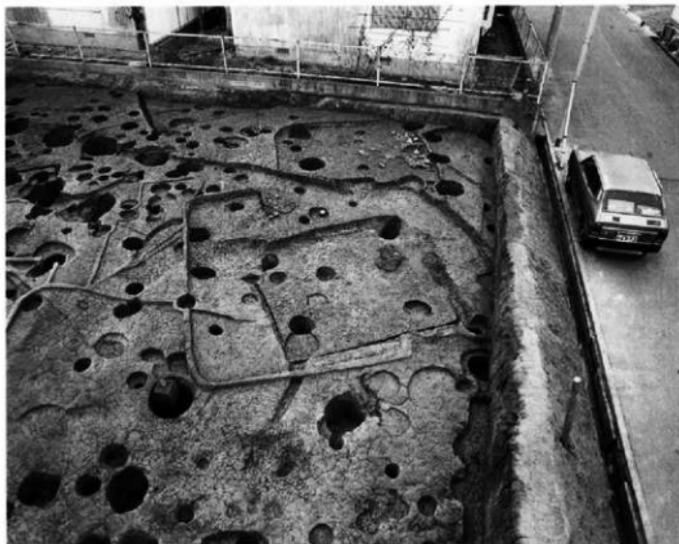
(2) SD01 (南から)



(1) SC01 (北東から)



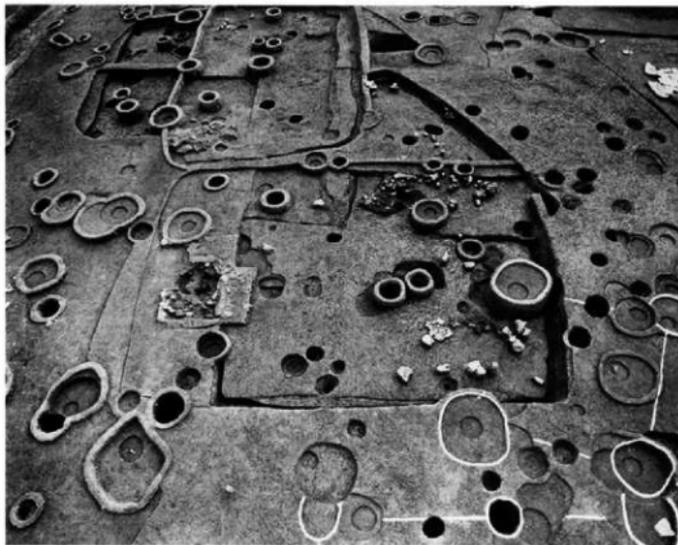
(2) SC02 (東から)



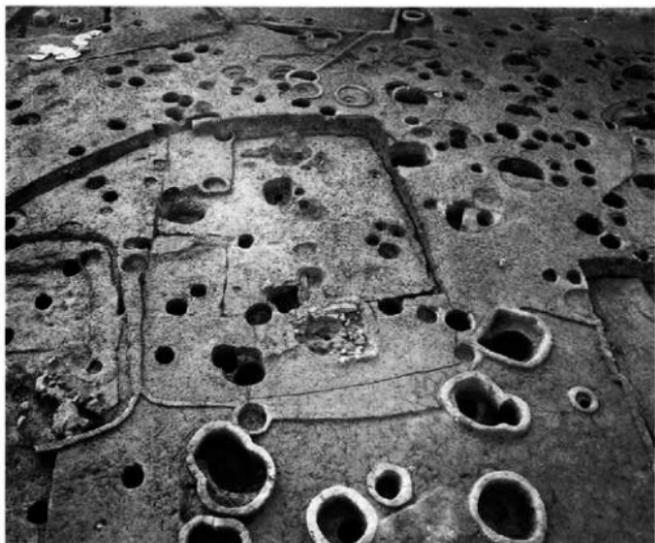
(1) SC07 (東から)



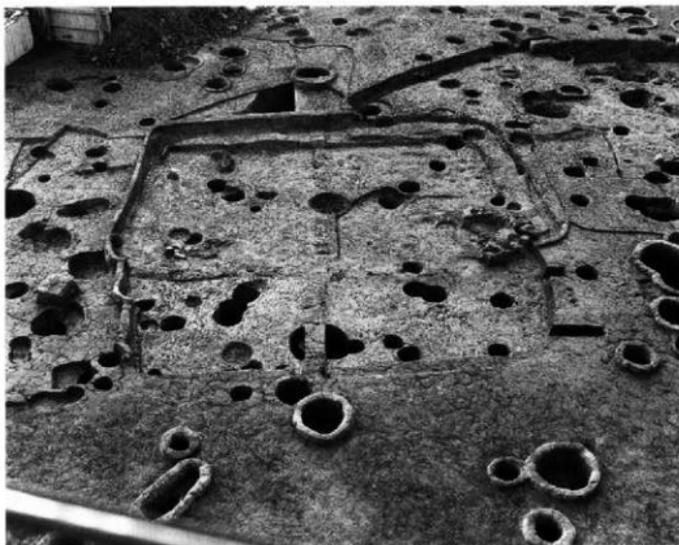
(2) SC10 (東から)



(1) SC14・15 (北から)



(2) SC14・15 (東から)



(1) SC12 (東から)



(2) SC15 (北東から)



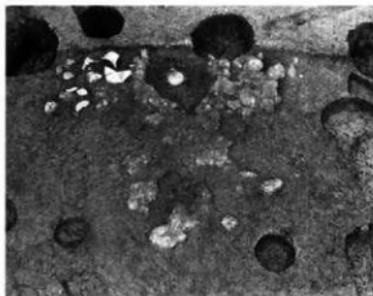
(1) SC19・23 (南東から)



(2) SC19・23 (北東から)



(1) SC18 (東から)



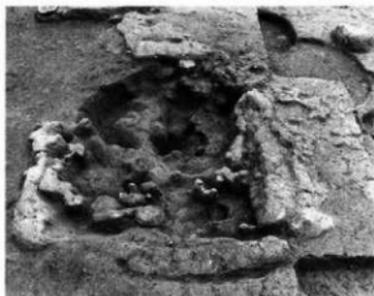
(2) SC02竈検出状況 (南から)



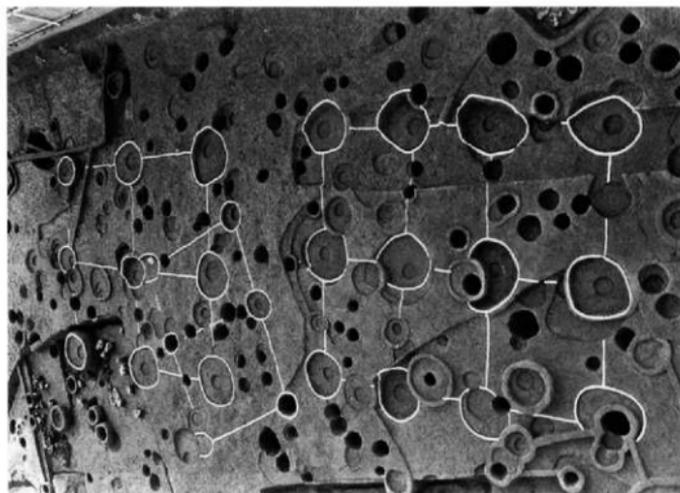
(3) SC07竈検出状況 (東から)



(4) SC12竈検出状況 (南から)



(5) SX01 1号炉 (北から)



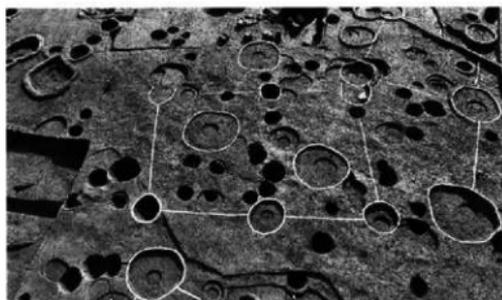
(1) SB01・02 (北から)



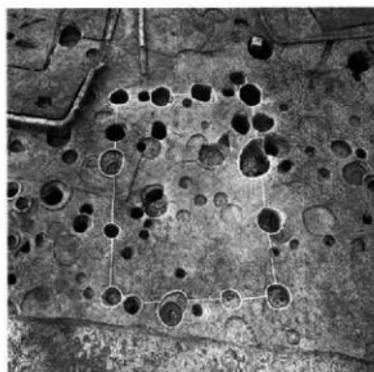
(2) SB01 (東から)



(3) SB02 (東から)



(1) SB03 (北から)



(2) SB04 (東から)



(3) SB06 (東から)



(4) SR01 (東から)



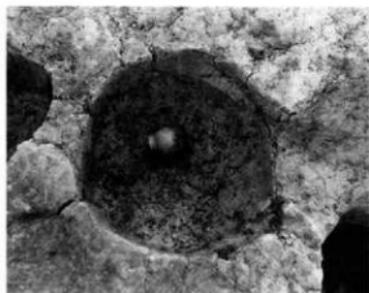
(5) 同土層断面 (西から)



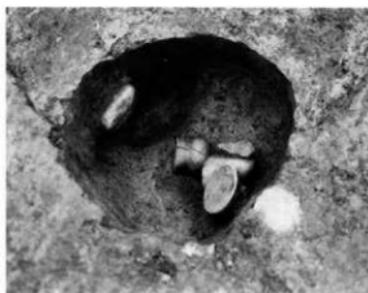
(1) SK03須恵器出土状況 (東から)



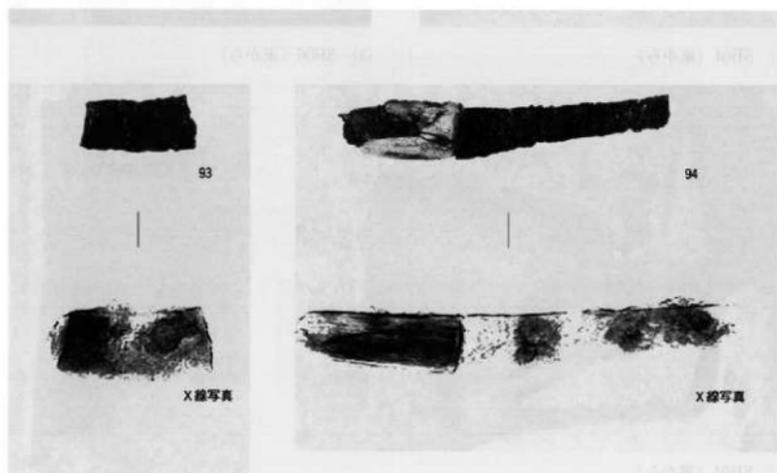
(2) SK04 (東から)



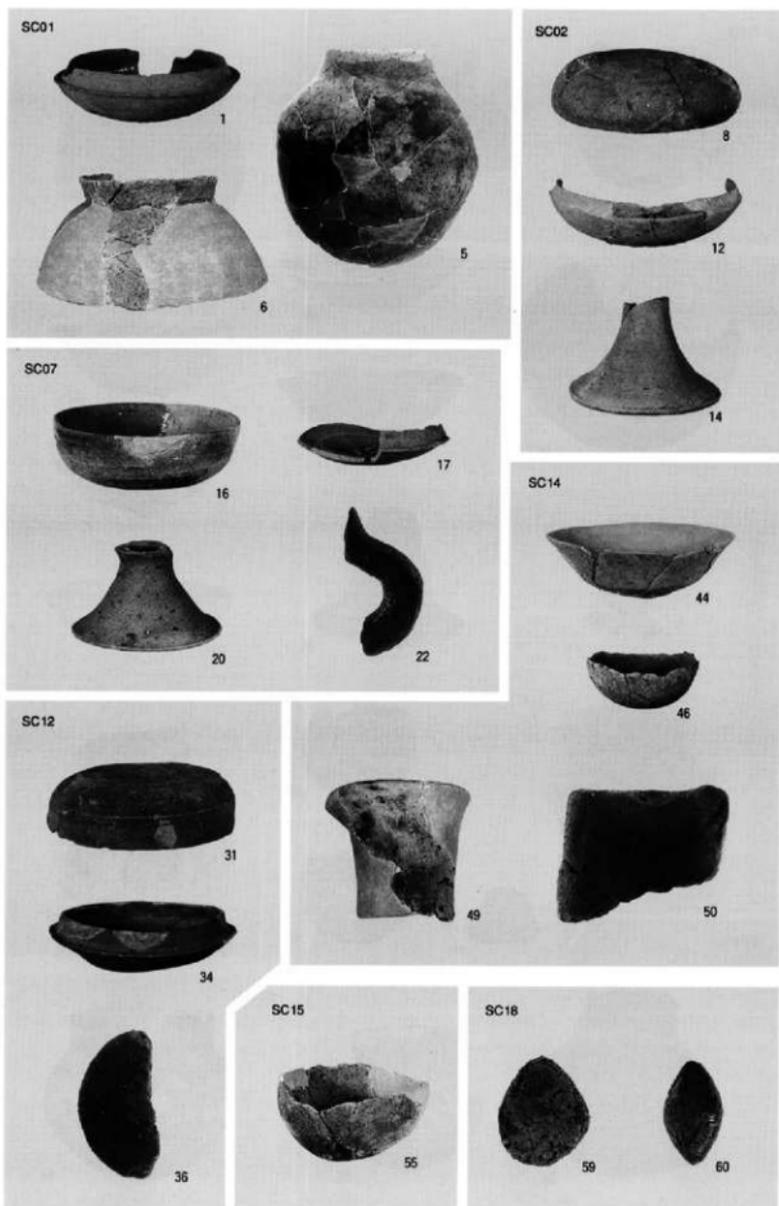
(3) SP343遺物出土状況



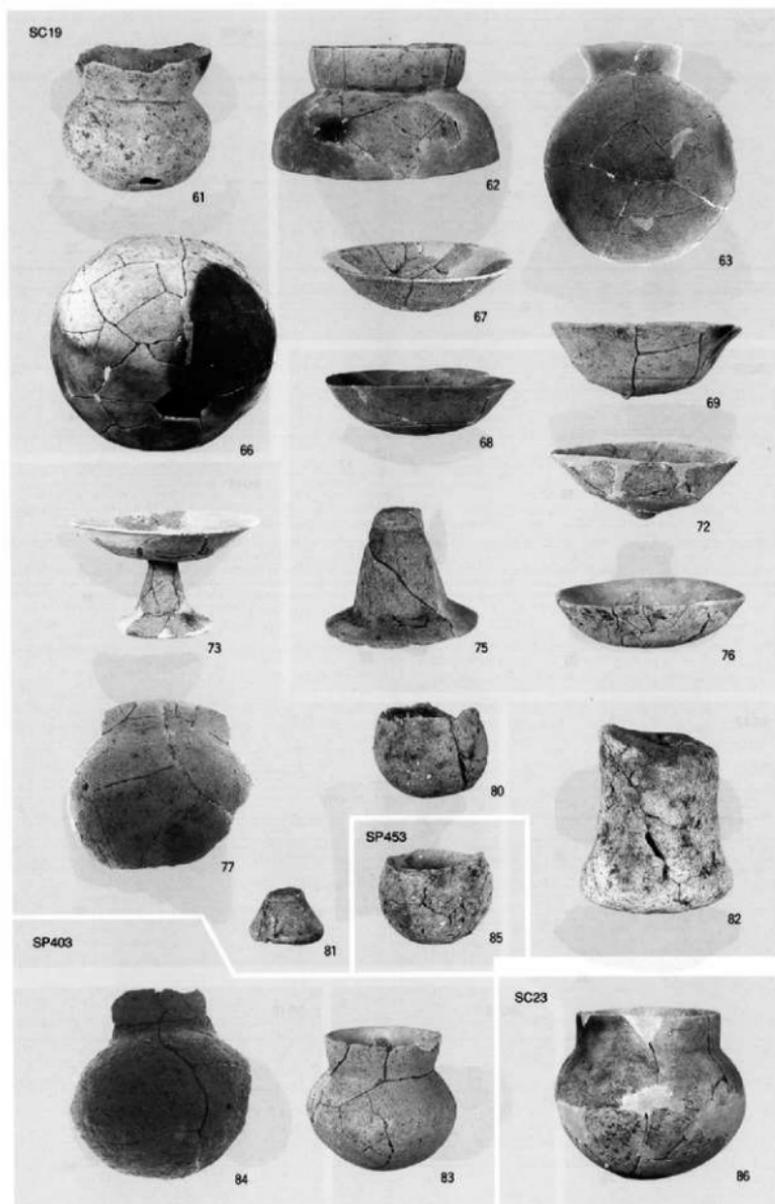
(4) SP459遺物出土状況



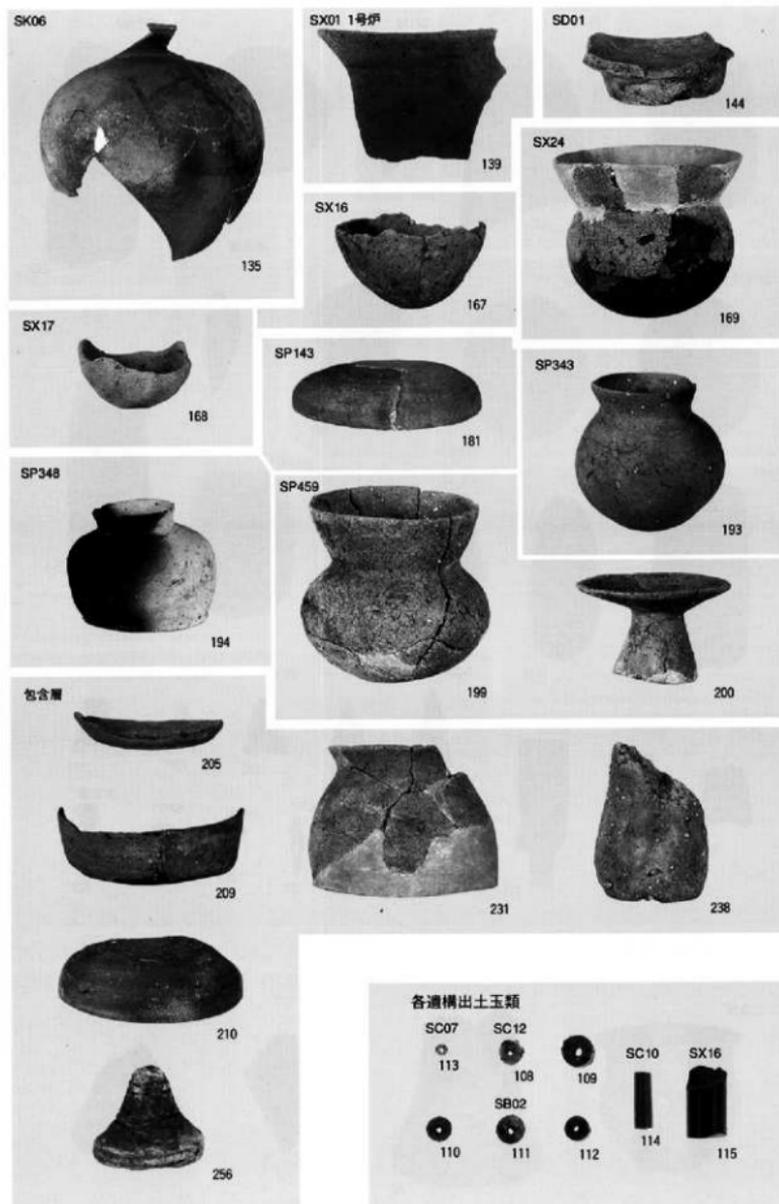
(5) SC01・19出土鉄器



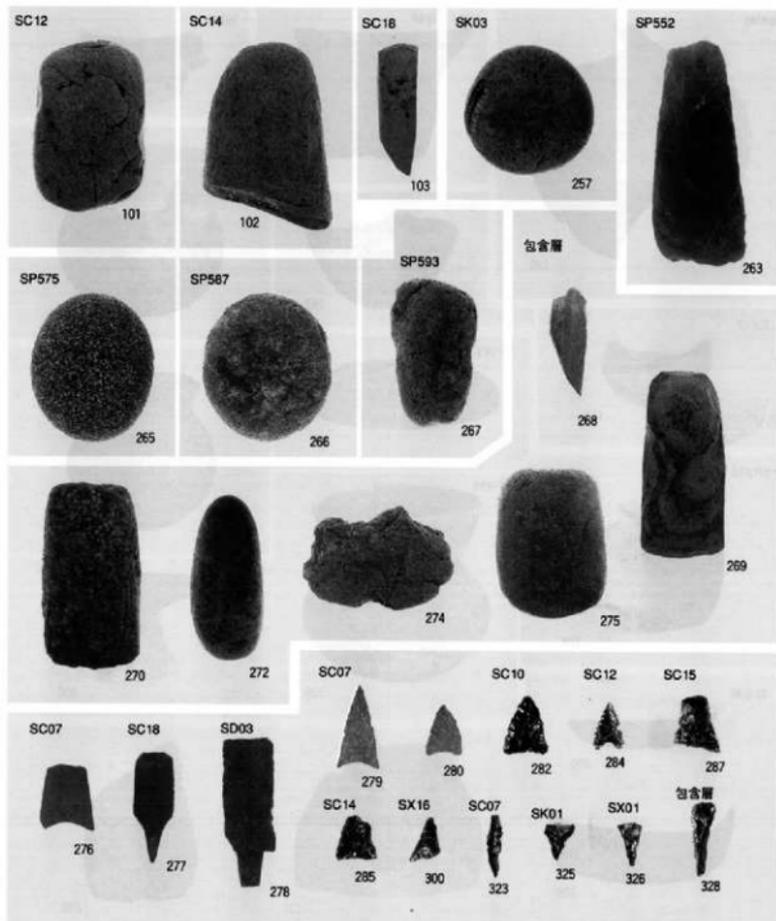
各竖穴住居跡出土遺物 1 (縮尺不統一)



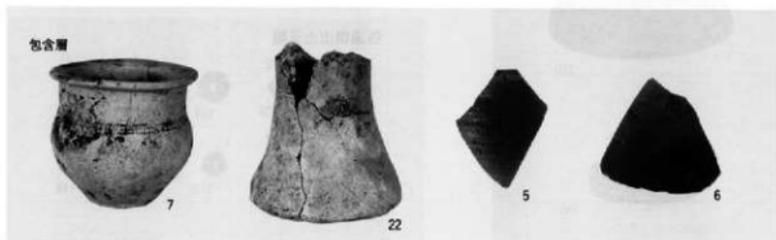
各壑穴住居跡出土遺物 2 (縮尺不統一)



各遺構出土遺物（縮尺不統一）



(1) 各遺構出土石器 (縮尺不統一)



(2) 第147次調査出土遺物 (縮尺不統一)

有田・小田部 第34集

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第651集

2000年(平成12年)3月31日

発行 福岡市教育委員会
〒810-8621 福岡市中央区天神1丁目8の1

印刷 株式会社ドミックスコーポレーション

